長野県埋蔵文化財センター年報 9

1992

財団法人

長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報9

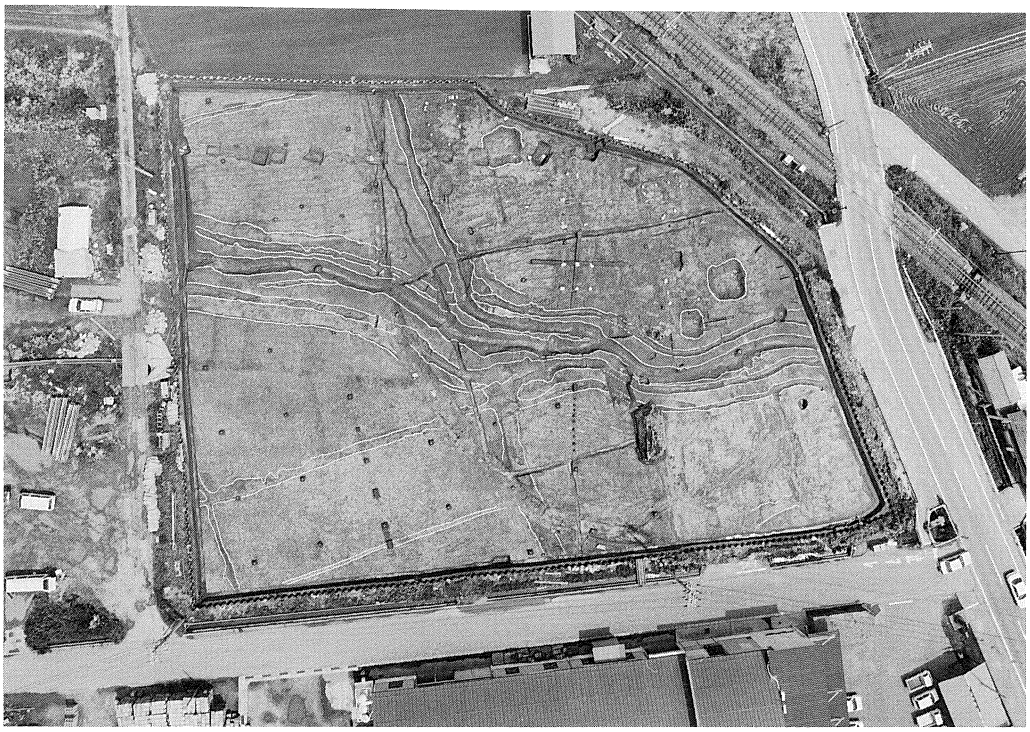
1992

財団法人

長野県埋蔵文化財センター

佐久市三田原遺跡敷石住居址

中野市清水山窯跡出土「佐玖郡」刻書



1．更埴市　屋代遺跡群③区　9世紀代条里水田・畠と水路

2．更埴市　更埴条里遺跡全景

3．佐久市　岩下遺跡の配石遺構を伴う敷石住居跡群

4．坂城町　観音平経塚　五輪塔群

序

㈶長野県埋蔵文化財センターも昨年十周年を迎え，新たな一歩を踏み出しました。

本年度は，事業量の増大，調査遺跡の広域にわたる分布に対応し，従来の長野・佐久に加え，新たに上田・中野に調査事務所を置き，調査体制の強化をはかりました。

発掘調査は，前年度から引き続きの上信越自動車道関連，オリンピックを目的とした県道関連に，新たに北陸新幹線関連が加わり，37遺跡を対象に実施しました。詳しい内容は本文に譲るとして，県内屈指の大規模な古代集落を調査した榎田遺跡や屋代遺跡，芝宮遺跡，中原遺跡，古代の多数の窯跡を調査した清水山・池田端窯跡，県内では初めての本格的な製鉄遺跡の調査となった清水製鉄遺跡など，学術上多くの貴重な資料を得ることができました。整理作業につきましては，北村遺跡の報告書の刊行，昭和63年より発掘調査した規模の大きな長野市内の石川条里遺跡等の整理作業を実施しました。特に，北村遺跡は，内陸部で縄文時代の多数の人骨が発見されたことで著名であり，報告書の刊行は今後考古学ばかりではなく人類学をはじめとした関連研究分野の発展にも大きな貢献ができると自負しております。

次に事業のもう一つの重要な柱である普及啓蒙活動も，遺跡の現地説明会や速報展を通して実施しましたが，埋蔵文化財に対する関心も高く毎回多数の方々に参加いただきました。

本書は，平成４年度に実施した発掘調査・整理作業・普及公開事業等について，その概要を掲載したものです。ぜひ，ご一読していただくなかで当センターの内容をご理解していただき，事業の円滑な推進にますますご協力下さいますようよろしくお願いします。

この間，平成５年３月に，当センターの埋蔵文化財調査も深く関わった，長野自動車道豊科IC～更埴JC，更埴JC～須坂長野東IC，上信越自動車道藤岡IC～佐久IC，が開通し，感慨の深いものがあります。

また最後になりましたが，日頃当センターの発掘調査をはじめとした諸事業にご協力，ご支援を賜っております関係各位に対し，厚くお礼申し上げるとともに，今後の変わらぬご指導とご支援をお願いいたす次第です。

平成５年３月

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長　宮　崎　和　順

目　次

口絵　カラー
上　佐久市三田原遺跡配石住居跡
下　中野市清水山古窒跡出土刻書「佐玖郡」
写真
1．更埴市　屋代遺跡群③区　9世紀代条里水田・畠と水路
2．更埴市　更埴条里遺跡全景
3．佐久市　岩下遺跡の配石遺構を伴う敷石住居跡群
4．坂城町　観音平経塚　五輪塔群
序
目次

Ⅰ　発掘調査及び整理作業の概要……1
1　概要……1
2　各調査事務所の事業……3
(1)　佐久調査事務所……3
＝上信越自動車道関係＝
1　芝宮遺跡群……5
2　中原遺跡群……7
3　下前田原遺跡群……10
4　長野原遺跡群……10
5　赤沼遺跡群……10
6　三子塚遺跡群……11
7　三田原遺跡群……13
8　岩下遺跡……18
9　郷土遺跡……22
10　深沢遺跡群……24
＝上信越自動車道関係　試掘調査＝
11　愛宕山域跡……25
＝北陸新幹線関係＝
12　金井域跡……26
13　土合遺跡……28
(2)　上田調査事務所……29
＝上信越自動車道関係＝
1　釜村田遺跡……31
2　野行田遺跡……31
3　中原遺跡……32
4　上原古墳群……34
5　山崎古墳・山崎遺跡……35
6　土井ノ入窯跡……36
7　観音平経塚……36
＝上信越自動車道関係　試掘調査＝
8　真行寺遺跡……38
9　桜畑遺跡……38
10　細田遺跡……39
11　森下遺跡……39
12　山の越遺跡……39
13　大日ノ木遺跡……40
14　下樋口遺跡……41
15　陣馬塚遺跡……41
16　山崎北遺跡……42
17　山田古墳群……42
18　東平古墳群……43
＝北陸自動車道関係＝
19　風呂川古墳……44
20　開畝遺跡……45
(3)　長野調査事務所……46
＝上信越自動車道関係＝
1　小滝遺跡……48
2　春山・春山Ｂ遺跡……49
3　前山田遺跡……51
4　榎田遺跡……52
5　清水製鉄遺跡……56
6　更埴条里遺跡……59
7　屋代遺跡群……63

＝上信越自動車道関係　試掘調査＝
8　大穴遺跡……67
＝北陸新幹線関係＝
9　弥勒堂遺跡……68
10　（仮）川中島遺跡……69
＝県道大町線関係＝
11　千見遺跡……70
12　米山遺跡……71
整理作業……72
石川条里遺跡出土木製品の樹種…73
(4)　中野調査事務所……79
＝上信越自動車道関係＝
1　飯田古屋敷遺跡……81
2　玄照寺跡遺跡……83
3　清水山窯跡……85
4　池田端窯跡……87
＝志賀・草津有料道路関係＝
5　栗林遺跡……90
II　普及・公開活動の概要
1　現地説明会・速報展……94
2　指導・研究会・学習会……99
3　刊行物……100
III　機構・事業の概要
1　機構……101
2　事業……102
平成4年度の役員及び職員

Ⅰ　発掘調査及び整理作業の概要

1．概要

平成４年度は，発掘調査が前年度から継続している上信越自動車道関係，オリンピックに関連した県道関係に，新たに北陸新幹線関係が加わった。整理作業はすでに発掘調査が終了した長野自動車道関係を実施した。なお従来長野と佐久の二調査事務所であったものを，新たに上田に調査事務所を置き，長野調査事務所中野支所を中野調査事務所に昇格させ四所体制で対応した。詳細は事務所ごとに報告し，概要を以下の一覧表に示す。

(1)　発掘調査

上信越自動車道関係

所在地	遺跡名	調査対象面積	契約面積	調査面	調査延面積	調査期間	調査員数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降調査面積	実施事務所
佐久市	芝宮	15,000	8,000 (745)	1	8,000 (745)	4.13～12.24	4	５年度継続調査	古墳～平安時代集落跡 竪穴住居跡159、掘立柱建物跡34、大溝１、溝８、土坑約1000、粘土採掘坑			佐久
小諸市	中原	11,000	6,000 (1,360)	1	6,000 (1,360)	8. 4～12.24	4	〃	古墳～平安時代集落跡 竪穴住居跡115、掘立柱建物跡50、溝１、土坑約250、円形周溝墓１、粘土採掘坑			〃
佐久市	下前田原	8,100	1,100	1	1,100	4.13～ 5.10 12.21～12.22	3	調査終了	な し			〃
小諸市	長野原	4,000	4,000	1	4,000	4.13～ 5.10	3	〃	な し			〃
〃	赤沼	7,000	7,000	1	7,000	4.13～ 4.20	4	〃	な し			〃
〃	三子塚	30,000	21,100	1	21,100	4.13～ 8. 4 11.17～11.26	4	〃	後期古墳１ 平安時代集落跡 竪穴住居跡12、掘立柱建物跡１、溝５			〃
〃	三田原	8,000	7,000 (480)	1	7,000 (480)	4.14～ 8.18	3	５年度継続調査	縄文時代中期末～後期、平安時代集落跡 竪穴住居跡16、(入口施設のある柄鏡形敷石住居跡を含む) 配石遺構１、土坑30、土器捨て場			〃
〃	岩下	11,000	10,000 (1,100)	1	10,000 (1,100)	8.11～12.18	3	〃	縄文時代前期・中期末～後期、古墳・平安時代集落跡 竪穴住居跡54、掘立柱建物跡８ 土坑約400、配石遺構２、中世竪穴建物跡			〃
〃	郷土	8,000	1,500 (280)	1	1,500 (280)	8.25～ 9. 4 10.19～10.24	2	〃	縄文時代中期～後期集落跡 竪穴住居跡29、溝２、土坑60、 野外埋甕５			〃
〃	深沢	11,000	8,000 (890)	1	8,000 (890)	11.24～12.18	2	調査終了	縄文時代後期土坑４、平安時代竪穴住居跡１、溝１			〃
東部町	釜村田	5,000	5,000	1	5,000	8.19～ 8.31	2	調査終了				上田
〃	野行田	4,000	2,000	1	2,000	9. 1～ 9.11	2	〃	小穴１			〃
東部町	中原	38,000	38,000	1	38,000	4.13～11. 6	3	調査終了	縄文前期～後期及び弥生・平安時代の集落跡 縄文時代住居跡　11（前期７・中期３・後期１） 弥生時代住居跡　２（後期２） 平安時代住居跡　４ 掘立柱建物跡　２（平安） 土坑　296基（縄文時代中心） 溝・流路　10（縄文～中・近世）	縄文時代早期、前期、中期、後期、晩期の土器・石器 弥生時代・平安時代の土器	○	〃
坂城町	上原古墳群	8,000	8,000	1	12,000	7. 6～ 9.17	3	〃	弥生時代～平安時代集落跡 弥生時代竪穴状道構　１（後期） 平安時代住居跡・竪穴状道構　２ 掘立柱建物跡　４（平安） 平安時代土坑　25基・同ピット　224基	弥生時代後期・平安時代の土器	○	〃
〃	山崎古墳	21,500	600	1	600	11. 8～12. 8	2	〃			7,500	〃
〃	山崎	19,000	600	1	600	11. 8～12. 8	2	〃			5,000	〃
〃	土井ノ入窯跡	6,000	4,000	1	4,000	12. 1～12.18	2	〃	炭焼釜（？）２基		○	〃
〃	観音平経塚	200	200	1	3,600	9.14～11.26	3	〃	中・近世火葬墓（五輪塔を伴う）	五輪塔（約420点）・経石 中世の蔵骨器（古瀬戸）・古銭	○	〃
更埴市	清水製鉄	14,000	14,000	1	20,000	4.21～12.22	3	〃	古墳時代：古墳（横穴式石室）１ 平安時代：製錬炉14、鍛練鍛冶炉20、炭焼窯10 製鉄関連の段８、工房（竪穴遺構）10、土壙50	古墳副葬品（直刀、鉄鏃、須恵器、金環、玉類）鉄滓３ｔ、羽口、刀子釘、平安時代土器	○	長野
〃	更埴条里	70,000	13,500	6～7	81,000	4. 6～12.22	8	〃	縄文時代：焼土15、建物１、土器集中17、 古墳時代：井戸１ 平安時代：水田、住居跡86、礎石建物跡２、掘立建物跡21、井戸11、溝100、土壙366、鍛冶炉１ 中　世：水田、木棺墓３	縄文土器、弥生土器、古墳時代前期の土器 平安～中世の土器・陶器、横櫛、銭貨	10,400	〃
〃	屋代	46,000	20,500	5～7	106,000	4. 6～ 1. 8	28	縄文中期包含層以外調査終了	縄文時代：中期包含層、後～晩期焼土、遺物集中 弥生時代：溝、焼土、遺物集中 古墳～平安時代：水田面２面（延23,000㎡） 住居跡300、礎石建物跡６、井戸40 溝350、土壙360、柱穴多数 中世～近世：井戸20、溝30、土壙10、柱穴多数	縄文土器・石器、弥生土器・石器、古墳時代土器、玉類、石製模造品 奈良～平安時代土器、鉄器、瓦塔、佐波理鋺、 中世土器・鉄器、曲物	16,250	〃

長野市	小　滝	8,000	2,000	2～6	5,000	5.11～7.17	2	調査終了	戦国時代～近世：整地面6、掘立建物3、竪穴遺構2 墓4、溝6、土壙14、石垣4	中～近世陶器・土器、人骨	○	長　野
〃	春山B	23,900	5,700 (740)	1	5,700 (740)	4.6～9.8	4	〃	弥生時代：住居8、周溝墓2、溝8、土壙60	弥生前～後期土器・石器	○	〃
〃	春　山	500	250	1	250	6.15～7.23	4	〃	弥生時代：包含層	弥生土器・石器	○	〃
〃	前山田	3,100	1,100	1～2	1,100	4.6～5.8	2	〃	近　世：礎石建物跡5、道路1、石列1、土壙17、柱穴100	近世陶器、銭貨、石臼、建築部材	○	〃
〃	榎　田	39,800	9,600 (140)	1～3	28,800 (140)	4.6～12.17	14	〃	弥生時代：中期住居跡26、後期住居跡65 古墳時代：住居跡212、沼1 時代未整理：土坑1,846、溝80	弥生時代・古墳時代・奈良平安時代の土器、 古墳時代木製品（建築部材、農具、武具、馬具　他）炭化米、玉類	○	〃
小布施町	飯田古屋　敷	6,300	5,425 (875)	1～4	7,500 (875)	8.18～11.10	1	〃	近世水田跡、中・近世流路跡	中・近世木製品	○	中　野
小布施町	玄照寺跡	7,200	6,375 (825)	1～2	6,000 (825)	7.2～11.27	4	〃	中・近世建物跡30、井戸3、火葬施設5、土坑70 溝30	中世土器、近世陶器、銭貨、木製品、五輪塔	○	〃
中野市	清水山窯　跡	5,000	4,000	1	4,000	9.7～12.17	3	〃	奈良時代窯跡3、土坑17、中世塚3	奈良時代須恵器、五輪塔	○	〃
〃	池田端窯　跡	16,000	16,000	1	16,000	4.3～8.4	6	〃	奈良・平安時代窯跡7、粘土採掘坑多数、 古墳時代住居跡1	奈良・平安時代須恵器、瓦	○	〃
総　合　計		454,600	230,550 (7,435)		420,850 (7,435)							

※（　）内は側道分の調査面積

県道バイパス関係

所在地	遺跡名	調査対象面積	契約面積	調査面	調査延面積	調査期間	調査員数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降調査面積	実施事務所
美麻村	千　見	800	800	1	800	7.6～8.7		調査終了	縄文時代：焼土1、遺物集中1 戦国～近世：建物4以上、溝7 近　代：建物2、土壙20、溝10	縄文土器 中～近世陶器	○	長　野
中野市	栗　林	50,000	26,150	1～3	30,650	4.1～12.18		調査終了	中世溝2 平安時代住居跡4 古墳時代住居跡13 弥生時代住居跡24、掘立柱建物跡4 縄文時代後期住居跡2、土坑39	中世陶器 土師器、須恵器、八稜鏡 弥生中期土器・石器 縄文土器・石器・植物遺体	○	中　野
合　計		50,800	26,950		31,450							

北陸新幹線関係

所在地	遺跡名	調査対象面積	契約面積	調査面	調査延面積	調査期間	調査員数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降調査面積	実施事務所
佐久市	金井城跡	14,500	14,500	1	14,500	4.13～10.29		調査終了	中世城郭竪穴建物跡127、掘立柱建物跡15 空堀、溝4、橋脚跡1、土坑142			佐　久
浅科村	土　合	4,200	4,000	1	4,000	11.9～12.4		〃	縄文時代後期・古墳時代竪穴住居跡各1 縄文時代前期土坑1、平安時代・中世土坑45			〃
上田市	風呂川古墳	200	200	1	200	7.10～7.11		〃	古墳周溝			上　田
坂城町	開　畝	3,500	3,500	1	3,500	7.6～7.30		〃	平安時代住居跡　6　掘立柱建物跡　1 土坑（平安～中世）41基			〃
長野市	川中島	1,000	1,000	1	1,000	12.14～12.25		継　続	近　世：畦畔2、水路1、水田面1、足跡・稲株多数			長　野
合　計		23,400	23,200		23,200							

(2)　試掘調査

上信越自動車道関係

所在地	遺跡名	遺跡の性格	調査対象面積m²	調査実施面積m²
小諸市	愛宕山城跡	城　跡	11,000	130
東部町	真行寺	集　落	13,000	271
〃	桜　畑	〃	5,000	70
〃	細　田	〃	9,000	818
〃	森　下	〃	45,000	1,632
〃	山の越	〃	14,000	448
上田市	陣馬塚古墳	古　墳	9,000	
〃	下　樋　口	集　落	200	68
〃	大日ノ木	〃	9,500	502

所在地	遺跡名	遺跡の性格	調査対象面積m²	調査実施面積m²
坂城町	山田古墳群	古　墳	4,000	8
〃	山崎・山崎古墳群	古墳・集落	20,250	1,610
〃	山崎北	集　落	1,500	72
〃	東平古墳群	古　墳	12,000	1,123
更埴市	大　穴	集　落	7,000	664
小諸市	岩　下	〃	11,000	420
小布施町	飯田古屋敷	〃	6,000	500
〃	玄照寺跡	〃	6,000	400
合　計			183,450	8,736

(3)　整理作業

長野自動車道・上信越自動車道関係

地　区	遺跡名	調査面積m²	作業内容	備　考	実施
明科町 坂北村、更埴市 長野市	北村	21,530	図版作成、図表等作成、原稿執筆	平成4年度出版	
	向六工・十二・子尾入・古司・鳥林・小坂西・鶴萩七尋岩陰	19,380	〃		
	鶴前	11,300	〃		
	石川条里	70,000	遺物実測、図版作成、遺物分類等		
	篠ノ井	18,600	〃　（木製品保存処理）		
	松原	46,000	〃		
	川田条里	104,960	遺構図等の照合、遺物分類等 〃　（木製品保存処理）		

※この他、平成4年度発掘調査を実施した各遺跡の図面整理、照合、遺物の洗浄等を行った。

2．各調査事務所の事業

(1) 佐久調査事務所

発掘調査の概要

調査区域	佐久市小田井，小諸市御影新田・平原・八満・甲・滋野，浅科村甲
発掘調査遺跡	12遺跡（佐久市金井城跡・芝宮遺跡群・下前田原遺跡群，小諸市中原遺跡群・長野原遺跡・赤沼遺跡・三子塚遺跡群・三田原遺跡群・岩下遺跡群・郷土遺跡・深沢遺跡群、浅科村土合遺跡）
調査表面積	金井城14,500㎡　芝宮8,745㎡　下前田原1,100㎡　中原6,000㎡　長野原4,000㎡　赤沼7,000㎡　三子塚21,100㎡　三田原7,480㎡　岩下11,100㎡　郷土1,780㎡　深沢8,890㎡　土合4,000㎡　合計95,695㎡
試掘調査遺跡	1遺跡（愛宕山城跡130㎡）
発掘調査期間	平成4年4月13日～同年12月24日

今年度は従来の上信越自動車道関係に加え，新たに北陸新幹線関係の調査を本格的に実施した。調査体制も拡充を図り4班編成で調査を開始したが，後半は遺跡内容と調査期間に応じて5班に編成替えして対応した。

上信越自動車道関係では，三田原遺跡群と岩下遺跡において縄文時代中期末葉から後期前半の集落跡を調査した。両遺跡で検出した後期前半の敷石住居跡群と列石は，その配列状況に基本的に共通性が認められ，小規模ながらも環状集落として捉えられる興味深い所見を得ている。これらの調査成果は，縄文時代中期中葉から後葉を中心とする郷土遺跡の調査例とともに浅間山麓における該期集落の構造的解明に向けて貴重な資料を提供したといえる。

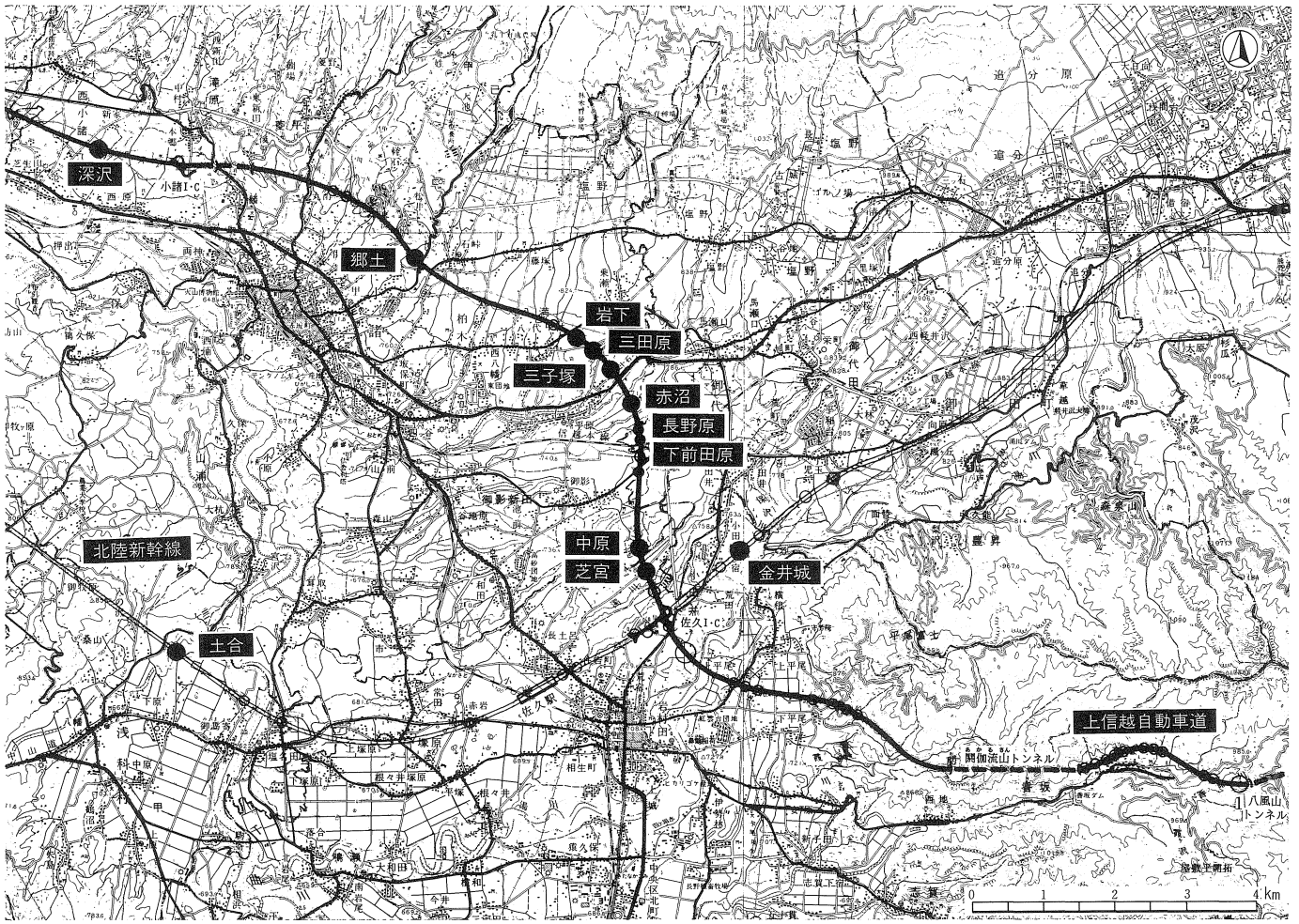
芝宮遺跡群と中原遺跡群は浅間火山の裾野に展開する田切り台地上に立地し，両遺跡は幅55m比高差15mの大規模な田切りを隔てて所在する。調査の結果は古墳時代から平安時代にかけて継続的に営まれた集落跡を検出し，遺構配置や検出状況等から判断すると，この田切りの形成時期は比較的新しく，両遺跡は同一集落であった可能性が高い。周辺の遺跡立地・規模・性格等について再考を要するところである。

この外，三子塚遺跡群は平安時代の集落跡と煙滅古墳の残存施設を調査し，深沢遺跡群は縄文時代後期の陥し穴と推定される土坑を検出した。下前田原・長野原・赤沼の各遺跡についてはその中心部からはずれたため，遺構は検出できなかった。

北陸新幹線関係では佐久市金井城跡と浅科村土合遺跡の2遺跡について調査を実施し，金井城跡は二郭を中心とする調査から，かつての佐久市教委による調査成果に新知見を加えることとなり，大規模な城郭の構造解明に重要な手がかりを得た。土合遺跡は典型的な河岸段丘上の遺跡で，村教委が実施した同遺跡の試掘結果と合わせ，遺跡全体が縄文時代前期から室町時代に及ぶ複合遺跡であることが判明した。

整理作業の概要

今年度調査遺跡の記録整理を中心に，出土遺物の保存処理・洗浄・注記・接合・復元作業を行った。また，前年度に報告書を刊行した佐久市内遺跡（下茂内・栗毛坂等）については収納整理を完了させ，遺物・記録類は一括して上田収蔵庫へ移管した。



地図１　佐久調査事務所関係調査遺跡（１：100,000）

上信越自動車道関連

1　芝宮（しばみや）遺跡群

所　在　地：佐久市大字小田井字下曽根35ほか　　調査担当者：藤原直人　輿水太仲
調 査 期 間：平成４年４月13日～同年12月24日　　桜井秀雄　白鳥喜一郎
調 査 面 積：8,745㎡　　田村　彬
遺跡の立地：浅間山麓南斜面末端部の田切り谷に挟まれた台地上
時代と時期：古墳時代後期～平安時代
遺跡の特徴：古墳時代後期～平安時代の集落

主な出土遺物

土　　器：古墳時代後期～平安時代の土師器，須恵器，灰釉陶器
石　製　品：管玉・勾玉・臼玉・なつめ玉・切子玉・丸小玉・紡錘車・磨石・凹石・コモ編み石・砥石
金 属 製 品：海獣葡萄鏡・鉄鏃・刀子・鋤先・鎌・針・鋏・馬具・釘・金環・紡錘車
骨　　類：不明骨製品・馬・牛・猪・鹿・鳥など
そ　の　他：櫛・羽口・鉄滓など

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	溝
古墳後期	160	約34	約1000	9
奈良・平安				

芝宮遺跡群は佐久市の北部，浅間山麓南斜面の末端部に位置し，田切り地形の台地上，標高745～749mに位置する。遺跡の南東は浅間火山の裾野1,000m付近から発し田切り谷を形成しながら流下する濁川（比高差約15m）に接する。その対岸には長土呂遺跡群（当センターにより平成２年度調査を実施）がひろがる。北西には深い田切り谷（比高差約12m）を隔てて中原遺跡群（当センターにより平成３年度から調査中）が存在する。

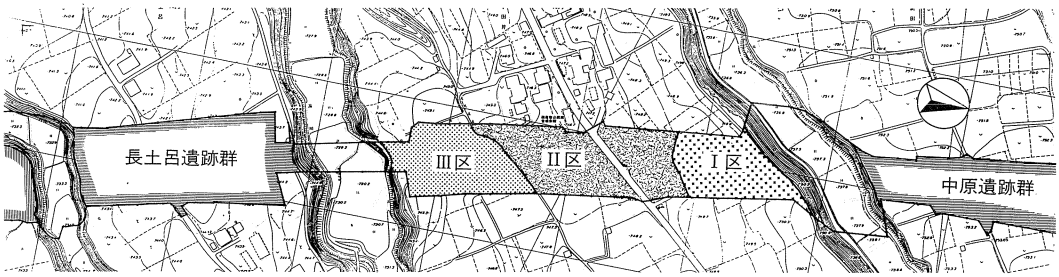
今回の調査は上信越道の建設工事に伴うもので，その調査対象総面積は15,990㎡，うち本年度調査総面積は8,745㎡，残り7,245㎡は平成５年度において継続調査の予定である。

調査区は北部をⅠ区・中央部をⅡ区・南部をⅢ区に分割し，今年度はⅠ・Ⅲ区を調査した。

竪穴住居跡のあり方はⅠ区とⅢ区で必ずしも同じではない。Ⅰ区ではカマドの設置される方向がほとんど北向きであるのに対して，Ⅲ区では北向きが７，東向きが３の割合で存在する。またⅠ区では井戸状の掘り込みが５基確認されているが，Ⅲ区では検出されていない。

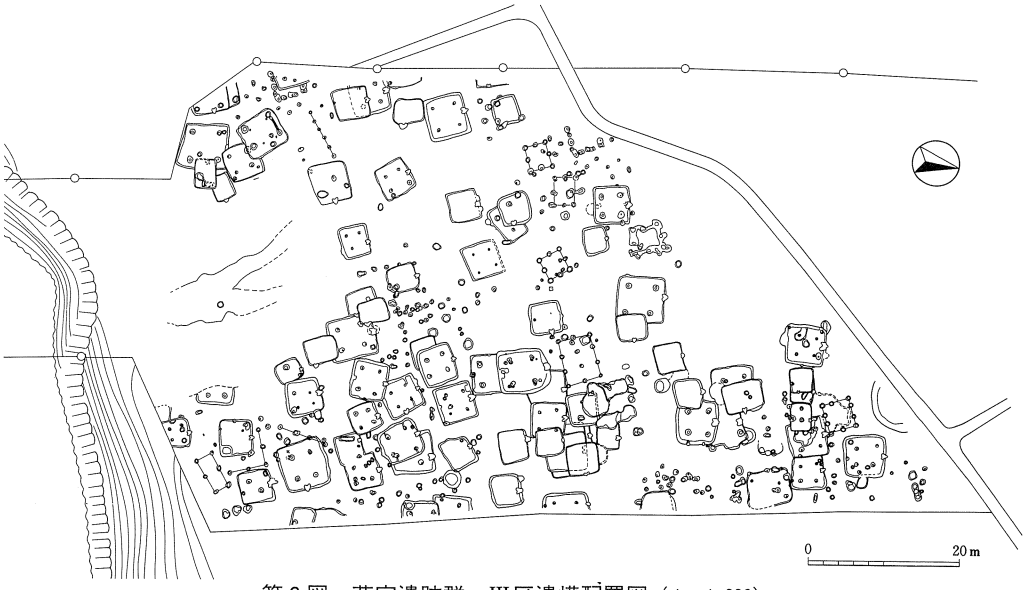
Ⅰ区・Ⅲ区に共通の事項としては竪穴住居跡の構造がある。主柱穴以外に壁柱穴を持つものと住居跡の床面に間仕切り痕を残すものなどが数軒確認されていることである。

大溝はⅠ区の中央部より東寄りに北から南に走る形で検出された。上部の幅は５～10m，深さ約３mで，断面形はＶ字形である。底面は北から南に緩やかに傾斜し，底部付近は砂礫の堆積が著しい。底部断面形はＵ字状で，水による浸食を受けたことが考えられる。しかし，大溝の北端は田切りの崖（現在：比高差約12mを測る）によって分断されており，その砂礫をもたらした流水がどのように侵入したか問題であり，田切り地形形成の問題と考え合わせると興味



第１図　芝宮遺跡群　調査範囲（１：4,000）

第２図　芝宮遺跡群　Ⅰ区遺構配置図（１：1,000）



第３図　芝宮遺跡群　Ⅲ区遺構配置図（１：1,000）

の残るところである。

遺跡のある佐久市北部は浅間火山のもたらした追分第一軽石流「Ｐ１」が厚く堆積している。「Ｐ１」は浮石火山灰層で水触抵抗力が弱く，小さな流れでも浸食され田切り地形を形成しやすい。本年度から調査を実施している田切り谷を隔てた北隣の中原遺跡の状況（竪穴住居跡が田切り谷の浸食によって消失している）や本遺跡の大溝の状況は，田切り地形形成の従来の漠然とした概念（「田切りの形成は有史以前の所産ではないか？」）を再考させる有効な資料と成りうると思われる。

大溝の時期は，下層（砂礫層）から古墳後期の土器が，上層から平安時代の土器が出土していることから，古墳時代の後期に形成され平安時代の頃にはかなり埋没し，平安時代の終焉時には廃絶，そして中世に至っては完全に埋没していたと考えられる。なおこの大溝はＩ区で見られるもののIII区では検出されなかった。その細部の状況・区画制・方向等の検討は来年度予定のII区の調査を待たなければならない。

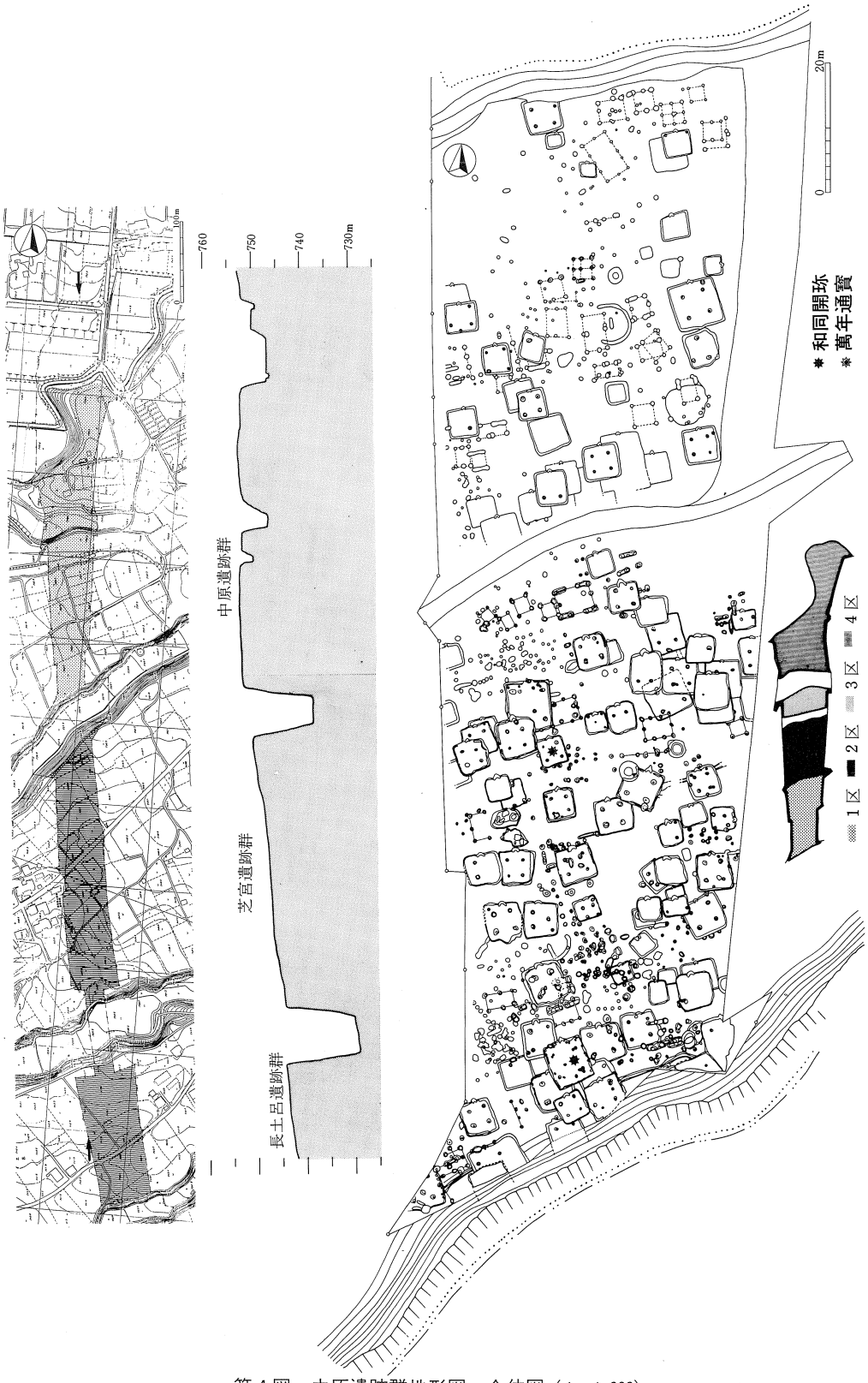
遺構の調査に伴って多くの遺物が出土したが，土器の中では灰釉陶器・墨書土器，金属製品では海獣葡萄鏡、鉄製の農具・馬具・鏃・刀子，骨類では牛馬を主体とする獣骨等が注目される。墨書土器については現在整理作業中だが，数十点が出土し「佐」や「王」などが見受けられる。

古墳時代後期から奈良・平安時代の大規模な集落遺跡が，佐久市・小諸市・御代田町と広範囲に分布し，すでにいくつかの調査も実施されかなりの資料が提示されつつある。今後の調査研究の成果と合わせてこれらの遺跡群は東山道、佐久平の開発，あるいは牧との関連や，更には田切り谷の形成，II区に伸びると予想される大溝の性格の解明等今後の研究課題は多い。

2　中原（なかはら）遺跡群

所　在　地：小諸市大字御影新田字中原75ほか　　調査担当者：近藤尚義
調査期間：平成４年８月３日～同年12月24日　　尾台　昇
対象面積：7,360㎡　　木内英一
遺跡の立地：浅間山麓南斜面末端部の平坦な台地　　征矢野安政
遺跡の時期・特徴：古墳時代後期～平安時代の集落
主な検出遺構：竪穴住居跡約130軒・掘立柱建物跡約30棟・土坑150基以上・粘土採掘跡約10ケ所
主な出土遺物：古墳時代後期から平安時代の土師器・須恵器・勾玉・紡錘車（石製・鉄製）・臼玉・銭（和同開珎・萬年通寶）・金属器（金環・鉄鏃・刀子など）

中原遺跡群は佐久市教育委員会が調査した聖原遺跡群の北，小諸市教育委員会・佐久市教育委員会・御代田町教育委員会が調査した前田遺跡を始めとする古墳時代から平安時代にいたる大規模な集落遺跡群の南にある。遺跡は浅間火山を北に望む広大な平坦な台地上に位置し発掘調査以前は畑作地帯であった。



第４図　中原遺跡群地形図・全体図（１：1,000）

調査は調査区内を東西に横切る田切りと呼ばれる谷を中心に１～４区に分割し，平成４年８月３日から比高差約12mある田切りを経て芝宮遺跡群と接する，調査区南の１区から調査を開始した。その結果，古墳時代末から平安時代初頭にかけて営まれた集落遺跡であることが判明した。住居跡相互の切り合いや掘立柱建物跡との重複が多いこと，遺構密度が高いことなどから調査の進行は難航した。

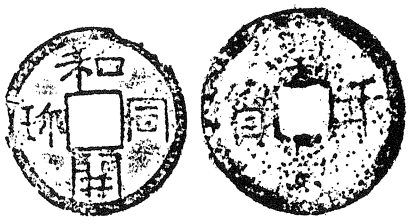
本遺跡群の基盤は浅間火山の噴出したAs－PF1（今から約１万３千万前）と呼称される火砕流による堆積物が，数十メートルあるといわれる。また，遺跡の詳細は今後の検討に委ねる事柄が多いが，現時点での重要な所見について，以下に列挙してみたい。

地形形成と遺跡の立地中原遺跡群から平成２年度調査の長土呂遺跡群の地形は，浅間火山から続く連続した緩やかな傾斜上に位置していることがわかる。その傾斜面に交差するように東西に田切りがそれぞれの遺跡群を分断している。その田切りと集落との関わりを考える所見が１区で以下のように得られた。１区の最南端は６件の住居跡が現在の田切りに浸食され，中には住居跡の南半分を消失している。その中で一番新しい住居跡は平安時代初頭の住居跡である。田切りの形成と集落域の限界を考えていくと本事例は不自然であり，集落が営まれた頃は田切りの幅が現在のものより狭かった可能性が高いと思われる。このことから現在は芝宮遺跡群と中原遺跡群と別の名称がついている両遺跡は，この田切りの深さ・幅が現在とは大きく異なるものであるなら，即断はできないが当時同一集落であった可能性も考えられようか。

しかし，遺物からは両遺跡群で出土遺物の相違が看取される。現時点で芝宮遺跡群は，９世紀代の灰釉陶器が多く出土している。それに対して，本遺跡群の現在までの検出および洗浄状況では出土していない。このことは両遺跡群の集落の在り方を考えていく一つの問題点としてあげられよう。

粘土採掘跡今回集落内でカマドの構築材として使われたと考えられる粘土採掘跡を検出した。検出されたのは，色調が乳白色とややピンク色（カマド内の２次的な熱変色ではない）の粘性がある土で，その生成は佐久市教育委員会で調査の長土呂遺跡群聖原遺跡の所見によると繰り返し堆積した浅間火山の火砕流による火山灰の熱変成であることがわかってきている。これが地表上・地表近くにまで吹き上げてきたものを採掘しているようである。このことから「粘土」と呼称する点に疑問があるが，今後の検討の余地も考慮し便宜的に使用した。

遺構について芝宮遺跡群１区北側の遺構の重複状況と本遺跡群１区の状況とは類似する。２区南側までその状況が続くが北側にいくほど住居跡は減少し掘立柱建物跡が多く存在している。また，検出された竪穴住居跡のカマドは主に北辺のセンターにあり，他の２軒は東の中央のカマドと１軒南東のコーナーカマドが存在するのみである。また，特筆すべき出土遺物として，１区の２住居跡からは共に床面直上から「和同開珎」・「萬年通寶」が出土したことがあげられる。「和同開珎」・「萬年通寶」の皇朝十二銭が佐久地方から集落跡の住居跡の床面直上から出土したのは始めてである。



また，「<u>十</u>」と書かれた墨書土器も出土し興味深い。

所見は全て現時点のものであり，来年度の調査結果を待ち遺物・集落について検討したい。

3　下前田原遺跡群（しもまえだはら）

所　在　地：佐久市大字小田井字後原442－１番地ほか　　調査担当者：宇賀神誠司
調 査 期 間：平成４年４月９日～同年５月８日　　五十嵐敏秀
同年12月21日～12月22日　　依田　謙一
調 査 面 積：8,100㎡
遺跡の立地：浅間火山南麓の田切りに挟まれた台地部

面調査とトレンチ調査を実施したが，遺構・遺物ともにまったく検出されなかった。遺跡範囲から完全に外れた地点と考えられる。

4　長野原遺跡（ながのはら）

所　在　地：小諸市大字平原字長野原449番地ほか　　調査担当者：宇賀神誠司
調 査 期 間：平成４年４月９日～同年５月８日　　五十嵐敏秀
調 査 面 積：4,000㎡　　依田　謙一
遺跡の立地：浅間火山南麓の田切りに挟まれた台地部

下前田原遺跡群と地続きの遺跡である。行政区画に従って名称を変更しているだけで，実際には同一の遺跡として捉えられる。したがって，下前田原遺跡群同様，遺構・遺物ともまったく検出されなかった。

5　赤沼遺跡（あかぬま）

所　在　地：小諸市大字平原字赤沼270－４番地ほか　　調査担当者：近藤　尚義
調 査 期 間：平成４年４月13日～同年４月20日　　尾台　　昇
調 査 面 積：7,000㎡　　木内　英一
遺跡の立地：浅間火山南麓の田切りに挟まれた台地　　征矢野安政
時代と時期：縄文時代早期初頭・中期初頭
遺跡の特徴：縄文時代の遺物散布地

面調査を実施したが，縄文時代早期初頭の局部磨製石鏃１点と同中期初頭の土器片３点が出土しただけである。

6　三子塚（みつごづか）遺跡群

所　在　地：小諸市大字平原字十石坂上1668－１ほか
調 査 期 間：平成４年４月14日～同年８月５日
調査担当者：近藤尚義・尾台　昇・木内英一・征矢野安政
対 象 面 積：21,000㎡（総面積30,000㎡）
遺跡の立地：浅間山麓南斜面の平坦な台地
遺跡の時期・特徴：平安時代末の単純集落
主な検出遺構：竪穴住居跡14軒・掘立柱建物跡１棟・土坑16基・旧流路５条・畑址・古墳１基
主な出土遺物：縄文土器・石鏃・打製石斧・奈良時代の土師器・須恵器・平安時代の土師器・金属器（鉄鏃・刀子など）

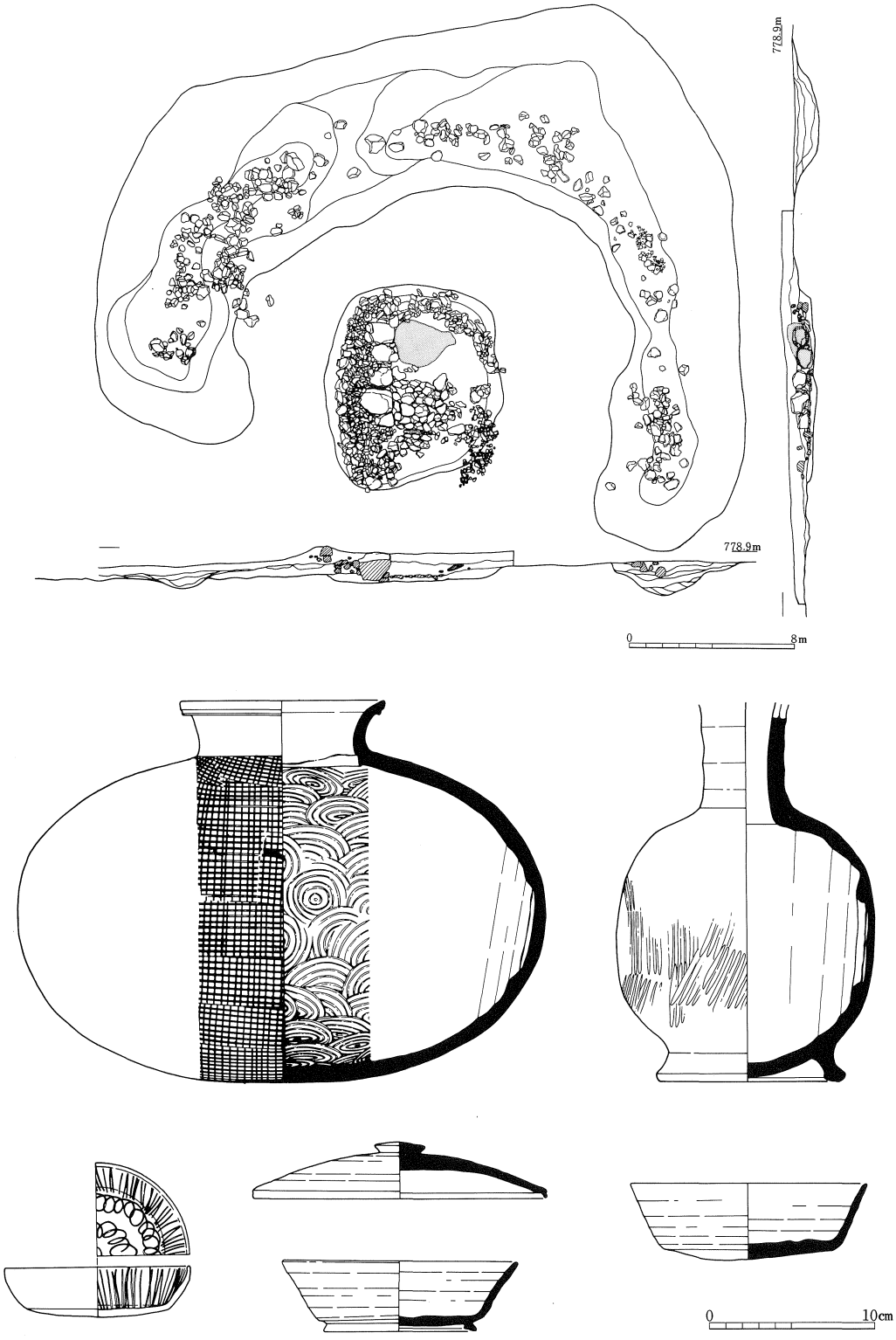
三子塚遺跡群は浅間火山のやや急な南斜面と緩傾斜面の転換地から北の台地上に立地する。調査対象総面積30,000㎡中，昨年度調査終了の8,900㎡を除く21,000㎡について調査を行った。その結果，調査区のほぼ中央部分から南にかけて平安時代末に帰属する集落跡を検出し，北では墳丘上部を削平された古墳を検出した。基盤は浅間火山が今から約１万３千年に噴出した火砕流による堆積物からなる。浅間火山に近いことから径50cmを超える巨大なものから５cm前後の小さな軽石が検出面には多量に露呈している状況下にあった。

住居跡のほとんどがカマドを南東のコーナーに持ち，昨年度の調査で得られた所見と同様にその対角上に焼土を有する例が多く認められた。住居を掘り下げ時に出た多くの軽石を廃絶した住居跡の投棄した例も見られた。

集落の在り方は今後の出土遺物からさらに検討すべき点ではあるが，住居跡の埋没過程からは，少なくとも２時期が想定される。また，旧流路では部分的に深く人為的に掘り下げられたと考えられる部分も存在していた。

古墳は上部が削平されていたが，石室・周溝は比較的残存状況がやや良好で，形態から７世紀代の所産の可能性が高いが羨道部分と周溝から出土した遺物はいずれも８世紀代であった。

第５図　三子塚遺跡群全体図（１：2,500）



第10図　三子塚遺跡群古墳実測図・出土遺物

7　三田原（さんだはら）遺跡群

7　三田原遺跡群　　調査担当者：宇賀神誠司

所　在　地：小諸市大字平原字下三田原1494番地ほか　　五十嵐敏秀

調査期間：平成4年4月14日～同年8月18日　　依田　謙一

調査面積：7,480㎡

遺跡の立地：浅間火山裾部の田切りに挟まれた台地

時代と時期：縄文時代早期～後期，平安時代

遺跡の特徴：縄文時代中期末葉～後期前半および平安時代の居住域

主な検出遺構

時期＼遺構	竪穴住居跡	土坑	溝	その他
縄文	17	26		遺物溜まり
平安	2			
不明			3	

主な出土遺物

土　　器：縄文時代早期～後期の縄文土器，平安時代の土師器

石　　器：槍先形尖頭器，石皿，磨石，石斧，石鏃

石　製　品：石剣，丸石，垂飾り，その他軽石製品多数

浅間火山の南裾，小諸市八満から御代田町塩野にかけての地は縄文時代を中心とした遺跡の密集地として知られている。本遺跡群は，この裾野に接した田切り地形の台地部分に営まれた遺跡であり，縄文時代関連の主要遺跡の中では最南端の位置にある。

遺跡群の範囲は，長さ約1㎞・幅200m前後と細長いものだが，そのちょうど中央に位置するもっとも狭溢な部分（幅約80m）を高速道が横断することになり，約8,000㎡の範囲が調査対象となった。本年度はその内の7,480㎡を調査し，主なものとしては，縄文時代中期末葉から後期前葉までの間継続して営まれた集落跡と，平安時代中葉の集落跡を確認した。

縄文時代中期末葉段階は，末葉でもその最終末に位置づく竪穴住居跡9軒を検出した。散在的な分布であったが，調査区周辺の遺物散布状況からすると，該期の中心は遙か西方にあるらしく，調査対象地点は集落の東縁辺に相当する公算が大きいものと考えられる。その他，南面する急斜面の中にできた浸食谷を捨場として利用しており，ここから多量の遺物を採集した。

縄文時代後期前葉段階は，称名寺式期の柄鏡形敷石住居跡1軒と堀之内Ⅰ敷期の敷石住居を中心とした竪穴住居跡7軒が認められた。前段同様，集落域の一部を調査しただけだが，ともに今後の該期集落研究に多大な影響を及ぼすほどの，重要な知見を得ることができた。

まず，称名寺式の中頃に位置づく3号住居跡は，柄部に軽石を主材とした石積みを当時の状態のまま残していたが，その西側壁に，石積みの壁体をともなう，偏平な河原石を利用した階段状施設を設けるものであった。これによって，柄部の役割をすべて解明したことにはならないにしても，出入口としての機能を兼ね備えていたことが明らかにとなり，あわせて，出入口の位置が必ずしも柄部正面とは限らないことも判明した（第8図）。

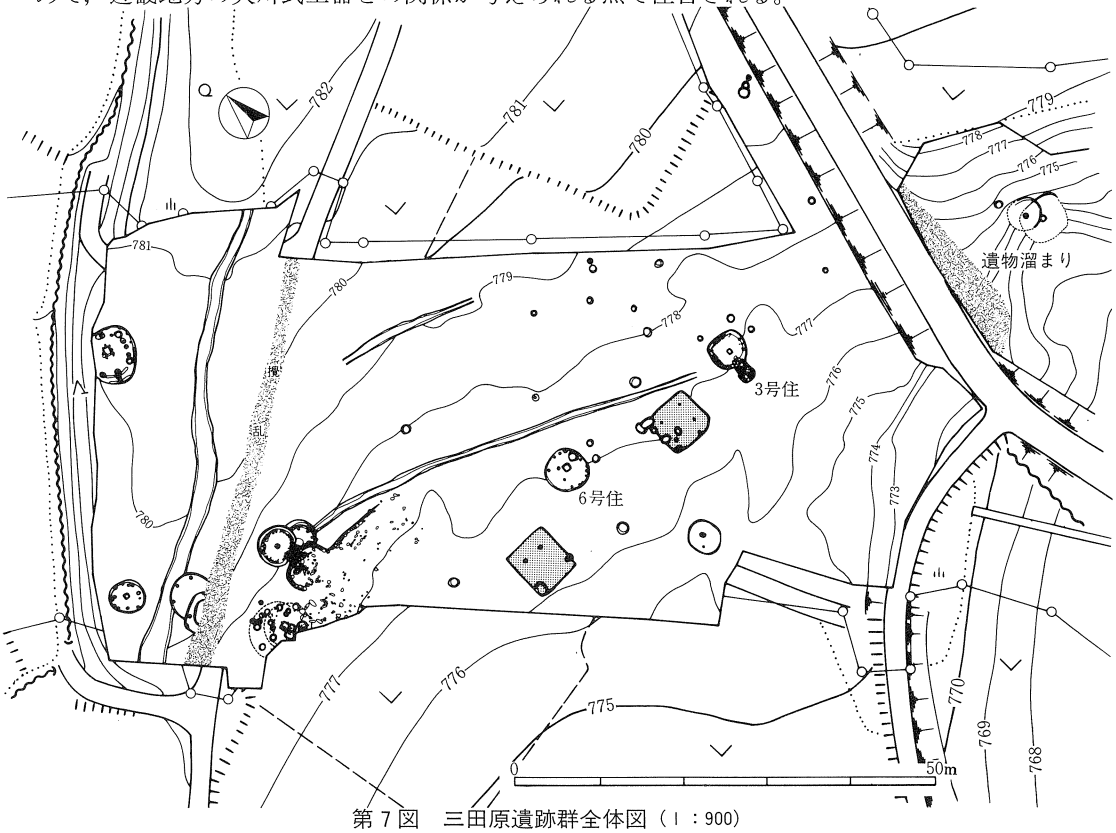
堀之内Ⅰ式段階では，岩下遺跡例に酷似した住居配列をみせる集落跡が確認できた点で特筆される。東半部を調査しただけだが，大形敷石住居（12・13・19号住）と石列をともなう柄鏡形敷石住居（4・14・18号住）が隣遇い，これが環状配列の中核部に相当する。唯一同時期の

住居跡である６号は，ここを基点とした円弧の東中央に配されたものだろう。その他，初期配列を維持しながら建て替えを繰り返すことや，サークル内が平坦になるよう緩斜面をカットして石列を構築する方法，内部を無の空間とする使い方など，まさしく瓜二つの構造を呈していた。ただし，６号住居跡の位置からすれば，サークル径は内法で40m内外が見込まれ，この点では岩下遺跡の例を若干上回る可能性が大きい。

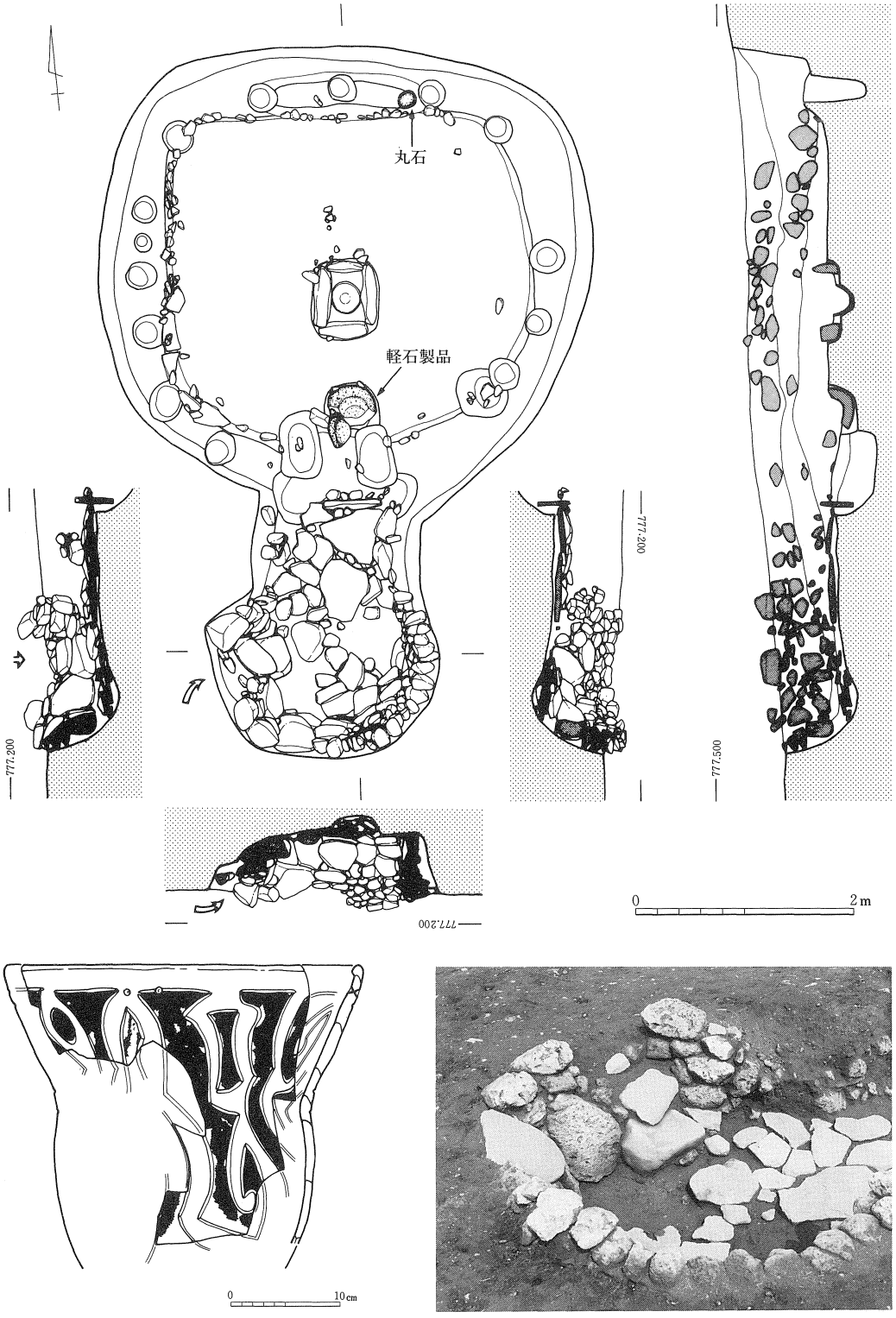
平安時代の集落は，いわゆる「古代末」と呼ばれる時期に営まれたものである。規模・構造・主軸とも近似した２軒の竪穴住居跡が，東西に並んで検出された。時期を特定しえなかった溝状遺構も当該期の所産かもしれない。住居跡以外から出土遺物はなく，単発的でしかも小規模な集落であったことが予想される。

上記したもの以外に，遺構は確認できなかったものの，縄文時代早・前期の遺物が比較的多くみられ，その他槍先形尖頭器１点が出土した。これらの中で，早期初頭の土器群は非常に興味深い資料であるためここに紹介しておく。

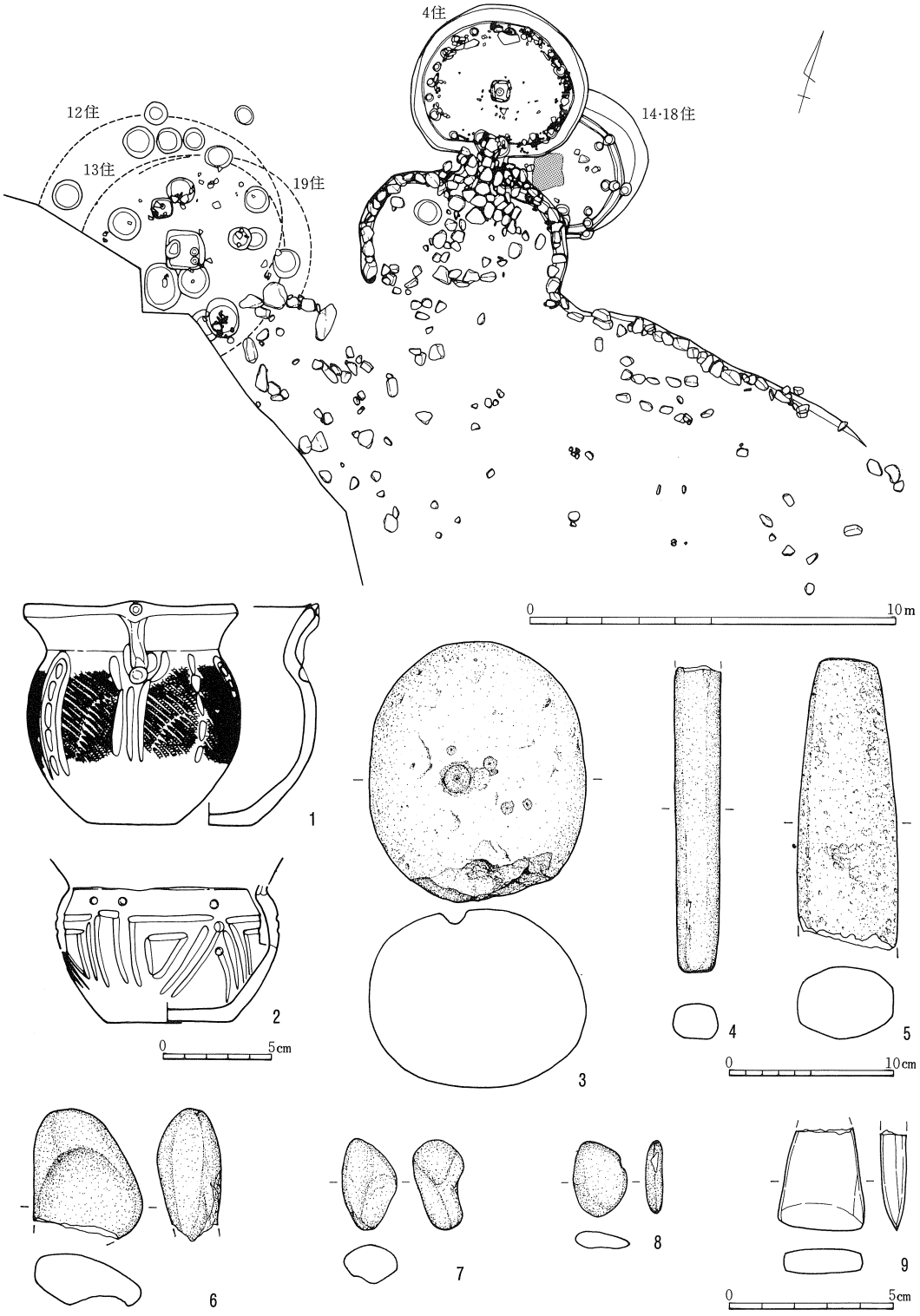
第10図３～11については，従来から認められていた押型文土器，12・13は同一個体で縄文施文の尖底土器である。14・15が新知見の押型文土器であり，14には口唇部に刻み目状の沈線・頸部と胴部に平行沈線（あるいは押型文？）を巡らし，15には頸部にやや浅めの山形沈線を施している。沈線文系土器群の影響とも捉えられるが，あくまで客観的に復原した14の器形を含めて，近畿地方の大川式土器との関係が考えられる点で注目される。



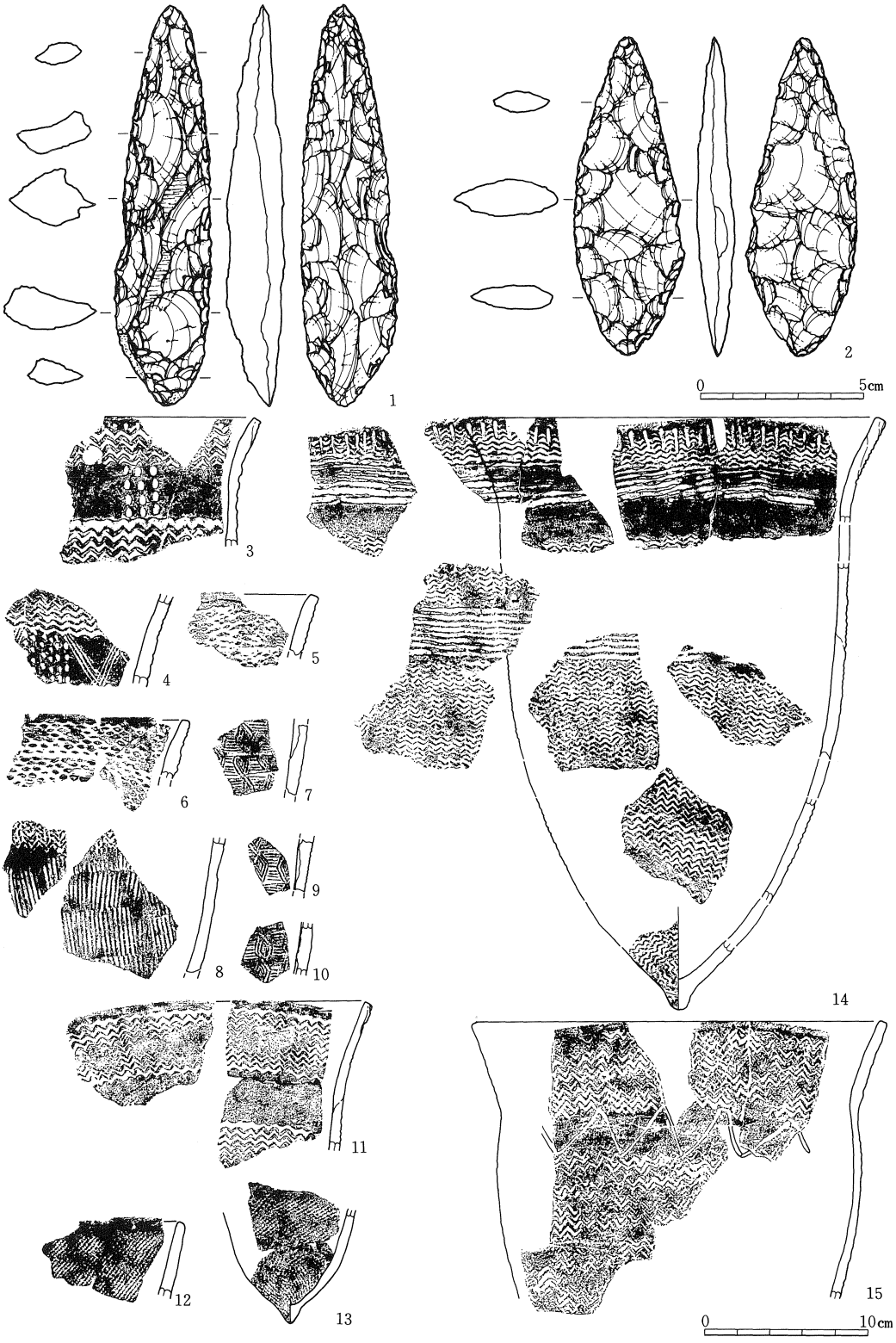
第７図　三田原遺跡群全体図（１：900）



第８図　３号住居跡と出土土器



第９図　環状集落北端部と４号住居跡出土遺物



第10図　槍先形尖頭器と早期初頭の土器（1は岩下遺跡出土）

8　岩下（いわした）遺跡

所　在　地：小諸市大字八満字岩下1647－2番地ほか　　調査担当者：宇賀神誠司
調 査 期 間：平成4年8月3日～同年12月24日　　五十嵐敏秀
調 査 面 積：11,100㎡　　依田　謙一
遺跡の立地：浅間火山裾部の南走する尾根末端部
時代と時期：縄文時代前期～後期，古墳時代後期，平安時代，中世
遺跡の特徴：縄文時代前期初頭・同末・同中期末葉～後期前半・古墳時代後期後半・平安時代・中世の居住域

主な出土遺物

土　　器：縄文時代前期～後期の縄文土器，古墳時代後期・平安時代の土師器
石　　器：槍先形尖頭器，磨石，石皿，石斧，石鏃
石 製 品：石棒，石剣，丸石，その他軽石製品多数
鉄　　器：鉄鏃

主な検出遺構

時期＼遺構	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	その他
縄文	51		約400	石棺1
古墳	2			
平安	4	1		
中世		5	22	小ピット群

浅間火山の裾野，南北走行の尾根南端に営まれた遺跡である。これより南方は，走行方向を南西に変える田切り地形が発達するが，この田切りを挟んだ眼前の台地上には三田原遺跡群が位置している。距離にして150mも離れていない。また，本遺跡の南西端に駒形社が祀られており，これをもとに古くから「塩野の牧」，あるいは「古東山道」との関係が指摘されてきた地でもある。

高速道は，遺跡の南端を横断することとなり，これによって12,100㎡の範囲が調査対象となった。今年度は駒形社部分を除いた11,100㎡を調査し，縄文時代前・中・後期，古墳時代後期，平安時代前半，中世の各集落跡の存在が明るみに出た。

縄文時代前期の集落は，前期初頭（中道式）と末（緒磯C式）とに分かれる。初頭の集落は，住居跡10軒を数えるが，長方形を基調にするものと直径2m前後の小円形のものとがあり，当時の住居に大きく二者の形態が存在することが判明した。

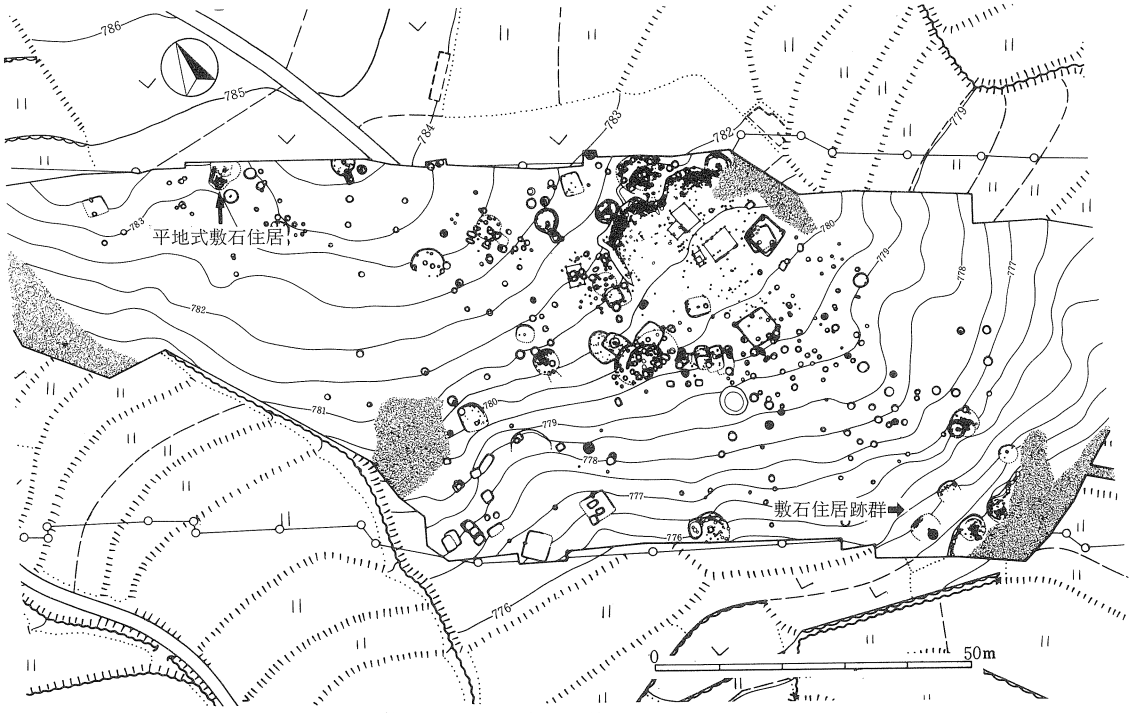
縄文時代中期末葉から後期初頭（称名寺式）では，敷石住居を主体とした住居跡11軒を確認した。三田原遺跡群にほぼ併行して営まれたものだろうが，広域を調査したにもかかわらず，遺構密度が低いことから，規模的にはそれよりもかなり劣るらしい。大きな成果はないが，直径3mにも満たない中期末葉の敷石住居跡2軒・柄部に石積みの壁体を残す後期初頭の柄鏡形敷石住居跡1軒が認められた。

縄文時代後期でも，堀之内II式段階になると，集落規模が飛躍的に増大し，しかも明らかに環状配列を意識した遺構群が確認された点で特筆される。この環状集落は，北端中央に大形敷石住居を設け，その両翼に三田原遺跡群4号住居跡の柄部を遙かに凌ぐ規模の石積みを有する敷石住居を従わせて，サークル構造の中核とし，これを円弧の基点として，直径25m程の平坦

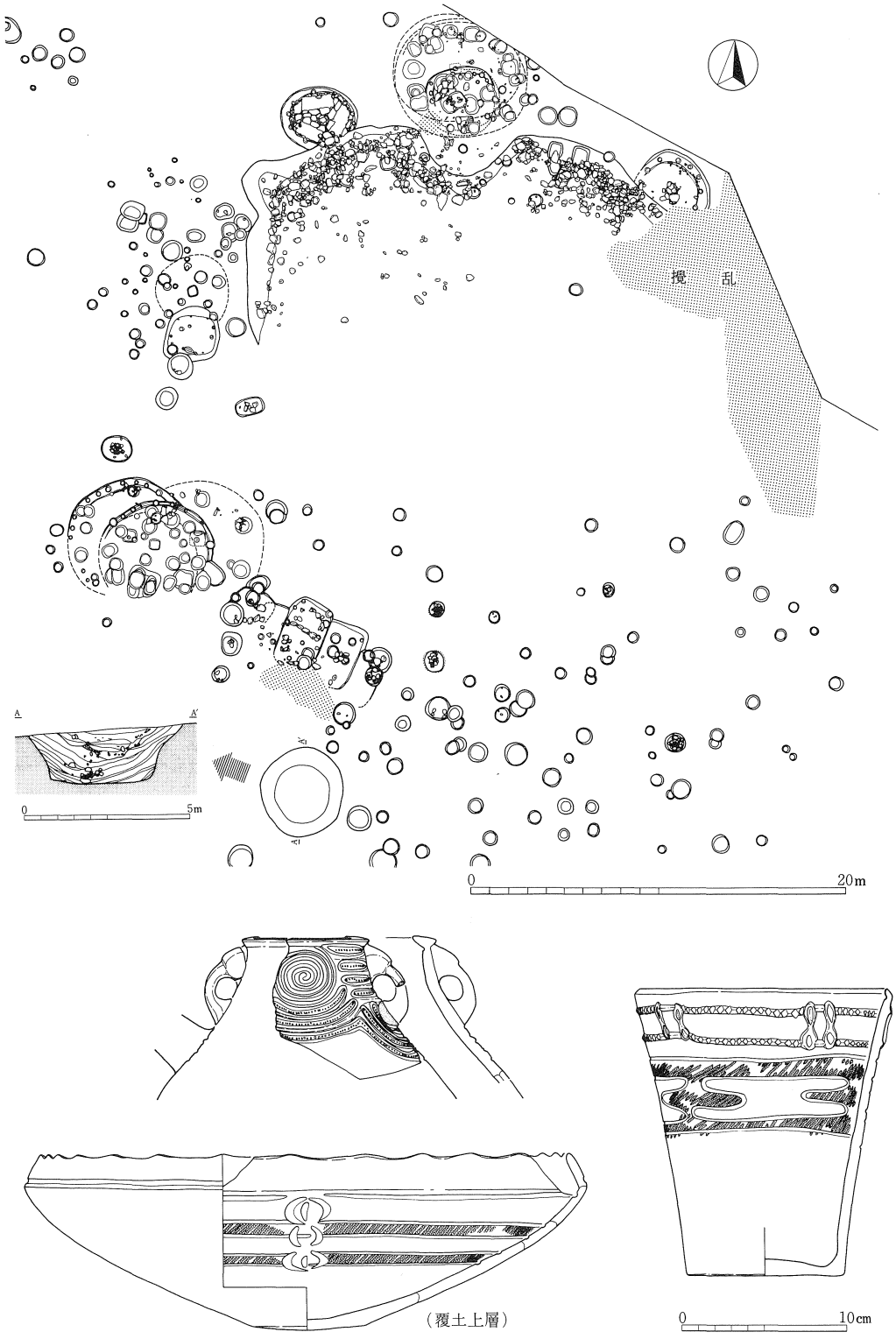
な無の空間を設けるものであった。両翼の２軒は，サークルの中心方向に主軸を設定し，数10cmほど地面をカットした後に築きあげられた石積みの範囲を，ちょうど大形住居の出入口部分で止め，これのためのブリッジを作出していた。このブリッジ上には框石が置かれ，ブリッジの両側には線対照的に石棺・土坑墓，石柱，木柱痕とも取れる底の深い小土坑が配されていた。この円弧の西中央には火処も不明瞭な貧弱な竪穴住居，南西には大形敷石住居，その東側に竪穴状の遺構を配し，これとともに土坑群が取り囲むなど，遺構配列状況が明瞭に捉えられたことも大きな成果といえる。また，同一地点で頻繁に建て替えを行った住居が目立ち，初めに設定した配列を代々踏襲している事実も判明した。これとは別に，南方にも石列をともなう敷石住居跡群が分布し，北西に距離をおいた地点には平地式の敷石住居跡が存在していたが，これらが一体となってひとつのムラを形成していたものと思われる。

古墳時代後期後半の集落は，この地で初めての確認例である。集落といっても２軒が認められただけで，なおかつほかの存在があまり期待できそうにないような分布状況だが，いずれにしても平野部に展開した大集落以外は，何もかも見えていなかった該期の状況に，興味深い資料を提示することとなった。また，「塩野の牧」推定地でもあることから，これとの関連で成立した可能性もあり，とすればなおさら貴重な調査例といえよう。

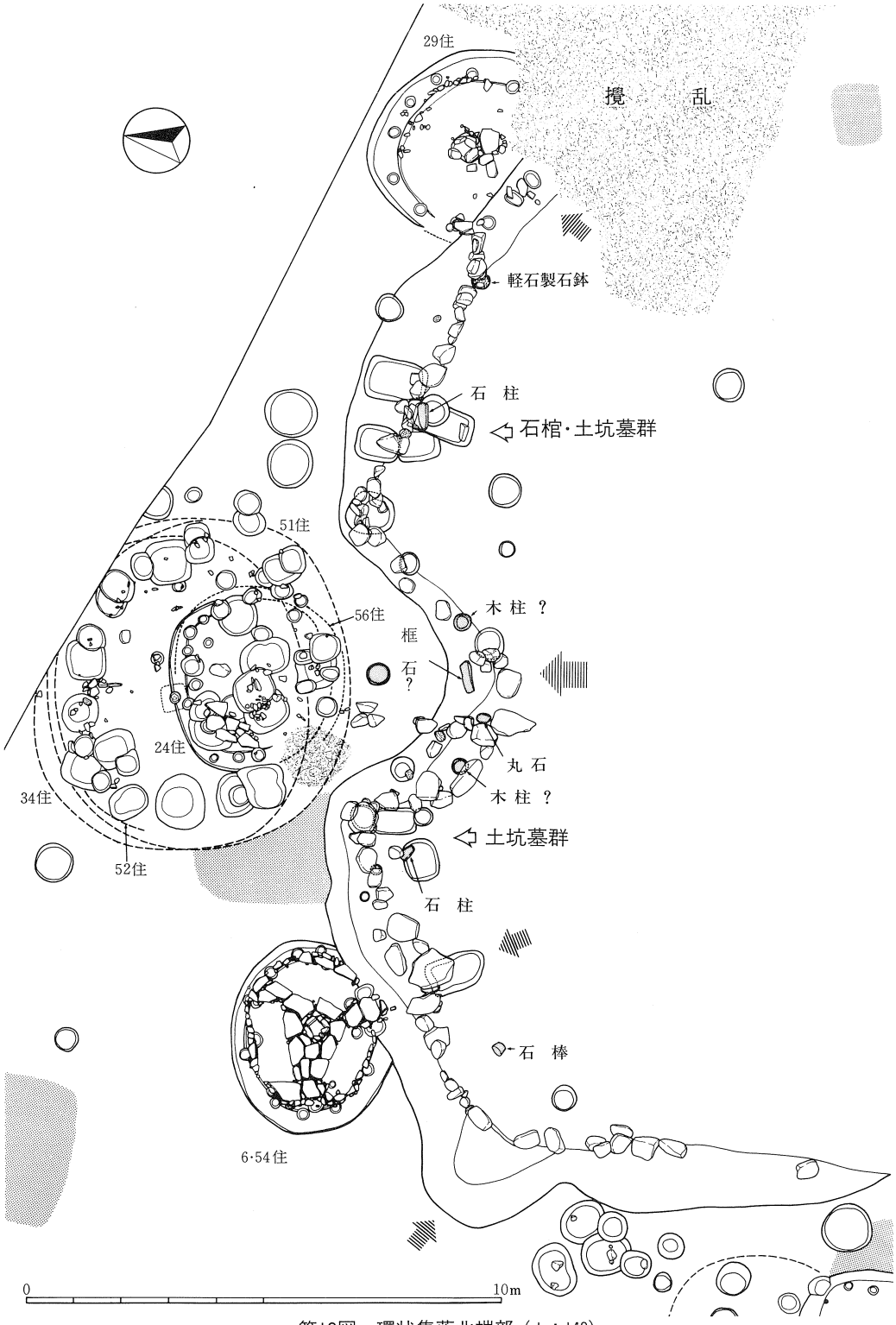
平安時代の住居跡は，９世紀に遡る１軒を除き，いわゆる「古代末」の所産であった。付近の三田原遺跡群や三子塚遺跡群でも確認されているため，平野部の大集落が律令体制の崩壊とともに衰退していくなか，こうした山寄りの斜面にも点々とした小規模集落が形成され始めた様子がうかがえる。中世の集落も，この継続で営まれたものだろう。



第11図　岩下遺跡全体図（1：2000）



第12図　縄文時代後期の環状集落（1：350）と3号住居跡出土土器（1：4）



第13図　環状集落北端部（1：140）

9　郷土遺跡（ごうど）

所　在　地：小諸市大字甲字中郷土4146ほか　　調査担当者：桜井秀雄　依田謙一

調 査 期 間：平成４年８月25日～９月２日，10月19日～12月24日

遺跡の立地：浅間火山の南裾部の標高約830mをはかる緩傾斜面上

時代と時期：縄文時代前期～後期，平安時代

遺跡の特徴：縄文時代の集落（中期中葉～後葉を中心とする）

主な検出遺構

遺構／時期	住居跡	土坑	ピット	溝	屋外埋甕
縄　文	33	54	21	2	8
平　安		1			

主な出土遺物

土　　器：縄文土器（前期～後期），土師器

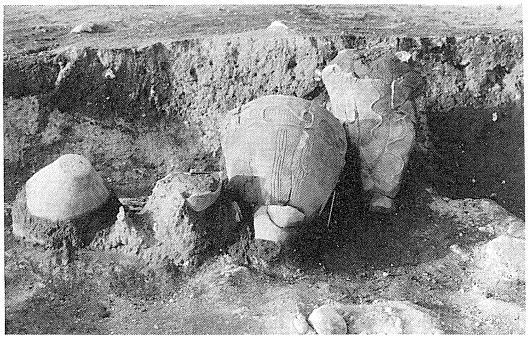
石　　器：石鏃，打製石斧，石皿，石匙

石 製 品：石棒，垂飾り

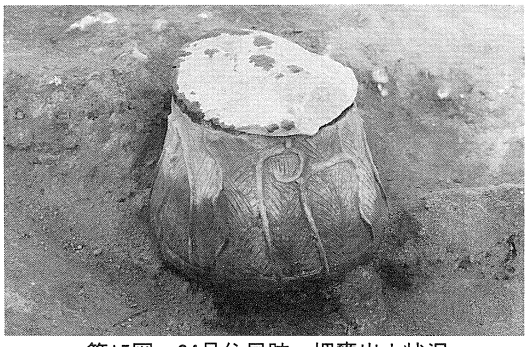
土 製 品：土鈴，土偶

郷土遺跡は東京教育大学の八幡一郎教授によって，昭和36年及び40年に発掘調査が行われている。特に40年の調査では縄文時代中期末～後期初頭頃の敷石住居跡が検出されるなど大きな成果があげられ，以来浅間山麓の縄文時代中期の指標的意義を持つ遺跡として注目されていた。また本年度には高速道建設に伴う駐車場移転に先立ち，高速道路用地に隣接した地点が小諸市教育委員会によって発掘調査され，敷石住居跡１軒を含む縄文時代中期から後期の住居跡７軒などが検出されている。過去に行われた正式な発掘調査としては以上の３回であるが，他にも考古愛好家によって表面採集等がしばしば行われていた模様である。

このような発掘調査歴をもつ郷土遺跡であるが，上信越自動車道建設に伴い8280m²が発掘調査の対象となり，今年度と平成５年度の２ケ年にわたって調査が予定されている。今年度は工事用道路分の1,500m²と小諸市側道拡幅部分280m²の計1,780m²が調査対象であった。そのため東西に細長いトレンチ的調査となったが，縄文時代の住居跡33軒，屋外埋甕８基等が検出されるなど遺構の密集度が極めて高く，浅間山麓における縄文時代中期の代表的な遺跡であることが明らかとなった。遺構は平安時代の土坑１基を除いてすべて縄文時代に比定される。時期的にはいまだ整理途中段階のため断定はできないがおおむね縄文時代中期中



第14図　14号住居跡　土器出土状況



第15図　24号住居跡　埋甕出土状況

葉から後葉にかけて盛行したものと考えられよう。土器に関していえば，縄文時代前期から後期，及び平安時代の土師器等が認められる。遺物の出土量は多く，また遺存状態も非常に良い。なかでも14号住居跡ではほぼ完形の土器30点近くが出土しており，良好な一括資料として期待できよう。

また埋甕が12基埋設されていることも注目に値する。このうち住居跡に付属するものは4基であり，屋外埋甕として8基が認められる。その他にも土鈴・石棒各2点，垂飾り，土偶などが出土している。石棒2点はいずれも炉辺に位置しているものである。

このように縄文時代の精神文化に係わる遺物が多くみられることは本遺跡の特徴のひとつとしてあげられるだろう。

こうした今年度の調査知見から推測すると，5年度調査予定地は郷土遺跡の中核となる可能性が高い。そしてそれは従来の予想を上回る大集落遺跡になることが予想される。いずれによせ来年度の調査によって郷土遺跡の全貌が明らかにできるものと思われる。

第16図　郷土遺跡全体図（右1：4,000，左1：1,000）

10　深沢（ふかざわ）遺跡群

所　在　地：小諸市大字滋野甲字東原312番地ほか　　調査担当者：藤原直人

調 査 期 間：平成４年11月24日～同年12月18日

調 査 面 積：8,890㎡

遺跡の立地：押出し扇状地上の緩やかな傾斜地

時代と時期：縄文時代後期，平安時代

主な検出遺構

遺跡／時期	竪穴住居跡	土坑	溝	その他
縄　文		4		
平　安	1		1	焼土跡１

主な出土遺物

土　　器：縄文時代後期　土器，平安時代　土師器・須恵器

石　　器：打製石斧

鉄 製 品：刀子

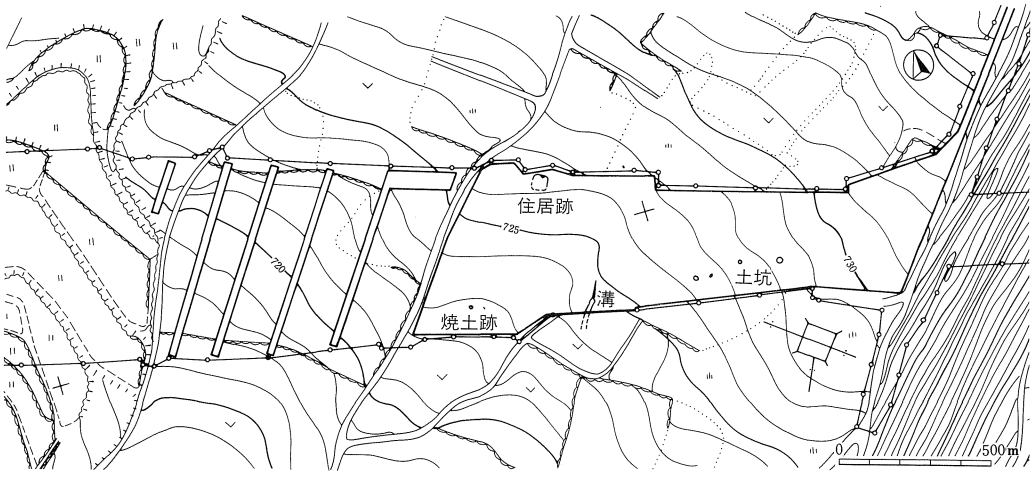
そ の 他：鉄滓

深沢遺跡群は東信火山群の裾野地形の一部，深沢川の形成した押出し扇状地上に位置する。南を流れる千曲川に向かってゆるやかに傾斜し，東側は深沢川が浸食した深い峡谷で切られている。標高はおおむね720～730mを測る。

縄文期の遺構は土坑４基であるが，そのうち縄文後期の所産と考えられる陥し穴が１基確認された。

平安期の遺構は，竪穴住居跡１軒と溝１条・焼土跡が１基確認されている。住居跡は東西が5.2m，南北は削平されており不明であるが概ね５m四方の規模であったと思われる。

この深沢川の流域に縄文期には狩猟場として，平安期には居住の場として人が活動していたことをうかがい知ることができた。しかしまた，遺構の数自体少なかったもののこの周辺が土器の散布地であるということから，集落を示す遺構が削平によって消失してしまったということや工事路線外にも遺構が存在するという可能性は十分考えられる。



第17図　深沢遺跡群遺構配置図（１：2,500）

上信越自動車道関連　試掘調査

11　愛宕山城跡（あたごやま）

所　在　地：小諸市大字甲字愛宕山4267番地ほか　　調査担当者：寺島俊郎

調査期間：平成４年12月14日～同年12月16日

調査面積：11,000㎡　　試掘面積130㎡

調査方法：人力と重機によるトレンチ調査

遺跡の立地：愛宕山一帯

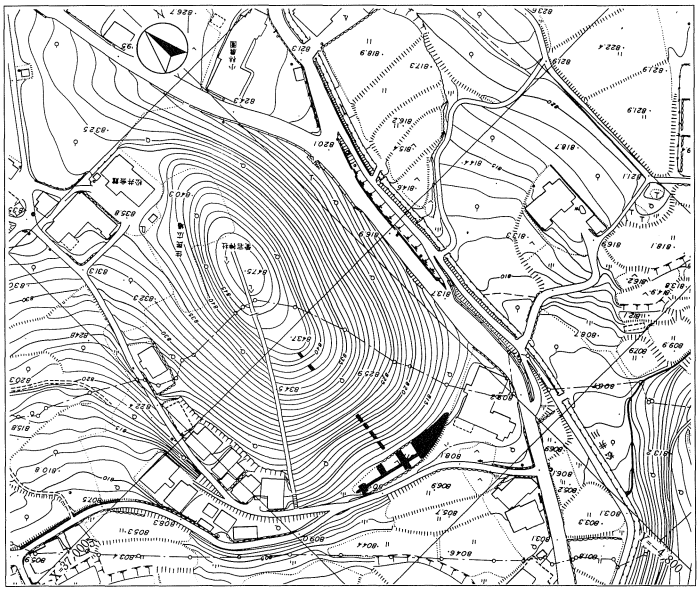
概　　況

浅間山南麓の尾根の先端部に愛宕山は位置し，標高847.5mで東側山裾からは40mの標高差をはかる。

本遺跡は旧来地元では山城として捉えられておらず，小諸市教育委員会においても同様であった。しかし，昭和54年度から57年度にかけて県教育委員会が実施した中世城館跡分布調査によって山城と判断された。山頂には愛宕山神社があり整地されすでに旧地形は止めていない。斜面部には山頂付近に３条，山裾付近に４条の段状の遺構が認められ帯郭の可能性が推測された。また，山裾には人工的に構造された平坦な地形があり城と何らかの関連をもった遺構の存在も予想した。調査は前述の２点を対象に，７条の段状の遺構のうち６条にトレンチを入れ，山裾の平坦部には４本のトレンチと部分的な面調査を実施し，遺構確認と造成状況を観察した。

調査結果

段状の遺構は人為的な切り盛りがされているものと解されたが，帯郭の特徴である土塁や版築が施された痕跡は認められず，また，遺物も検出しなかったことから時期的な判断がつかなかった。そして，帯郭の配置特徴から鑑みてもこの配置の状況は帯郭のそれと判断することは，できなかった。山裾の平坦部においても人為的に造成されていることには間違いないが遺構・遺物等は一切検出せず段状の遺構と同様該期であることを裏付けることはできなかった。以上から総合的に判断すると山城である可能性はないだろうと判断される。



第18図　愛宕山城跡（1：3,000）

北陸新幹線関連

12　金井城跡

所　在　地：佐久市大字小田井字南金井1119－16番地ほか　調査担当者：寺島俊郎　田村　彬
調 査 期 間：平成４年13日～同年10月29日　飯田吉隆
遺跡の立地：浅間山南麓末端の台地部　調 査 面 積：14,500㎡
時代と時期：16世紀中頃　遺跡の特徴：平城

主な検出遺構

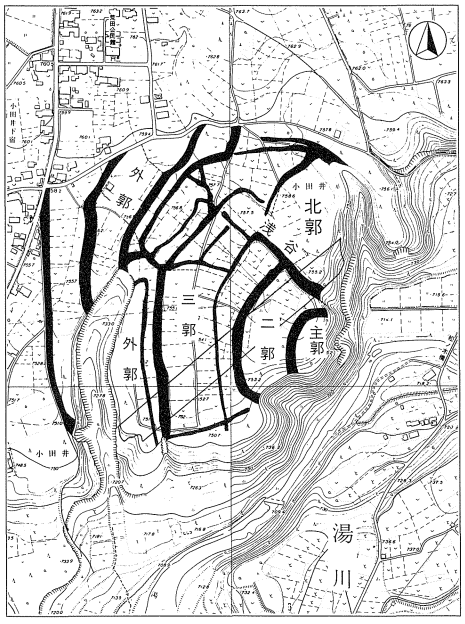
竪穴建物跡128軒，掘立柱建物跡23棟（二郭17・三郭５・北郭１）柵列43条，土坑138基，堀５条（佐久市調査に連続），溝３条（２条は時期不明）

主な出土遺物

土　　器：内耳鍋，かわらけ，輸入磁器，火鉢
石　　器：挽き臼，搗き臼，茶臼，ひで鉢
金属製品：鉄鏃，小札，刀子，釘，火打ち金，銭
自然遺物：炭化もみ・米，くるみ，巻貝

金井城跡は浅間山南麓末端の台地部に位置し，佐久市小田井の金井地籍に所在する。湯川右岸から入り込む２条の谷によって画された自然地形を利用し，縄張りは断崖端部（標高差50m）に主郭を置き，扇状に二郭・三郭・外郭・北郭が空堀によって画されて配されており，その城跡は20万㎡を越えるものと想定されている。

既存の調査としては昭和63年から平成元年にかけ，小田井工業団地造成事業に伴う発掘調査が佐久埋蔵文化財調査センターと佐久市教育委員会によって主郭・二郭を除いた８万㎡の調査が実施され，平成３年には膨大な資料と成果が報告書として刊行されている。平成４年４月には道路工事に伴い外郭の一部が調査された。前者の調査は中世城郭の大規模調査としては県下において例が見られないもので，主郭から三郭は整然と区画された居住区間をもち，武田氏の遠征時に使用された駐屯地的性格の平城であろうと想定された。

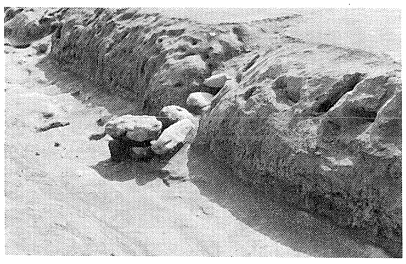


第19図　金井城跡略図（１：10,000）

今回は市の成果を参考に二郭の外側約半分・北郭の南端部・三郭の調査を実施し，三郭は全域の調査が終了した。

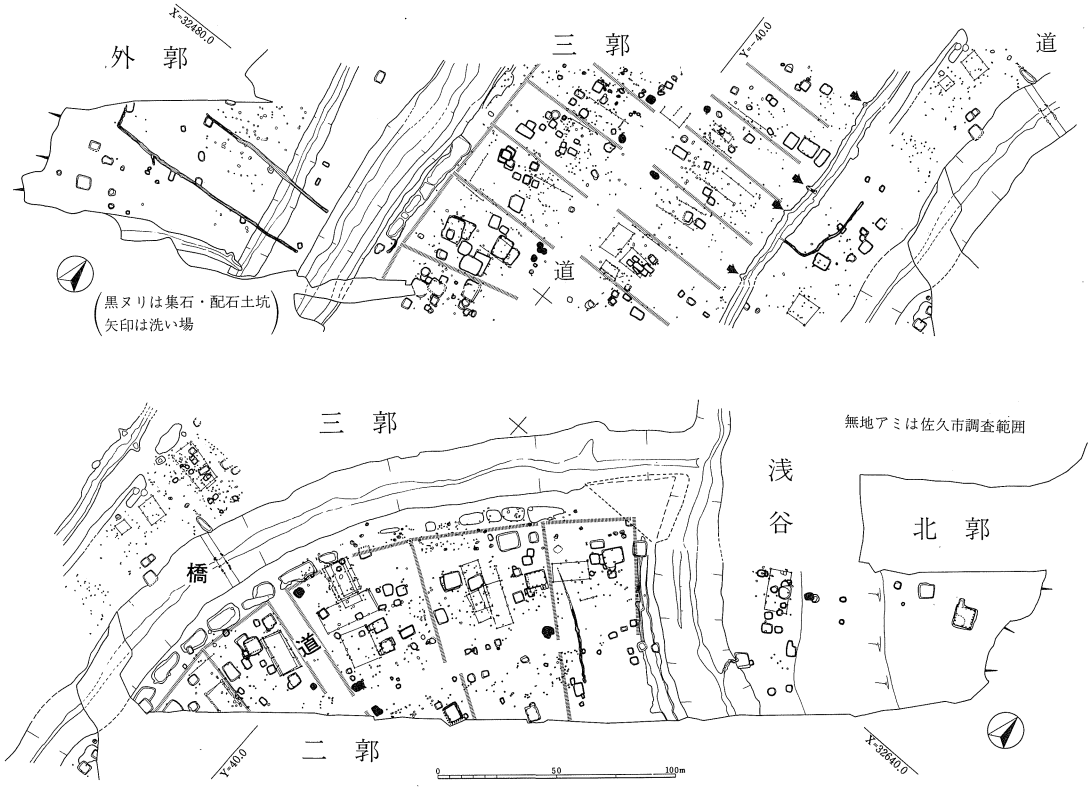
調査の結果，いくつかの新たな成果を得ることができた。その中でも特に３点ほどあげてみたい。一つ目は水についてである。以前から本城跡には井戸が一箇所も確認されず水の供給が大きな

問題になっていた。三郭内の二郭側の堀（佐久報告堀７号）は城内で唯一流水のあるもので，外郭側から堀内に入る洗い場（写真）が４基検出された。佐久市との調査を含め10万m²近くの調査の中で唯一生活のにおいのする遺構である。二つ目は道についてである。二郭のほぼ中央の空堀（二郭と三郭の画した堀）から橋脚の柱穴が確認され，城外から主郭に至る進入路の一部が今回判明したことである。三つ目は二郭の建物配置が他の郭と異なる点である。二郭は三郭と同様中央に道が配置されその左右に遺構が配されるが，二郭では掘立柱建物跡といくつかの竪穴建物跡のセットによって１つの居住空間（屋敷範囲）が構成される可能性が窺えそうである。竪穴建物跡は『島原の乱図屏風』に見られる竪穴の倉庫に類似したものが多く認められた。出土遺物については佐久市の調査と同様その出土量は貧弱で土器類に比べ石臼類が多い。中でも注目されるのは２号竪穴建物跡の覆土から３本の巨大な鉄鏃が重なって出土したことである。27～32cm・200gを越えるもので儀礼か威嚇に用いられたものではないかと思われる。



第20図　三郭内堀の洗い場

今後は今回の新たな成果に佐久市の貴重な調査成果をふまえ，佐久地域の特色ある平城解明に向かい整理検討していきたい。



第21図　金井城跡遺構配置図（１：1,600）

13　土合（どあい）遺跡

所　在　地：北佐久郡浅科村大字甲字土合1713－1　　調査担当者：寺島俊郎　飯田吉隆

調 査 期 間：平成4年11月9日～同年12月4日

遺跡の立地：布施川右岸河岸段丘上　　調 査 面 積：4,000m²（工事用道路を含む）

時代と時期：縄文時代前期・後期，弥生時代後期，古墳時代，室町時代

遺跡の特徴：小規模な複合遺跡

主な出土遺物

土　　器：縄文時代前期・後期土器，弥生時代後期，土器，須恵器，中世陶器，かわらけ

石　　器：スクレイパー，石匙，打製石斧

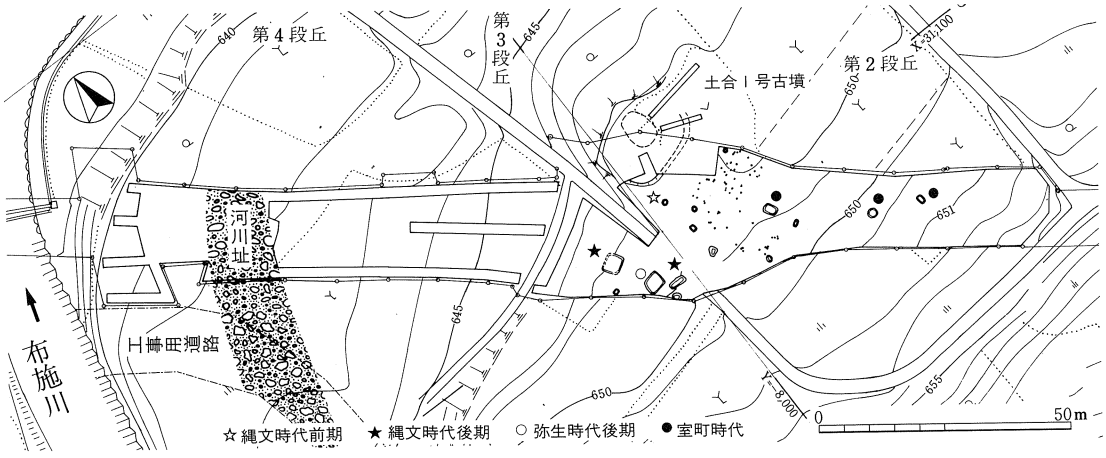
主な検出遺構

時期＼遺構	竪穴住居跡	土坑	古墳	河川跡
縄文	1	2		1
弥生	1			
古墳			1	
中世		3		
時期不明		9		

蓼科山に源を発する布施川は浅科村の北方を流れ，下原地区土合地籍において半月状の4～5段の北向きの河岸段丘を形成し，本遺跡はその段丘面上に所在する。従来遺物散布地として縄文時代中期と平安時代の遺跡として周知されてきたが，発掘調査を実施した経緯はなく土合1号古墳の調査（明治32年・昭和44年）のみが評価され注目されてきた。

今回の調査は遺跡の西端を掠めたかたちで，2～4段目の段丘が調査対象となり，側道建設用地に石室の一部がかかった1号古墳は保護協議により今回の調査から除外された。事前踏査では遺物の採集は極わずかで遺構の存在が希薄であることが予想された。

調査の結果，2段目の段丘面からはすべての遺構が検出され，各時代を通して生活の場となっていたことが判明した。また，下段の段丘は耕作土下が砂礫層であり，特に4段目の段丘には縄文時代後期（称名寺式）の土器が多量に包含されていた。このことから4段目の段丘は該期では旧布施川であり，その上流にはかなり大規模な同時期の集落の存在が推測された。また本調査と並行した村教育委員会の試掘調査では，縄文時代中～後期及び平安時代の集落の存在が確認され，本遺跡の中心部が中央北側にあることが判明した。



第22図　土合遺跡全体図（1：1,600）

(2) 上田調査事務所

発掘調査の概要

平成４年４月，上信越自動車道佐久―更埴間の本格的調査の開始や北陸新幹線の上田・坂城地区の調査に対応するため，上田調査事務所が新たに開設された。担当地域は上田市・小県郡・埴科郡である。今年度は，所長以下12名の職員で，６名の調査研究員が調査に携わった。

調　査　区　域：東部町和地区，上田市塩尻地区，坂城町南条・中之条・坂城地区

調 査 遺 跡 数：10遺跡〔東部町　釜村田遺跡，野行田遺跡，中原遺跡，坂城町　上原古墳群，山崎古墳・山崎遺跡，土井ノ入窯跡，観音平経塚（以上上信越自動車道），上田市　風呂川古墳，坂城町　開畝遺跡（以上北陸新幹線）〕

調 査 総 表 面 積：69,500㎡（釜村田遺跡5,000㎡，野行田遺跡2,000㎡，中原遺跡38,000㎡，上原古墳群12,000㎡，山崎古墳・山崎遺跡1,200㎡，土井ノ入窯跡4,000㎡，観音平経塚3,600㎡，風呂川古墳200㎡，開畝遺跡3,500㎡）

調　査　期　間：平成４年４月13日～12月18日

試掘調査遺跡数：13遺跡（東部町５遺跡，上田市３遺跡，坂城町５遺跡）

対　象　面　積：146,450㎡

調　査　期　間：平成４年11月９日～12月21日

上田調査事務所初年度の調査は，当初上信越自動車道関係の６遺跡（東部町・坂城町各３遺跡）が予定され，東部町和地区より開始された。その後，情況が整ったところで坂城町方面へ調査は展開し，坂城インター内の山崎古墳・山崎遺跡の一部についても今年度の調査対象に加えられた。その間，北陸新幹線関係の工事用道路，坑外施設に伴う調査が２遺跡追加計画されこれにも対応することとなった。

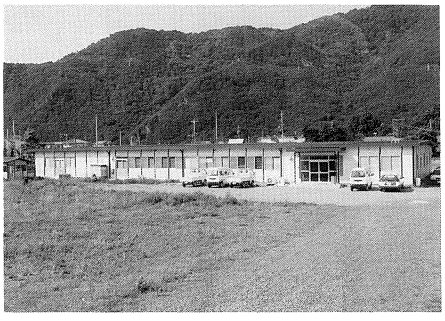
東部町の各遺跡は，烏帽子岳山麓に形成された扇状地上に立地する。いずれも扇状地特有の礫を多量に含む地層堆積が随所に認められ，時には径１ｍを超す巨石もあり，正に石との格闘であった。

中原遺跡では，沢と尾根が入り組む扇状地形成過程の旧地形が復元され，住居・土坑などの遺構がやせ尾根上に広がり沢筋の水辺には貯蔵穴が作られるという縄文時代の集落景観が明らかにされた。

釜村田・野行田の両遺跡は若干の遺物が認められたのみで遺跡の中心部から外れた調査であった。

上田市風呂川古墳は方墳と推測される古墳周溝が検出された。すぐ東側にある５世紀代といわれる方墳の大蔵京古墳との関係が考えられ，上田盆地の古墳時代研究に新たな知見が加えられた。

坂城町上原古墳群は当初14基からなる積石塚が想定されたが，これらは開墾などに伴う石積みと確認された。一方，平安時代の住居跡・掘立柱建



第23図　上田調査事務所

物跡などが検出され，山麓の小規模集落の存在が明らかとされた。

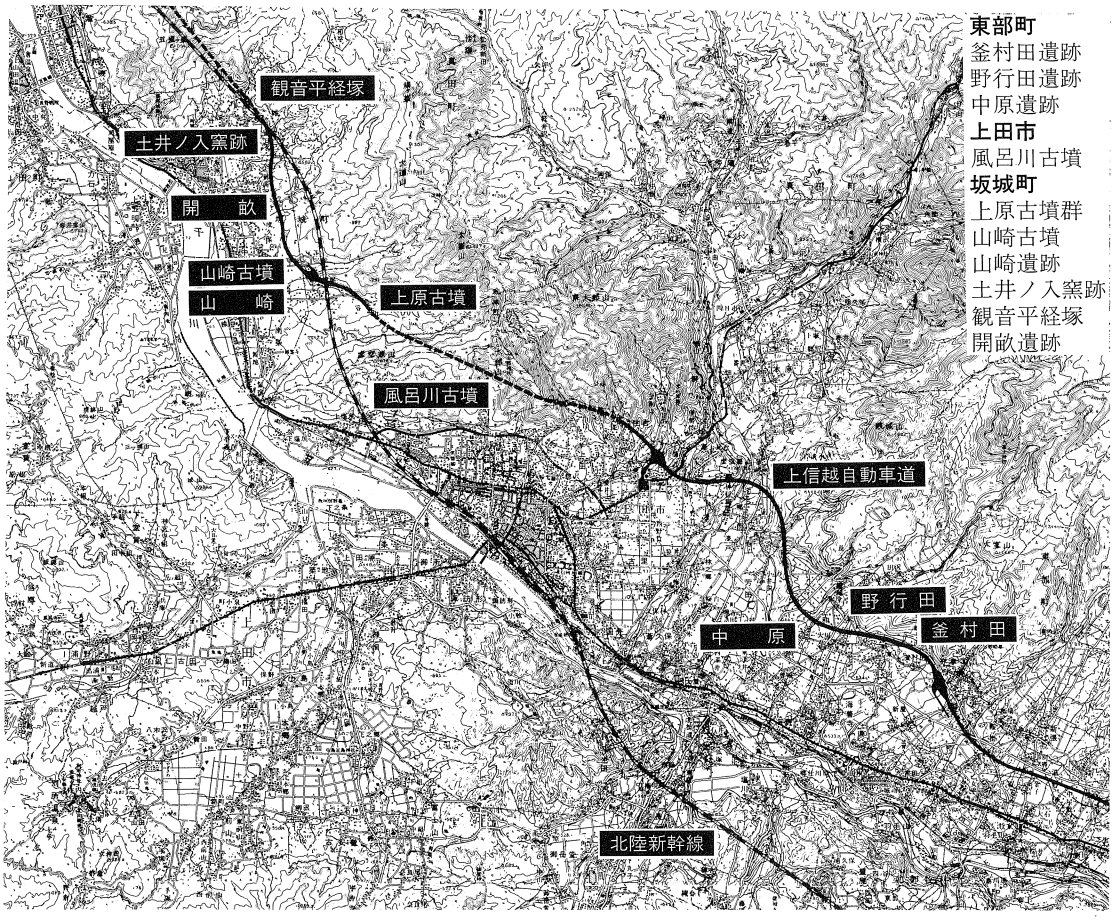
山崎古墳・山崎遺跡は少量の遺物が出土したのみで遺構などは検出されなかった。ただし，翌年度調査地には坂城町誌に記載のあるムジナ塚古墳跡があり，今後の調査が待たれる。

土井ノ入窯跡は，信濃国分寺などに供給された瓦や須恵器を生産した窯跡として知られていた。今回の調査は過去の窯跡発見地点より山腹を上がった所となり，時期不詳の炭焼き窯が2基検出されたのみで窯跡は発見されなかった。

観音平経塚では，400点を超す五輪塔，古瀬戸の骨蔵器をもつ火葬墓など中世の墓域を示す多くの遺構・遺物が検出された。五輪塔は山麓斜面に幾つかの群をなして構築され，下部施設からは焼骨も認められた。長野市松原遺跡のあり方に類似しよう。経塚については経石の出土を見たもののその主体は明らかにされなかった。経塚と五輪塔群の関係など今後の検討課題は多いが，中世の墓制に関する好資料が提供された。

開畝遺跡は，長野県内では数少ない鉄製遺跡である開畝製鉄遺跡に隣接する。中世の製鉄関係の遺構などは存在しなかったが，山麓に営まれた平安時代の小集落が検出された。

試掘調査は，翌年度以降の調査計画策定に役立てるため，トレンチ調査で遺跡範囲と内容把握に努めた。



地図２　上田調査事務所関係遺跡

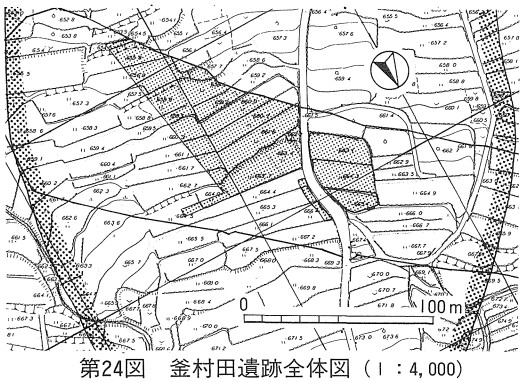
上信越自動車道関連

1　釜村田遺跡（かまむらた）

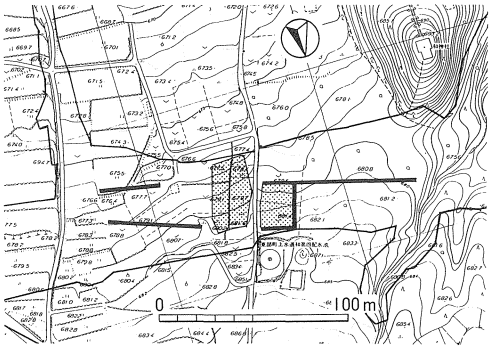
所　在　地：小県郡東部町和字釜村田7050番地ほか　　調査担当者：柳澤　亮
調 査 期 間：平成４年８月19日～８月31日　調 査 面 積：5,000㎡　　寺沢政俊
遺 跡 の 立 地：大室山（1,147m）山中より流れ出る三分川によって形成された扇状地に立地。
検 出 遺 構：今回の調査における検出遺構は無し。
主な出土遺物：縄文時代中・後期の縄文土器，土師器，須恵器，内耳土器
調 査 の 概 要：平成３年12月に行ったトレンチ試掘調査では，遺構・遺物ともに確認されていないが，隣接地に遺跡が存在すること（町教委が調査），隣接する圃場整備事業地内から土器が採集されていることなどから，今回改めて遺構の存在確認を主たる調査課題として重機による面的調査及びトレンチ調査を行った。しかし，耕作土の下には大小様々な礫の混じる押し出し層が厚く堆積しており，一部で遺物包含量が残存し，縄文中・後期の土器が出土したものの遺構は検出されなかった。

2　野行田遺跡（のぎようだ）

所　在　地：小県郡東部町和字野行田7951番地ほか　　調査担当者：柳澤　亮
調 査 期 間：平成４年９月１日～９月11日　調 査 面 積：2,000㎡　　寺沢政俊
遺 跡 の 立 地：烏帽子岳南麓の扇状地状斜面に立地し，金原川を挟んで中原遺跡と隣接する。
検 出 遺 構：土坑１基（時期不明）
主な出土遺物：縄文時代中期の土器，土師器，須恵器，陶磁器
調 査 の 概 要：平成３年12月に長野調査事務所で行ったトレンチ試掘調査では，縄文土器片１点を表面採集した以外に遺構・遺物等は全く確認されていない。そこで今回は当調査区における遺構の存在確認を主たる調査課題として，面的調査及びトレンチ調査を行った。その結果，遺構は再堆積ローム層上面で小土坑１基（時期不明）を検出したのみであり，その上部の現旧耕作土（攪乱層）より上記の縄文土器片等の遺物を採集して調査を終了した。



第24図　釜村田遺跡全体図（1：4,000）



第25図　野行田遺跡全体図（1：4,000）

3　中原（なかはら）遺跡

所　在　地：小県郡東部町和字中原2758番地ほか　　調査担当者：川崎　保　甲田圭吾
調 査 期 間：平成４年４月13日～11月６日　　寺沢政俊
調 査 面 積：38,000㎡
遺跡の立地：烏帽子山南麓千曲川の支流成沢川と金原川に挟まれた複合扇状地上に立地する。
時代と時期：縄文時代早期～晩期，弥生時代後期，古墳時代・平安時代
遺跡の特徴：尾根上に広がる縄文（前期・後期の土坑群など）・弥生・古墳・平安の集落跡

主な検出遺構

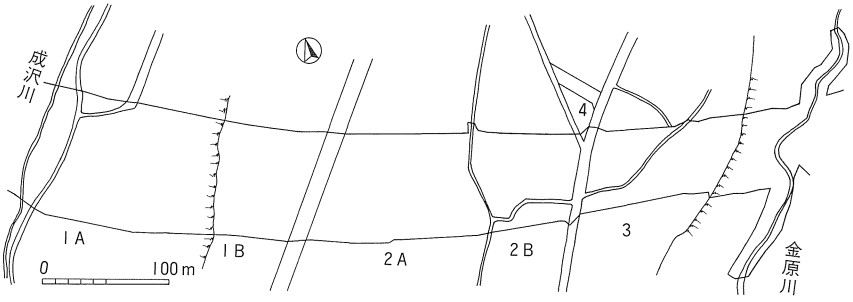
遺構／時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑
縄文	10		290
弥生	3		
古墳	1		
平安	2	2？	

主な出土遺物
土　器：押型文土器，縄文時代前期～晩期土器，弥生時代後期土器，土師器，須恵器，黒色土器
石　器：石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，打製石斧，磨製石斧，凹石，擦石，敲石，石皿，管玉
土製品：黥面土偶

現中原遺跡調査区（高速道建設予定地）南側の下大川の集落近辺では古く縄文時代などの遺物の出土が知られていたが，とくに昭和27年には後期堀ノ内式の敷石住居跡が発掘されたり，昭和41年にも人骨が納められていた加曽利Ｅ式の深鉢形土器が出土している。また平成２年度には調査区を挟んで圃場整備に伴う東部町教育委員会の発掘調査で縄文時代前期から後期中葉の土器が多く出土している。

調査の概要

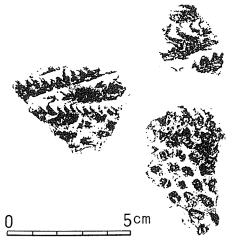
中原遺跡は，烏帽子山南麓の金原川扇状地の扇央に，主軸を東に振った細長い楕円形の広がりを見せる遺跡とされていたが，平成２年度の試掘調査の結果成沢川側にかなり広がることが確認され，遺跡の範囲は成沢川を西端とし，金原川を東端とした。



第26図　中原遺跡調査地区範囲（1：6,000）

以下，縄文時代を中心に発掘調査を概括したい。

早期は，押型文土器が遺構外ではあるが２Ａ地区，３地区から出土している（第27図）。当該期の遺構は確認できなかった。



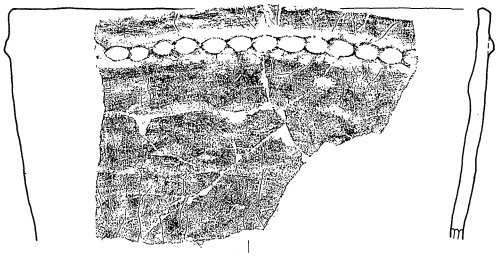
第27図　押型文土器

前期は，竪穴式住居跡は１Ｂ地区で５軒（前期前葉），２Ｂ地区で１軒検出されている。いずれもおおよそ長方形を呈し，地床炉を持つものもある。また１Ｂ・２Ａ地区を中心に，前期後葉（諸磯ｂ・ｃ式）の土坑群が検出されて

いる。諸磯ｃ式の土坑からは管玉が出土している。土器や石器（石鏃，石錐，石匙など）の遺物も前期に属するものが量的にもかなり多いようである。

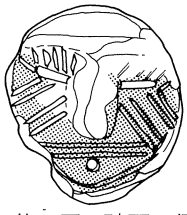
中期は，４地区から中期初頭，３地区には中期中葉の竪穴式住居跡が，１Ｂ地区では中期後半（加曽利Ｅ式）の埋甕をもつ住居跡がそれぞれ１軒ずつ検出されている。いずれも略円形を呈している。中期前葉と後半の住居跡はいずれも石囲炉である。

後期は，１Ｂ地区で後期初頭（称名寺式）の埋甕をもつ略円形の竪穴式住居跡が検出されている。また１Ｂ地区の西斜面を中心に後期初頭から前葉（称名寺式から堀ノ内式期）の径１ｍ・深さ１ｍ内外のほぼ円形の土坑群が検出され，２Ａ地区で低地の沢沿いよりも前期前葉から中葉（堀ノ内式から加曽利Ｂ式期）の略円形の土坑群（貯蔵穴？）が検出されている。



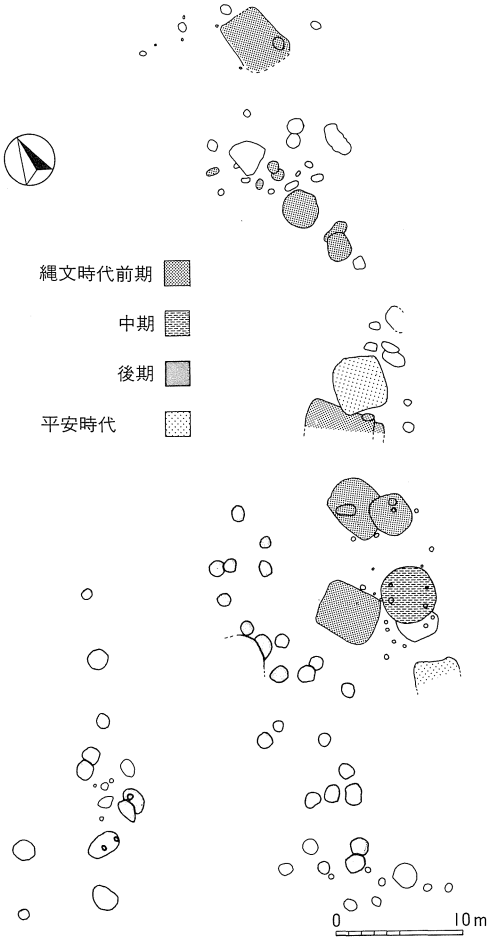
第28図　ＩＢ地区土坑出土土器（１：６）

晩期は４地区で不整形な楕円形の土坑から晩期末の土器と黥面（有髯）土偶が出土している。（第29図・スクリーントーンは塗朱された部分）

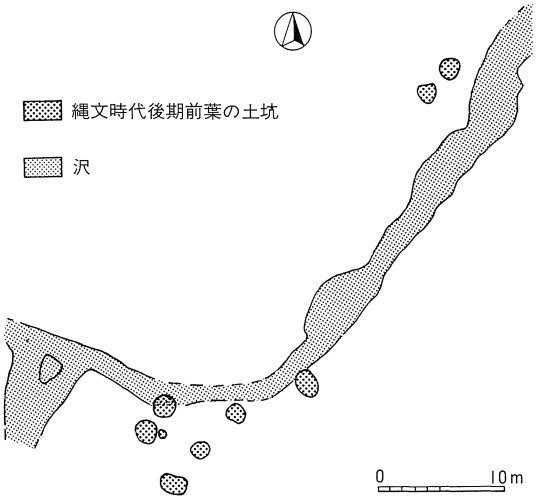


第29図　黥面土偶（１：２）

地形と遺構　中原遺跡は１Ｂ地区と２Ａ地区の間，２Ａ地区と２Ｂ地区の間に大きな沢が存在し，この２つの沢に切られる痩せ尾根の上に住居跡などの遺構が広がり（第30図），また低地の沢の周囲にも土坑が展開する（第31図）。



第30図　ＩＢ地区遺構配置図（１：600）



第31図　２Ａ地区低湿地部分遺構配置図（１：600）

4　上原古墳群（うえはら）

所　在　地：埴科郡坂城町南条3620番地ほか　　調査担当者：若林　卓
調 査 期 間：平成４年７月６日～９月17日　　西村政和
調 査 面 積：12,000㎡　　柳澤　亮
遺跡の立地：虚空蔵山北麓で，千曲川の支流である谷川左岸の河岸段丘上
遺跡の特徴：平安時代の集落

主な検出遺構

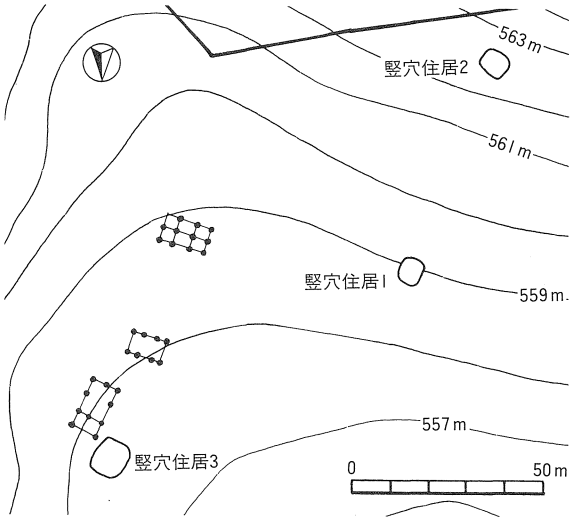
時期＼遺構	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	小穴
弥生	1			
平安	2			
平安～中世		3	25	224

主な出土遺物

土器・陶磁器：縄文土器，弥生後期土器，土師器，須恵器，灰釉陶器，中近世陶磁器
石器・石製品：打製石斧，石臼，黒曜石剝片
金 属 製 品：紡錘車，宋銭
そ　の　他：鉄滓，羽口

遺跡は北を谷川，東南を虚空蔵山北裾，西を谷川に出合う小谷に囲まれたなだらかな傾斜地に立地する。当初の対象であった14基の石積みが，近代以降の畑地開拓時に集められた石積み（通称「やっくら」）と判明したため，調査の主眼は埋没した遺構の検出に向けられ，東の急斜面部を除くほぼ全域の調査を行うこととした。

遺構は調査範囲の東寄り，標高559～556m間に集中する傾向が強い。明らかに住居と認識し得るのは，５×4.5mの方形のプランをもち，東壁中央に石組みのかまどを付設した竪穴住居３のみであるが，可能性を含めて外２軒みつかっている。何れも方形プランである。掘立柱建物は，正方位よりやや振れた主軸を有し，３×２間の総柱建物１棟と３×１間および３×２間の建物の合計３棟あるが，小穴も多数検出されているので，実数は増加すると思われる。土坑は平面円形ないし長円形の掘り方をもつものが殆どを占める。これらの遺構の造営時期について，竪穴３および２が９世紀後半に位置付けられるほかは，帰属時期を絞り込み難いものの，平安時代～中世のうちにはおさまるであろう。ただし，竪穴１は弥生時代後期に遡る可能性がある。なお，上記遺構の検出面より上位に当たるが，調査区南端の包含層中や石積み中に，鉄滓および羽口の破片が検出された。調査区南方に，鍛冶関連の施設が存在したことを示唆していよう。鉄滓は竪穴２の覆土中でもみつかっている。



第32図　主要遺構位置図（１：2,000）

5　山崎古墳・山崎遺跡

所　在　地：埴科郡坂城町中之条字山崎1648番地ほか　　調査担当者：柳澤　亮

調 査 期 間：平成４年11月９日～12月８日　　寺沢政俊

調 査 面 積：2,810㎡（試掘調査面積：1,610㎡を含む）

遺跡の立地：大峯山麓の扇状地

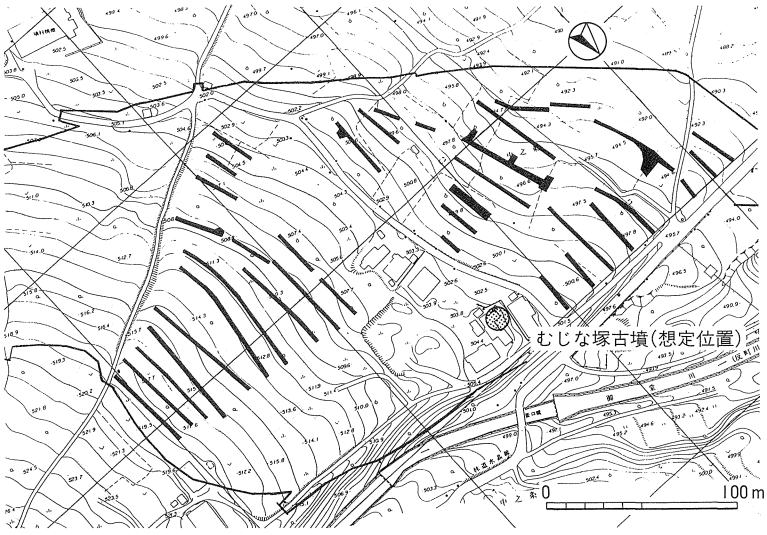
調査の概要　遺跡は大峯山（1,327m）山中から流れ出る御堂川によって形成された扇状地の扇央部に立地する。標高491～519m。なお，山崎古墳と山崎遺跡の遺跡範囲は一部調査区内で重複している。

既存の情報として，『坂城町誌』中巻（森嶋稔ほか1981）によると，山崎古墳は「御堂川古墳群山崎支群」と記載されている。その内容には横穴式石室を持つという「むじな塚古墳（畑地造成のための削平により湮滅）」ほか数基が御堂川左岸に沿って長く分布していると報告されている。また，山崎遺跡については少量の加曽利ＥⅢ式土器と磨製石斧が採集されたことが報告されている。

調査は試掘調査と合わせて実施し，山崎古墳では古墳の存在の有無の確認，また山崎遺跡では遺物包含層・遺構の確認を主たる調査課題とした。

山崎古墳内の「むじな塚古墳」（既述）は，聞き取り調査の結果，未承諾地内の宅地に確かに存在し，玉類・馬具類・須恵器等の遺物が出土したことが明らかとなった。墳丘は削平されたが，古墳の構造の一部が残る可能性があり，今後の調査は必要であろう。また起工承諾のとれた調査区内に散在する径２～４ｍ程の小規模の石積みについては，精査及びトレンチ調査の結果と地元の人の話を総合して，この周辺の農地にみられる通称「やっくら」（開墾，耕作時にでた礫を積み上げたもの）であると判断した。残る区域には重機による幅２ｍのトレンチを等高線にほぼ平行に設定したが，遺構・遺物共に存在しなかった。

山崎遺跡の調査区内にも山崎古墳同様のトレンチを設定したが，20～30cm程の現旧耕作土の下には，扇状地を形成した砂礫層が厚く堆積しており，今回の調査では遺物包含層・遺構は確認されなかった。また遺物は，表面や耕作土及び上部の攪乱層より数点の黒曜石片と土師器・須恵器片を採集しただけに止まる。



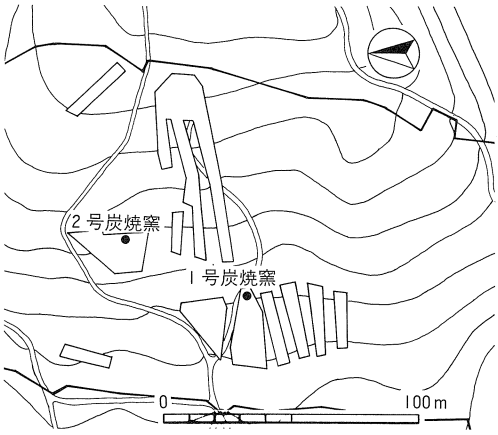
第33図　山崎古墳・山崎遺跡トレンチ配置図（1：4,000）

6　土井ノ入窯跡

所　在　地：埴科郡坂城町坂城字蓬平5605，5595番地ほか　　調査担当者：若林　卓
調 査 期 間：平成４年度12月１日～12月18日　調 査 面 積：4,000㎡　　西村政和
遺跡の立地：鳩ケ峯西南の山麓斜面

調査の概要　出土した遺物は皆無，検出した遺構は炭焼窯２基のみである。いずれも焚口を斜面下方に向け，窯壁に粘土を貼って構築している。１号炭焼窯の焼成室は平面イチジク形，全長2.5m，奥壁幅1.8m，焚口幅0.4mの規模をもつ。２号炭焼窯は焚口付近がやや膨らむイチジク形を呈し，全長1.6m，奥壁幅1.4m，焚口幅0.3m程度である。両者とも底面直上に炭の堆積がみられた。

土井ノ入窯跡は奈良～平安時代の須恵器・瓦窯跡として知られているが，今回の調査ではそれは見つからなかった。地形からも，窯跡の分布は土井ノ入１号窯を東限とし，それより東方には及ばないと考えられる。



第34図　遺構位置図（1：3,000）

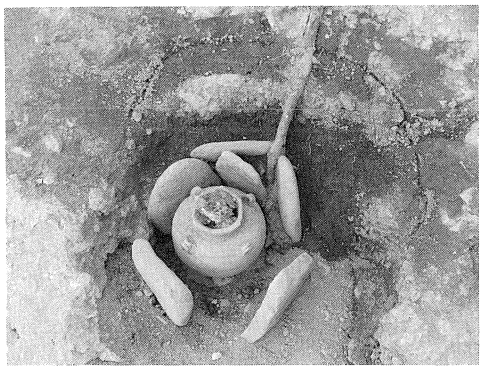
7　観音平経塚

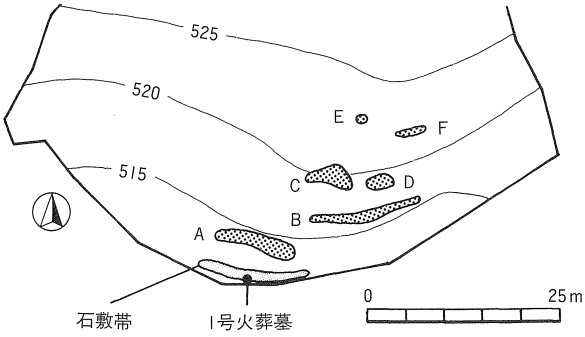
所　在　地：埴科郡坂城町坂城字観音平4355番地　　調査担当者：若林　卓
調 査 期 間：平成４年度９月14日～11月26日　調 査 面 積：3,600㎡　　西村政和
遺跡の立地：観音沢川右岸の山裾斜面　　柳澤　亮
遺跡の特徴：中世の墓域および経塚

観音平経塚は，坂城町南日名地区に所在し，観音沢川右岸の山裾に立地する礫石経経塚である。1979年に発掘調査が行われ，成果内容の一端が公表されているものの，報告書未刊のため詳細は知られていない。今回の調査では新たに経塚背後の斜面部を調査した。その結果，下部施設を伴う五輪塔群と骨蔵器をもつ火葬墓の存在が確認され，墓域としての性格も明らかになった。遺跡は南西方向に下る谷の開口部にあたっており，前面にはなだからな傾斜地が開け水田および果樹畑として利用されている。

１号火葬墓　調査区の南端中央，後述する石敷帯直下で検出した。直径1.2m，深さ0.5mほどの円形の墓壙内に，扁平な河原石を組み合わせた石室状の施設をつくり，その内部に火葬骨片を満たした骨蔵器を納める構造である。石組みと墓壙掘り方との間は土で充塡し，さらに墓壙全体を蓋をするように1.3×１m，厚さ10cmの板石が置かれていた。副葬品はない。骨蔵器は古瀬戸の四耳壺を用いている。12世紀末葉～13世紀初頭に位置付けられ，本火葬墓造営年代の上限を示す。

五輪塔群　調査区南東部，標高523m付近より下方に分布する。各輪に分解した状態のものが大部分を占めるが，火輪または水輪以下が上下関係を保ったままの塔も存在する。凝灰岩と多孔質安山岩を主な石材に使っている。各輪の出土総数413，推定五輪塔数132以上を数える。五輪塔は斜面を削り出して造成した幅狭い平坦面に配列されている。こうした五輪塔造立区域が6箇所において認められた。F区を除く5区域で火葬骨を納めた下部施設が計40基ほど検出されている。構造は，扁平な礫を組み合わせた石室状のもの，ピットを掘り込むもの，明確な掘り込みをもたず骨片を敷きつめたようなものの3類に類別でき，前二者が主流をなす。副葬品として，古銭7（A・D区），刀子2（A区），かわらけ1点（C区）が出土した。原位置を保つ五輪塔との関係をみると，下部施設の真上よりややずれた位置に塔を立てているようだが，上部を欠いた状態で検出した例が多いため，その実態は判然としない。いずれにせよ，埋葬域と五輪塔建立域とが区別されていないのは確かである。F区は，下部施設を伴わないのみならず，同型同大，同石材の五輪塔が等間隔で一列に並ぶ，特異な様相を示している。対応する個別の埋葬地は認められなかった。五輪塔の型式から，15世紀を中心とした造営期間が考えられるが，さらなる特定は今後の課題としたい。


第35図　1号火葬墓（一部復元）



第36図　五輪塔造立区域（1：1,000）

第37図　五輪塔群（A区東半部）

石敷帯　今回の調査では，経塚そのものの実態は明確にならなかったが，山裾を縁取るように敷設された石敷遺構がみつかった。扁平な河原石を平均30cm程度の厚さに敷きつめて形成したもので，やや弧を描く帯状の平面形を有する。現状の規模，弦長14m，幅約1.3mを測る。石敷帯には経塚と同様な多字一石経石が混在し，両者の関連を窺わせるものの，経塚に伴う施設なのか否か，1979年の調査規模・内容が明らかでない状況の下では，その確証を摑むことはできなかった。ただし，画然と分離できないが，西端よりおよそ6mまでの部分はアラビア数字を注記した礫を含むので，1979年以降の形成になることが明らかであろう。

上信越自動車道関連　試掘調査

8　真行寺遺跡（しんぎょうじ）

所　在　地：小県郡東部町祢津字元会下1095番地ほか　　調査担当者：川崎　保　甲田圭吾

調 査 期 間：平成４年12月14日～12月15日　　対 象 面 積：13,000㎡　　試 掘 面 積：271㎡

調 査 方 法：重機によるトレンチを設定して遺構および遺構包含層の存在を確認した。

遺跡の立地：千曲川の支流，求女沢川と所沢川によって形成された複合扇状地上に両河川に挟まれるように立地している。

概　　況：現耕土は30～50cmを測る。その下位に部分的に遺物包含層が存在する。遺跡のほぼ中央に（現農道）埋没した沢があるが，やはり遺物が包含されている。また遺構もかなり存在し（住居跡？７軒，土坑10基，溝３本），表面からも多くの遺物（縄文土器，石器，須恵器，土師器）が採集されている。

調 査 結 果：試掘の結果や遺物の散布状況から考えて桜畑遺跡（北西）側にも広がる可能性が高い。過去の発掘調査からもかなり遺構密度が高いことが想定される。

9　桜畑遺跡（さくらはた）

所　在　地：小県郡東部町祢津字五輪原1200番地ほか　　調査担当者：川崎　保　甲田圭吾

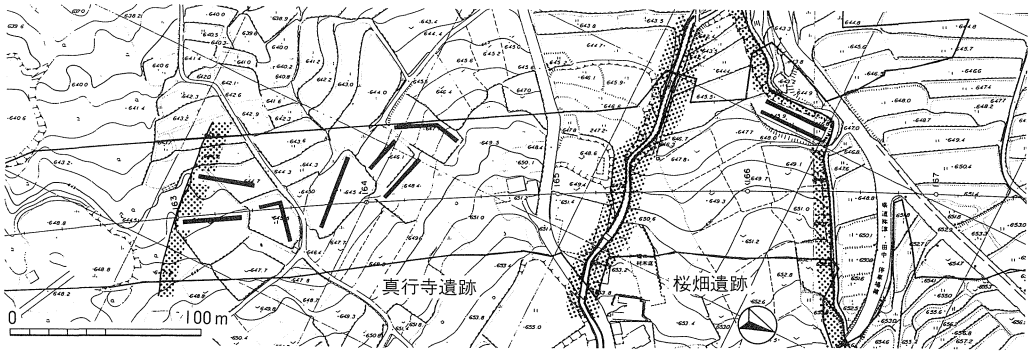
調 査 期 間：平成４年12月15日

対 象 面 積：5,000㎡　　試 掘 面 積：70㎡　　調 査 方 法：重機によるトレンチ調査

遺跡の立地：千曲川の支流，求女沢川の左岸，求女沢川・所沢川によって形成された複合扇状地上に立地している。

概　　況：昭和44年，50年に発掘調査が行われ，縄文時代前期，中期，平安時代の竪穴式住居跡が出土したことが知られている。現耕土は30～50cmを測る。今回の調査は，求女沢川起源の砂質シルトが厚く堆積し（現在は水田として利用），遺物包含層の存在は確認できなかったが，遺跡の主要範囲である水田の北東側の段丘上の畑地部分には多くの遺物が表面採集されている。

調 査 結 果：遺物の分布状況や過去の発掘調査の事例より考えて，かなり遺構密度が高いことが想定される。



第38図　真行寺・桜畑遺跡トレンチ配置図（１：4,000）

10　細田（ほそだ）遺跡

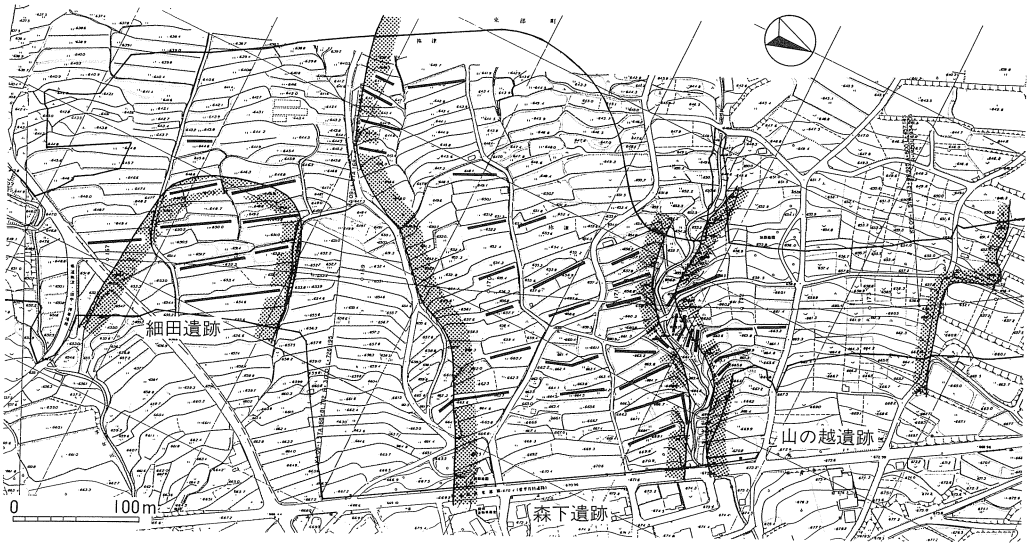
所　在　地：小県郡東部町祢津字細田1845番地ほか　　調査担当者：川崎　保　甲田圭吾
調 査 期 間：平成４年12月11日～12月14日
対 象 面 積：9,000㎡　　試 掘 面 積：818㎡
調 査 方 法：重機によるトレンチを設定して遺構および遺物包含層の存在を確認した。
遺跡の立地：大室山（標高1,146.9m）の南麓，千曲川の支流，求女沢川の右岸の扇状地上に立地する。
概　　況：現耕土は30～50㎝を測り，遺跡は緩やかな尾根上に立地していて，部分的に遺物包含層や遺構（住居跡？２軒，土坑９，溝２）が確認された。
調 査 結 果：また今回は試掘できなかった森下遺跡側（西側）にも遺跡が広がっている可能性がある。遺構密度は高いとは言えないがまんべんなく遺構が出土している。

11　森下（もりした）遺跡

所　在　地：小県郡東部町祢津字滝畑2069番地ほか　　調査担当者：川崎　保　甲田圭吾
調 査 期 間：平成４年12月８日～12月11日
対 象 面 積：45,000㎡　　試 掘 面 積：1,632㎡　　調 査 方 法：重機によるトレンチ調査
遺跡の立地：大室山（標高1,146.9m）の南麓，千曲川の支流，三分川と求女沢川の間の複合扇状地上に立地する。
概　　況：現耕土は30～50㎝を測り，その下位に遺物包含層が存在する。また遺跡のほぼ中央に深さ３mを越す埋没した沢が存在することが認められていて，遺構はこの沢に切られた尾根の上に存在する。
調 査 結 果：遺構密度は高くないが，細田遺跡側にも遺跡が広がる可能性が高い。

12　山の越（やまこし）遺跡

所　在　地：小県郡東部町祢津字町屋3089番地ほか　　調査担当者：川崎　保　甲田圭吾
調 査 期 間：平成４年12月７日～12月８日
対 象 面 積：14,000㎡　　試 掘 面 積：448㎡　　調 査 方 法：重機によるトレンチ調査
遺跡の立地：大室山（標高1,146.9m）の南麓，千曲川の支流，三分川左岸の複合扇状地上に立地する。
概　　況：現耕土は30～50㎝を測り，その下位に遺物包含層が存在する。遺構は埋設土器（縄文？）や住居跡が三分川左岸の緩やかな尾根の上にまんべんなく存在し，縄文土器，土師器，須恵器などが東側でも表面採集されており遺跡が広がることが想定される。
調 査 結 果：三分川による砂礫層が川沿いに厚く堆積しているところ以外は，緩やかな傾斜地で遺構がまんべんなく存在していることが考えられる。また，遺物の散布状況から試掘調査が実施できなかった北西側も発掘調査が必要であろう。



第39図　細田・森下・山の越遺跡トレンチ配置図（1：6,000）

(26)　大日ノ木（おひのき）遺跡

所　在　地：上田市芳田字木ノ上791番地ほか　　調査担当者：柳澤　亮

調 査 期 間：平成4年12月14日～12月21日　　寺沢政俊

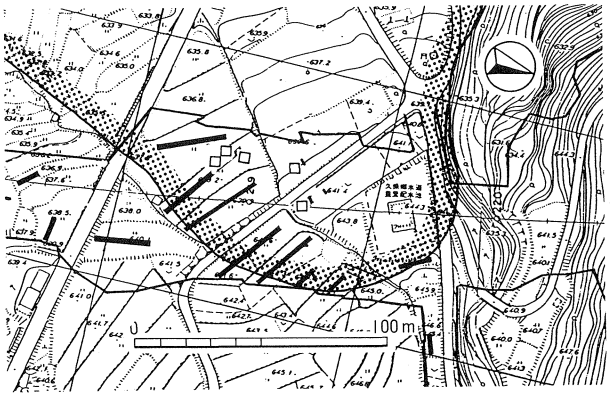
対 象 面 積：9,500㎡　　試 掘 面 積：502㎡　調 査 方 法：重機によるトレンチ調査。

遺跡の立地：殿城山（1,193m）山中から流れ出る行沢川（北側）と市民の森付近から流れる瀬沢川（南側）に挟まれた扇状地の緩斜面上に位置する。標高637～647m。

概　　況：調査区内の畑地では縄文・弥生・古代の土器片，黒曜石片が無数に表面採集される。調査は，この畑地では小規模の坪掘り，水田域では等高線に平行して幅2mのトレンチの掘削を行った。その結果，調査区の土層は水田形成による削平を受けた部分を除いて，耕作土の下には全体に遺物包含層が確認され，その下には大小の礫を含むローム質土が堆積している。

遺構は，ローム質土上面を検出面として，遺跡範囲南東縁辺りを自然流路痕が走り，住居跡らしき遺構が畑地に近い水田域で3基，畑地で2基の計5基が検出された。また特記する遺物では自然流路付近の包含層で縄文晩期の土器片と石棒が出土している。

調 査 結 果：路線内の遺跡範囲には広く遺構が存在しており，発掘調査・記録保存を必要とする。また，特に畑地付近に相当数の遺構が密集していると推察される。



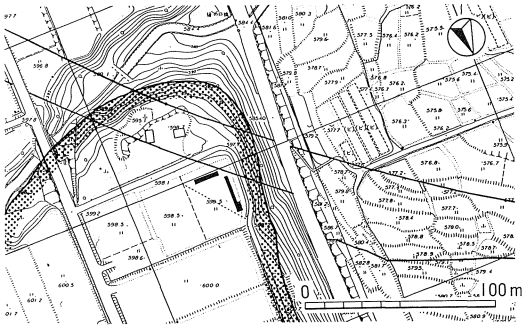
第40図　大日ノ木遺跡トレンチ配置図（1：3,000）

14　下樋口（しもひのくち）遺跡

所　在　地：上田市殿城字下樋口1702番地ほか　　調査担当者：柳澤　亮
調 査 期 間：平成４年12月16日　　寺沢政俊
対 象 面 積：200㎡　試 掘 面 積：68㎡
調 査 方 法：重機によるトレンチ調査　遺跡の立地：殿城山西麓の神川段丘面
概　　況：遺跡は殿城山（1,193m）の西山麓で神川によって形成された高位段丘面（染谷面）の端部に立地する。標高598m。

調査は平成３年度の試掘調査残部である水田域に，東西と南北に計２本のトレンチを設定した。調査区の土層の状況は，耕作土下に粘土・粘土混砂質土・砂が不連続に細かく堆積している。さらにそれらの層の下に山砂（20～60㎝）或いは極めて締まりの良い粘土が厚く堆積しており，これが基盤層といえよう。

調 査 結 果：昨年度の調査結果も含めて，高速道路線内では水田耕作土上面で土師器・須恵器片が少量表面採集されるだけであり，遺物包含層は残存しておらず，遺構も存在しないと判断される。



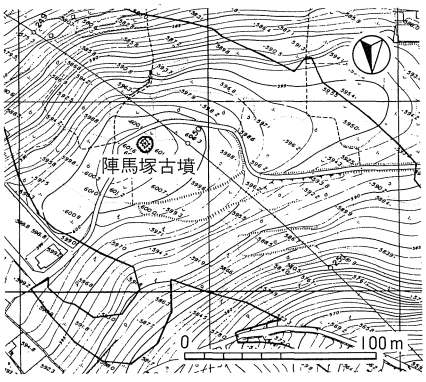
第41図　下樋口遺跡トレンチ配置図（１：4,000）

15　陣馬塚（じんばつか）古墳

所　在　地：上田市住吉字横山471番地ほか　　調査担当者：若林　卓
調 査 期 間：平成４年12月17日　　西村政和
対 象 面 積：9,000㎡
調 査 方 法：現地踏査
遺跡の立地：陣馬塚古墳は，南方直下に染屋台地を見下す横山丘陵の頂部に位置し，標高は約600m，直下の水田面との比高およそ50mである。

概　　況：古墳は現状で直径９m前後，高さ約２mを測る円墳で，横穴式石室の一部と思われる巨石が露出している。南東斜面に認められる幅1.5m程の溝状の窪みが，天井石を部分的に取去った痕跡とすれば，石室の主軸方向を示していよう。墳丘表面には人頭大～拳大の角礫が散見されるが，積石塚の範疇に含め得るかどうかは断定しかねる。

調 査 結 果：陣馬塚古墳及びその周辺の発掘調査，記録保存が必要であろう。



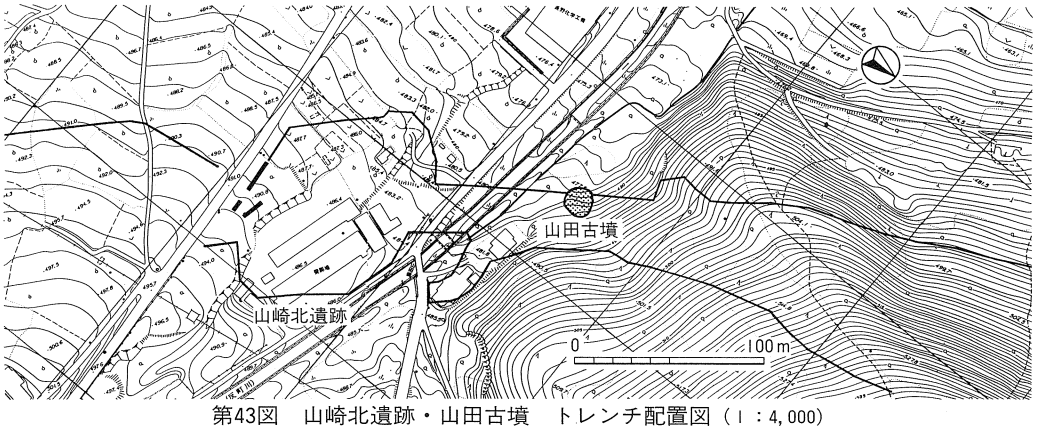
第42図　陣馬塚古墳位置図（１：4,000）

16　山崎北遺跡（やまざききた）

所　在　地：埴科郡坂城町中之条字山崎1632番地ほか　　調査担当者：柳澤　亮
調査期間：平成４年12月８日～12月10日　　寺沢政俊
対象面積：5,500㎡　　試掘面積：72㎡
調査方法：重機によるトレンチ調査　遺跡の立地：大峯山麓の扇状地
概　　況：調査区内は，かなりの部分が未承諾地・果樹園・畑地となっており調査可能地は少なく，試掘率は低い。元クルミ栽培地と思われる荒地に幅２ｍのトレンチを３本設定した結果によると，調査区内の土層は耕作土（20～40cm）の下には扇状地を形成した砂礫層が厚く堆積しており，遺物包含層は確認されず，遺物・遺構も検出されなかった。
調査結果：当試掘調査内には遺物包含層は存在せず，遺物・遺構も確認できなかった。ただし，今回の試掘率が低いために遺跡範囲全体の様相を把握できたとはいえず，調査区残部については最低限，試掘調査を必要とする。

17　山田古墳群（やまだ）

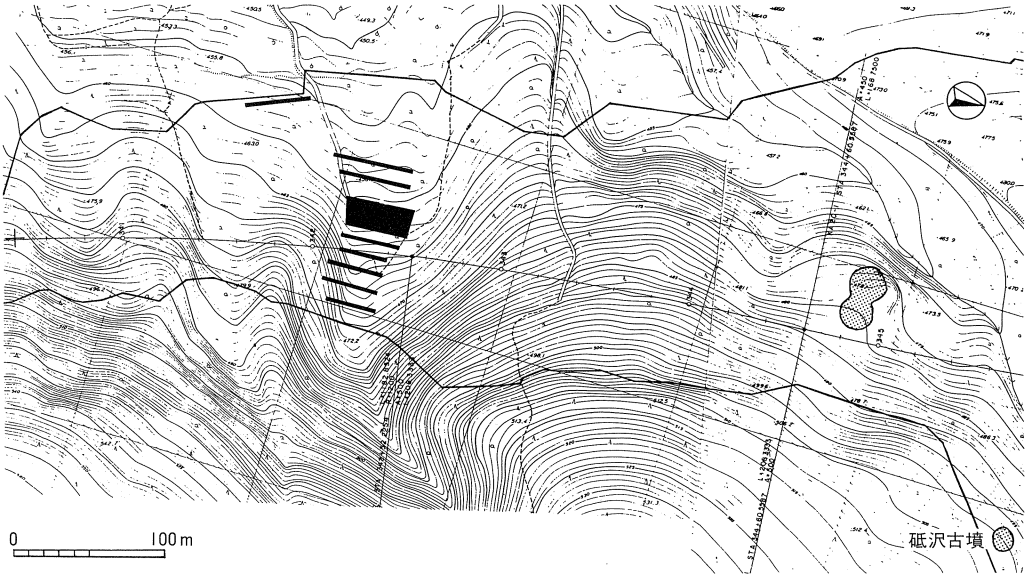
所　在　地：埴科郡坂城町中之条字山田1816番地ほか　　調査担当者：若林　卓
調査期間：平成４年11月27日および12月１日　　西村政和
対象面積：4,000㎡　　試掘面積：８㎡
調査方法：人力によるトレンチ調査
遺跡の立地：御堂川右岸の山裾
調査結果：『坂城町誌』中巻（森嶋稔ほか1981）によれば御堂川古墳群山田支群は４基から成るという。高速道用地内では，踏査で確認できた古墳らしきマウンドは，今回対象とした１基だけであった。試掘開始の直前に，このマウンドが数十年前の土石投棄によって生じたとの情報を得たが，その裏付けの意味を含め調査を行った。調査の結果，このマウンドは予想通り単なる土石の堆積にすぎないことが判明した。
本調査の必要はない。



第43図　山崎北遺跡・山田古墳　トレンチ配置図（１：4,000）

18　東平古墳群（ひがしだいら）

所　在　地：埴科郡坂城町大字中之条字開畝2348番地ほか　　調査担当者：川崎　保
調 査 期 間：平成４年11月９日～11月25日　　甲田圭吾
対 象 面 積：12,000㎡　　試 掘 面 積：1,123.5㎡
調査の方法：重機もしくは必要に応じて手掘りトレンチを設定し，古墳などの遺構と遺物包含層の存在を確認した。
遺跡の立地：千曲川の支流である御堂川の右岸，大峰山山麓
概　　況：『坂城町誌』中巻（森嶋ほか1981）によれば，御堂川古墳群の５つの支群のうちの１つが東平支群である。また『坂城町遺跡詳細分布地図』に砥沢古墳の名称が見え，試掘調査に伴う踏査でマウンドを確認した。また，砥沢古墳の南西にも新たに２基古墳状隆起が存在することがわかり，東平古墳群の調査範囲とともに試掘調査が必要となった。本来の試掘調査範囲に計11本のトレンチを設定したが，尾根の部分にはわずかに表土がのるだけであり，沢の部分には２～３ｍと厚く無遺物層が堆積しており，遺構や遺物包含層は確認できなかった。砥沢古墳は良好に形状をとどめ古墳であることは明らかであるので，試掘調査をする必要は認められず，詳細は本調査に委ねることとした。また砥沢古墳南西の２基の古墳状隆起は小木や下草を伐採し平面形を調べ，トレンチを設定したところ，２基のマウンドの頂上よりおのおの土師器片が出土した。また西側のマウンドは径約15mの略円形を呈し幅１ｍほどの石が埋設されている。東側のマウンドは現状ではややいびつな形をしている。ダブルマウンドである可能性もある。
調 査 結 果：砥沢古墳とその西南の２基のマウンドやこれら周辺の調査が必要である。



第44図　東平古墳群トレンチ配置図（１：5,000）

北陸新幹線関連

19　風呂川古墳

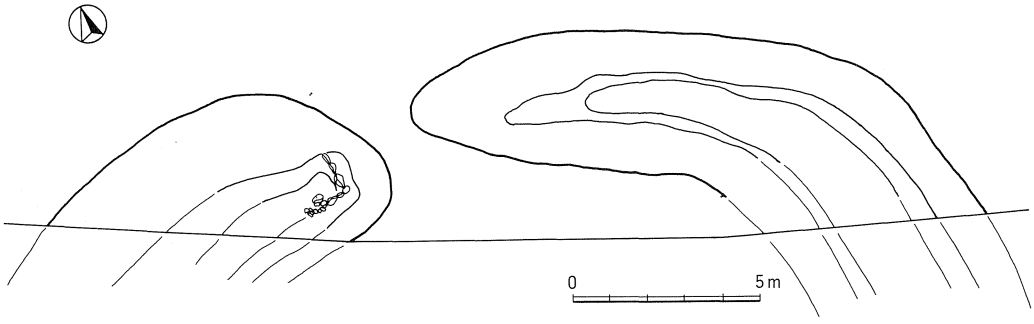
所　在　地：上田市秋和字風呂川1129番地　　調査担当者：大竹憲昭
調 査 期 間：平成４年７月10日～同年７月11日　　上田典男
調 査 面 積：200㎡
遺跡の立地：山腹の平坦地上
時代と時期：古墳時代中期
遺跡の特徴：古墳周溝

本古墳は，北陸新幹線五里ヶ峯トンネル工事用道路に周溝の一部がかかり調査が行われた。『長野県史』の遺跡地名表によると，直刀の出土があったことが記載されているが，墳丘自体はすでに土取り等で完全に失われており，正確な位置・規模等は不明であった。しかしながら公図上に円形の地籍があり，これを避けるように工事用道路も設計されたが，結果的には本来の墳丘は円形地籍よりもはるかに大きく一部が道路敷にかかってしまった。

周溝は一部がとぎれており，ブリッジであると考えられる。調査範囲内での規模は，検出面で幅が約４m，深さは深いところで約1.2mを測る。覆土は山腹の上位から崩落してきたと思われる拳大～人頭大の亜角礫を多量に含んでいる。

ブリッジ西側の周溝底面には石組が認められたが，調査範囲外にのびていくためその全貌は明確ではない。また，この石組部分で遺物が集中して出土している。遺物は土師器の高杯・坩が主体をなし，それぞれ数個体はあったと考えられる。時期的には５世紀前半の所産と考えられる。

調査した周溝の範囲は一部分であるため推定の域は越えないが，周溝外縁が直線的なところとやや屈曲するところが認められることから本古墳は方墳である可能性が強いといえよう。また，本古墳の周辺には大蔵京古墳（方墳）があり，出土遺物の比較からも大蔵京古墳に後続する時期に位置付けられそうである。墳丘自体は煙滅しているものの，主体部が粘土槨等であればまだ一部が残存している可能性もあり，今後調査が行われるときには十分配慮する必要があろう。



第45図　古墳周溝（Ⅰ：200）

20　開畝（かいぜ）遺跡

所　在　地：埴科郡坂城町中之条開畝2356番地ほか　　調査担当者：柳澤　亮　広瀬昭弘

調 査 期 間：平成４年７月６日～７月30日　　調 査 面 積：3,500㎡

遺跡の立地：複合扇状地を上り詰めた山脚部に位置し，開畝製鉄遺跡（中世）が隣接する。

遺跡の特徴：平安時代初頭（奈良時代末）の集落と中世の土坑

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑
平安時代	6		8
中　世			2
不　明		1	31

主な出土遺物

土　器：奈良・平安時代の土師器，須恵器，内耳鍋

石製品：硯

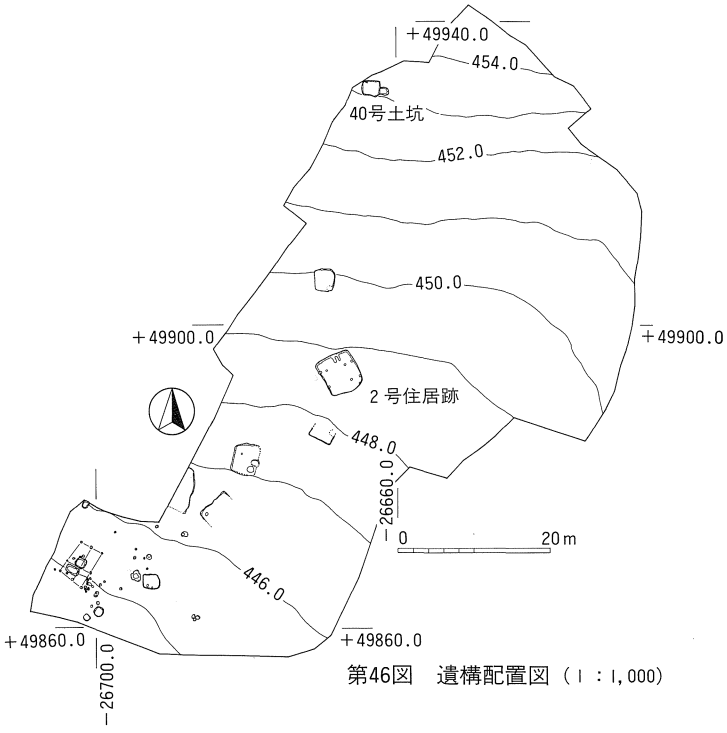
鉄製品：釘

調査区は南西に傾斜しており，そのほぼ東半分は沢の影響で腐植土と礫が厚く堆積し，遺構は存在していない。西半分では，20～40cm程の耕作土の下に堆積する小角礫を含む黄褐色土の上面で遺構が検出できる。計６軒検出された竪穴住居跡は全て方形プランを呈し，切り合いなく点在している。調査区中央の２号住居跡は唯一残りが良く，一辺５ｍの方形で北壁中央にカマドを持つ。柱穴は東西壁際に各２基と床面に２基の計６基確認された。カマドの東横の床面で完形の土師器の杯２個体が重なって出土したほかは，遺物は少ない。その他の住居跡は，掘り形が浅く，柱穴も不明確であり，カマドの痕跡を残すものは３軒であった。

また，調査区最北部で検出された40号土坑は2.4×2.0mの方形で，北壁付近から須恵器の短頸壺と杯が各１個体，高台付杯２個体の計４個体が全て完形で折り重なった状態で出土した。これらの遺構の時期は，出土遺物から，およそ８世紀末から９世紀初頭の同一期に当てはまると考えられる。

調査区南部には小土坑群や，２×２間の掘立柱建物跡が検出できたが遺物が少なく時期は決定できない。

なお，中世の遺構では，内耳鍋片または硯片を出土した方形の土坑が２基検出されたが，製鉄遺跡と直接関連する遺構は確認できなかった。



第46図　遺構配置図（1：1,000）

第47図　40号土坑土器出土状況

(3) 長野調査事務所

発掘調査の概要

調 査 区 域　長野市，更埴市，北安曇郡美麻村

調査遺跡数　10遺跡

更埴市清水製鉄遺跡，更埴条里遺跡，屋代遺跡，長野市小滝遺跡，春山遺跡，春山Ｂ遺跡，前山田遺跡，榎田遺跡（以上上信越道関係）　長野市（仮）川中島遺跡（北陸新幹線関係）　北安曇郡美麻村千見遺跡（県道大町線関係）

調査表面積　清水製鉄遺跡（14,000㎡），更埴条里遺跡（13,500㎡），屋代遺跡（20,500㎡），小滝遺跡（2,000㎡），春山遺跡（250㎡），春山Ｂ遺跡（5,700㎡），前山田遺跡（550㎡），榎田遺跡（9,600㎡），川中島遺跡（1,000㎡），千見遺跡（800㎡）

調 査 期 間　平成４年４月13日～平成５年１月８日

本年度は，中野支所が事務所に昇格し，調査区域が大きく縮小した。清水製鉄遺跡は県内でも例のない平安時代後半の製鉄遺跡であり，製鉄から鍛冶の一貫生産が確認された。更埴条里遺跡では近世から古墳時代の水田跡と平安時代の集落跡が検出され，土地利用の複雑な変化が確認された。屋代遺跡では昨年の引続きの調査ではあるが，いくつかの重要な知見を得ることができた。第一は，洪水砂に覆われた平安時代中頃の礎石建物群の発見であり，今後該期の集落研究をすすめるうえで貴重な資料となろう。第二は，古墳時代の水田跡の発見であり，屋代遺跡及び更埴条里遺跡の水田開発を考えるうえで重要である。なお，調査の最終段階で確認した縄文時代中期の包含層は，来年度の調査の課題である。小滝・前山田遺跡は，ともに千曲川右岸の山間に戦国期の山城を背後に持つ共通した立地で，該期の集落を考える上で貴重である。春山・春山Ｂ遺跡は弥生時代後期の集落跡を調査し，隣接する川田条里遺跡の水田跡との関係が注目される。榎田遺跡は従来の調査と合わせると古墳時代後期の1,000軒を越える住居跡が調査され，該期の調査例としては県内で例のないものである。また河川跡から発見された多数の木製品の中には，木製の鐙や鞍をはじめとして類例の少ないものも多く，今後の整理作業が期待される。

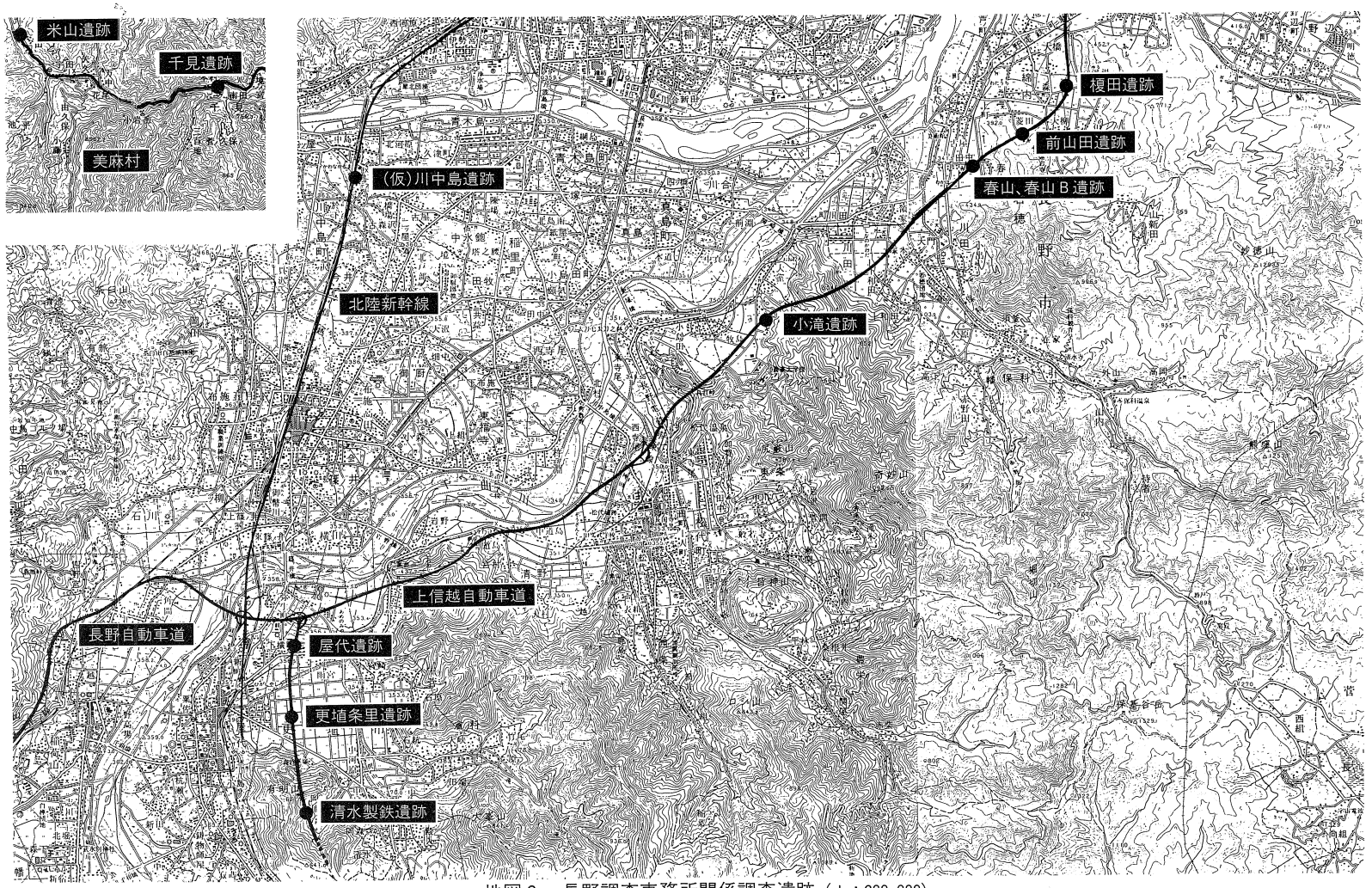
整理作業の概要

報告書刊行を目的とした，整理課が担当した整理作業の概要について記す。

整理遺跡数　16遺跡

東筑摩郡明科町北村遺跡，坂北村向六工遺跡，十二遺跡，麻績村野口遺跡，古司遺跡，子尾入遺跡　更埴市鳥林遺跡，小坂西遺跡，鶴萩七尋岩陰遺跡，赤沢遺跡，塩崎城見山砦跡，鶴前遺跡，石川条里遺跡，篠ノ井遺跡，松原遺跡，川田条里遺跡

北村遺跡は本年度報告書刊行の運びとなり，鶴前遺跡までは来年度印刷業務を残すのみで実質的な整理作業は終了した。他の４遺跡は当センターが今まで経験したことがないほどの遺物量が多く，基礎整理に終始した。



地図3　長野調査事務所関係調査遺跡（1：200,000）

上信越自動車道関連

1　小滝（こたき）遺跡

所　在　地：長野市松代町大室字小滝　　調査担当者：本田　真
調 査 期 間：平成４年５月11日～同年７月17日　　吉江英夫
調 査 面 積：2,000m²（平成元年度6,000m²）
遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防・背後低地と奇妙山系尾根裾の緩斜面
時代と時期：中世，近世
遺跡の特徴：中世末集落，近世の水田・墓域

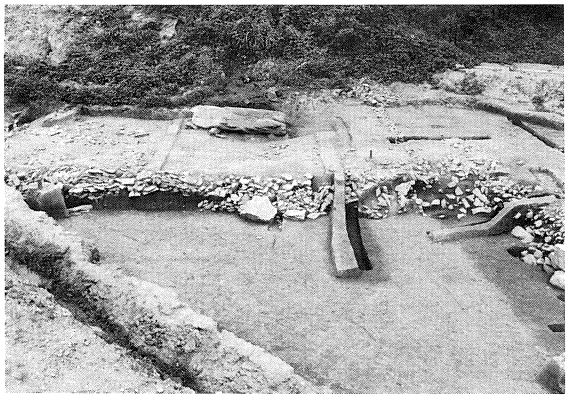
主な検出遺構

遺構／時代	墓	土壙	柱穴	溝	石集中	石垣石列	暗渠	その他
中世末	2	9	約250	3	4	1	1	掘立柱建物　2以上 竪穴状遺構　2
近世	2	4		4	1	2		水田　2（畦畔3）

主な出土遺物
焼　　物：中～近世の土器・陶磁器
石 製 品：石臼，手水鉢，五輪塔
金属製品：銭貨
そ の 他：人骨

小滝遺跡は奇妙山系の尾根の麓に位置し，平成元年度に調査が行われているが関越自動車道Ⅱ期線部工事着工に伴って今年度の調査は実施された。本遺跡は旧千曲川により形成された微高地・後背低地と山際の緩斜面に立地し，調査範囲はこれを横断するかたちをとる。微高地は粒子の粗い砂礫を主体としてその上を細砂が覆っており，後背低地もこの砂により被膜されていた。山際の緩斜面は山の崩れた土砂が堆積したもので，礫の混じる山砂を主体としている

今年度調査の対象となったのは中世末と近世の遺跡であった。中世末の遺構としては山際の斜面からは，整地がおこなわれた平坦地とそれを取り巻く石垣（第48図），その上面では建物の基礎のための栗石や方形に石が並んだ建物跡などが検出された。特に整地は大規模かつ継続的におこなわれたものである。微高地上では多数の柱穴を確認したが，これは東西に走る溝によって分断されていた。このほか旧河道へと連続していく低地の際でいくつかの火葬施設を検出した。当遺跡を取り巻く中世末の環境で注目したいのは，背後の尾根上に位置していた霞城という山城の存在である。両者は空間的にも近接しており時期的にも重なる可能性が高いため，今後霞城を射程にいれた検討の必要があろう。


第48図　山際の整地面と石垣

近世の遺構としては後背低地で畦畔を伴った水田，微高地南端部で屈葬で埋葬された人骨や積み石を伴う墓をいくつか検出した。

2　春山（はるやま）遺跡、春山Ｂ遺跡

所　在　地：長野市大字若穂綿内字田中7486－２ほか　　調査担当者：田中正治郎，夏目大助
調査期間：平成４年２月24日～９月12日　　月原隆爾，宮入英治
調査面積：春山遺跡250m²，春山Ｂ遺跡7,200m²（総計14,400m²）
遺跡の立地：千曲川右岸南東側自然堤防および後背湿地
時代と時期：弥生時代前期～後期，平安時代，近世
遺跡の特徴：弥生時代前期の土壙，弥生時代中・後期の集落，近世水田面

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	方形周溝墓	土壙（井戸を含む）	（自然流路を含む）溝	遺物集中箇所
弥生中期	0				1	
弥生後期	7	1	2		40	2
平安						
近世						
不明		4		20	1	

主な出土遺物
土器・陶器：弥生中期土器，弥生後期土器，土師器，須恵器，近世陶磁器
石　　器：石鏃
石　製　品：勾玉，管玉，ガラス小玉

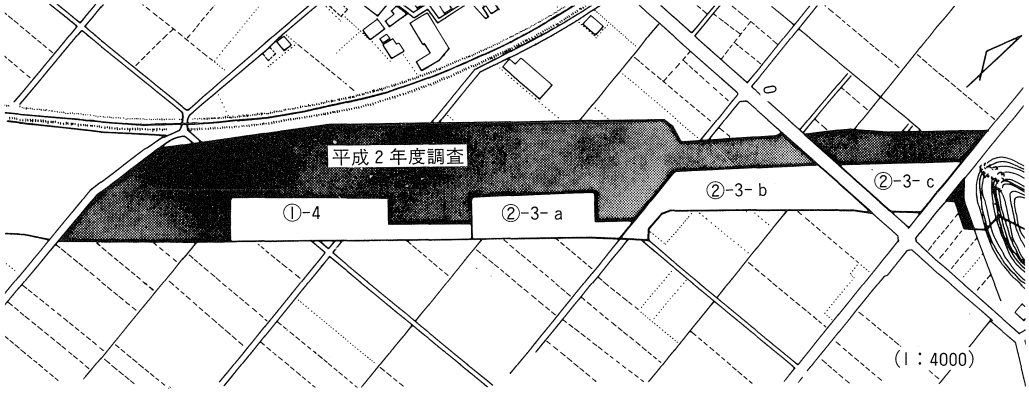
春山遺跡と春山Ｂ遺跡は上信越自動車道建設に伴う一連の緊急発掘調査として平成２年度に第１次約18,500m²を対象とする調査が行われ，多数の弥生時代中・後期の住居址とともに方形周溝墓等が発見された。今回の第２次調査では残りの7,200m²（総計14,400m²）を道路工事工程により分割し，川田条里遺跡側から①－４，②－３－ａ，②－３－ｂ，②－３－ｃの各調査区を対象として行ったものである。（第49図参照）

１．春山遺跡

今回の調査では対象面積がきわめて狭いうえに用地内を農業用水路が貫いているため重機を用いての確認調査にとどまらざるを得なかったが，春山Ｂ遺跡②－３－ｃ区に連なる凹地と弥生時代後期土器の出土を見た。しかし前回の調査と同様，居住域を示す遺構は認められなかった。

２．春山Ｂ遺跡

弥生時代前期　検出された該期の遺構は②－３－ｂ区北端の土壙３基のみである。これらの



第49図　春山遺跡　春山Ｂ遺跡の発掘区

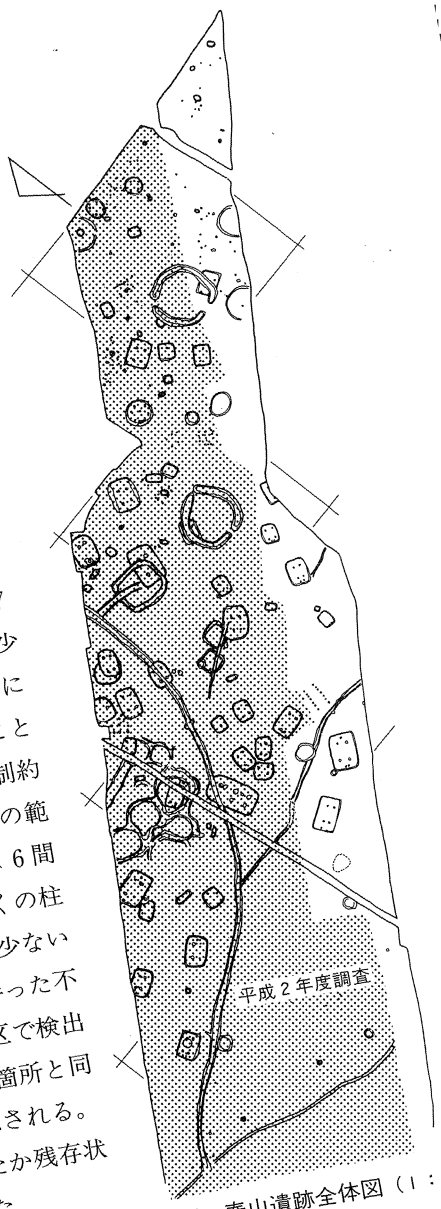
土壙と同一検出面にて同様の埋土を持つピットを３基ほど確認しているが遺物が伴わないため明確でない。特筆すべき遺構としては再葬墓と考えられる土壙（SK121）があり，多数の土器片とともに人骨が発見された(第51図)。土器は条痕紋系を主体として磨消縄文を施した土器や砂沢系土器等も伴っているが，いわゆる土器棺墓的なあり方でない点，またその立地等，今後の問題となろう。なお付近からは縄文晩期氷式土器も得られている。

弥生時代中期　前回は13軒の住居址のほかに井戸址等が発見されたが，今回は検出面にて若干の土器が得られたのみで明確な遺構は見られなかった。

弥生時代後期　今次調査では②－３－ａ，②－３－ｂ区に７軒の住居址を数えたにすぎない。前回の28軒に比べてかなり少ないが，これは調査面積が少ないことにもよるが地形が東側に向かってゆるく傾くに従い，居住域から水田域へ移行することにほかならない。集落全体の広がりを捉えることは用地の制約から望むべくもないが居住域に限れば西側を除き，ほぼその範囲を確認したといえよう。特筆すべき遺構としては１間×６間の掘建柱建物址があげられる。これは一辺が５ｍ強で多くの柱穴に柱下部，あるいは明確な柱痕が認められ，該期の数少ない建物址の一例として注目される。また勾玉，管玉等を伴った不明遺構もあげられよう。これは居住域を離れた①－４区で検出され，前回調査で発見された50数基にのぼる土器集中箇所と同様に居住域と水田域の境界における祭祀的性格が予想される。

弥生時代後期末では前回と同様に周溝墓がみられたか残存状況が芳しくなく遺物等にも注目すべきものはなかった。

古墳時代以降　今回の調査でも古墳時代の遺構，遺物は確認されていない。本遺跡は平安時代以降，微高地を取り巻く低地が基本的に水田として利用されていたことが前回の調査で判明している。今回②－３－ｃ区で水田祭祀に係ると思われる三つ重ねになった坏（内面黒色土器，須恵器）と須恵器長頸壺を検出したもののこれらに係る建物址や住居址は発見できなかった。わずかに①－４区にて江戸時代中期の洪水（戊の満水）で埋没した水田面を検出したのみである。



第50図　春山遺跡全体図（１：8,000）

第51図　ＳＫ121

3　前山田遺跡（まえやまだ）

所　在　地：長野市若穂綿内字菱田　　調査担当者：本田　真
調 査 期 間：平成４年３月５日～同年５月８日　　吉江英夫
調 査 面 積：1,500㎡（平成２年度2,700㎡）
遺跡の立地：千曲川右岸の低湿地と城ノ峯の崖錐斜面
時代と時期：中世末から近世及び近代
遺跡の特徴：中世末～近世・近代の建物跡

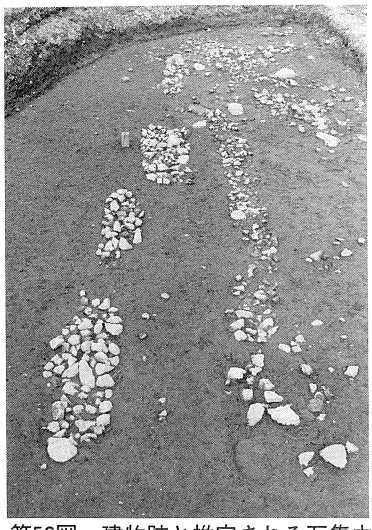
主な検出遺構

遺構／時代	建物跡	石列	土壙	石垣	石集中	溝	礎石建物	その他
中　世　末	3	1	15	1	7	5		柱穴　44
近　　世							1	
幕末～近代		3	1	1	1			石組　1

主な出土遺物
焼　　物：中～近世の土器・陶磁器（青磁・白磁等）
石 製 品：石臼，硯，砥石
金属製品：銭貨，鉄塊
木 製 品：建物部材，漆椀，杭

前山田遺跡は春山城という中世末の山城を頂く城ノ峰山麓に位置する。今年度の調査は関越自動車道Ⅱ期線部分の工事の実施に伴って行われた。遺跡は城ノ峰の尾根に挟まれた崖錐斜面と千曲川の後背湿地を埋め立てた平坦地（平④区）に立地する。山の斜面には段郭状にいくつもの平坦地があり，その中でも調査直前まで観音堂が建てられていた場所は大規模な造成が行われた人工的なものである（テラスⅡ）。

本遺跡は中世末以降連続して生活が営まれていたようであるが，遺物により中世末，江戸時代中頃，幕末～近代の３つの時期に類別された。中世末の遺構としては人工的に構築されたテラスがある。この上面からは割栗石が配された建物の基礎が２棟，礎石・基壇をともなった建物跡，多数の土壙・柱穴が検出されたが，これらがテラス構築時のものかについては判断しがたい。いずれにしても時期は中世末～江戸時代中ごろに収斂する。平④区からはほぞ穴を伴った建築部材や多数の杭・柱の出土をみた。


第52図　建物跡と推定される石集中

江戸時代中頃の遺構としては，平④から多数の礫が等間隔に並んだ建物跡と推定せされる遺構を検出し（第52図），幕末～近代ではテラス部分で礫が積まれた室状の土壙，礎石建物跡，石垣・石列等を検出した。

当地には中世末に七堂伽藍を有す寺院が開基されたが江戸時代初期に自然災害による倒壊を受け，須坂藩により再建されたという伝承が残されている。前山田遺跡の調査結果が伝承とどのように照応するか興味深い。

4　榎田遺跡（えのきだ）

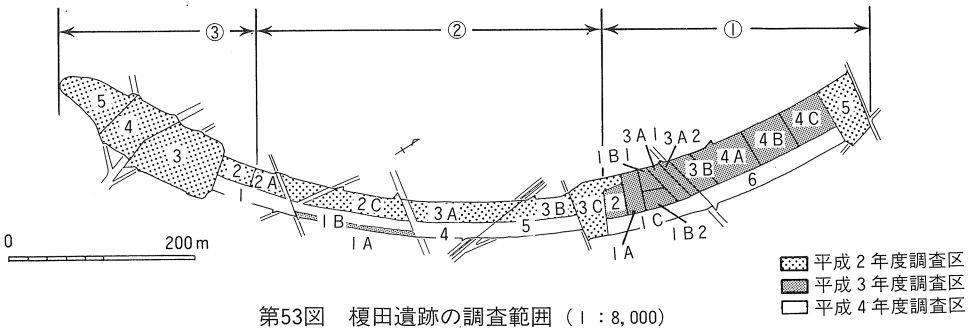
所　在　地：長野市若穂綿内1952番地ほか
調 査 期 間：平成4年4月6日～12月17日
調 査 面 積：10,270㎡
遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防と沖積低地
調査担当者：野村一寿　常永虎徹　贄田　明　太田和夫　谷　和隆　澤谷昌英　町田勝則　馬場信義　廣田和穂　酒井健次　徳永哲秀　井口慶久　藤沢袈裟一　藤倉美登里
時代と時期：弥生時代中期・後期，古墳時代，奈良・平安時代前半，中世後半，近世末期
遺跡の特徴：弥生時代～古墳時代の居住域

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	溝	沼
弥生中期	26	1	155	24	
弥生後期	70		1,772	3	
古墳	213	46		69	4
奈良・平安	5				
中世		1			
合計	314	48	1,927	96	4

主な出土遺物

土器・土製品：弥生土器，土師器，須恵器，青磁，匙形土製品，紡錘車，玉類
石器・石製品：磨製石鏃，磨製石斧，紡錘車，磨製石包丁，玉類，砥石，石錘，石戈
木器・木製品：壷鐙，鞍，鳥形木製品，竪杵タタリ，鋤，鍬，弓，建築部材各種他
そ　の　他：ガラス小玉，骨鏃，墨書土器，金環，人・獣骨，炭化米，炭化種子他



第53図　榎田遺跡の調査範囲（1：8,000）

遺跡と調査の概要　調査は，平成元年度から引き続いて実施された。遺跡の南限から北限までは高速道用地内に沿って約900mを測るが，本年度は昨年度までの調査区に平行する全長740mを20m前後の狭い幅で調査した。第53図，①－6・①－1C・②－5・②－4・②－1B・③－1区にあたる。

古墳時代の遺構は①－1C区を中心に全遺構の70％を占有するほか，弥生時代の住居跡は，②－4区を中心に中・後期合わせて100軒近く認められた。予想外の成果は②－5区にあり，千曲川の網状流のひとつと考えられる第3号河川跡（後述）より大量の木製品が出土し，全国紙でも数回報道されることとなった。以下，時代毎に詳述する。

弥生時代中期　②－5区を横切る第3号河川跡以北の各区では，中期の包含層自体が存在しない。河川跡南岸にはその浸食を受けた住居跡が確認され，北岸には中期の遺構は存在しないことから，当時既に河川跡の原形があり，それが居住域の北限となっていた可能性もある。南限

は②－1B区の北隅にあり，隣接する②－1A区より続く溝から栗林II式土器を出土したが，この溝以南では全く住居跡はなく，②－1B区南端に2条，③－1区北端に1条の溝を検出したが、遺物は皆無である。②－4区では20軒の住居跡と19条の溝を確認している。この中には，栗林II式土器の完形品をセットでもつ住居跡，原石や台石，石器製作時の剝片や製作途上の石斧などを出土した石器工房と考えられる住居跡も確認された。住居跡の形状は楕円形状が圧倒的で，次いで隅丸方形が多い。これらの大半は焼失家屋であった。

弥生時代後期　居住域は2つに分けられる。②－4，②－1B区では，それぞれ27軒，26軒の住居跡が検出され，本遺跡では最も遺構密度が高い。しかし，②－1B区から南へいくほど居住地として選ばれず，③－1区では6軒と遺構密度は南にいくにつれ，次第に希薄になる。

もうひとつの居住域は①－6区にあり，11軒を検出しているが，前者の居住域に較べると単位面積当たりの住居数はかなり希薄で，散在した分布状況にある。

居住跡の形態は，長方形，次いで隅丸方形が多く，規模は，一辺9mを越すものがあるが，何れの居住域もほぼ一辺3～7mの範疇にあり，平均は一辺5mである。炉辺石の使用，埋甕炉は希有で，明確な堀り込みをもたずに床が焼けたものが住居の中央部よりややずれて位置するというのが一般的である。②－4区では，1軒の住居跡の床面から無秩序に横たわった人骨3体が検出され，うち2体は玉類の装身具を身につけていた。

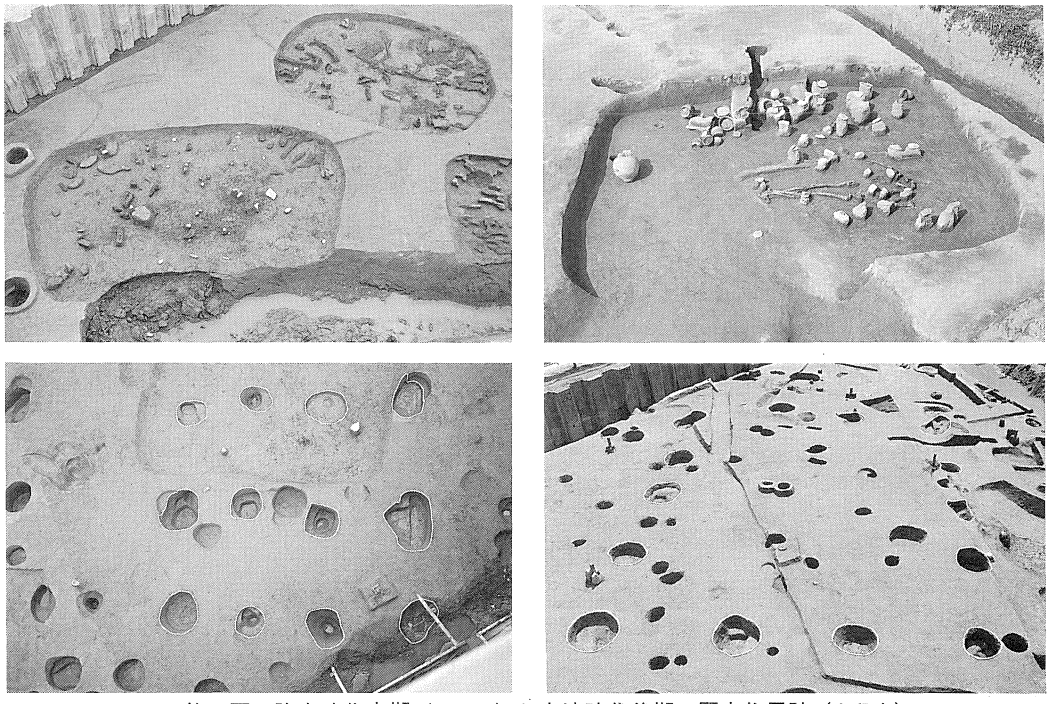
②－5区を横切る第3号河川跡の最下層からは該期の土器の出土が若干あり，両居住域は自然地形的に既に分断されていたことが分かった。この第3号河川跡の北岸から①－6区南隅までの200m余の区間は全く居住選地されていないが，①－1C区には，不整形状を成し，ゆるやかな掘り込みをもつ土坑が点在し，箱清水式の完形壺や酒杯形の土器2点セットを出土している。①－1C区付近は居住域からは外れるが，祭祀的な意味合いの強い領域であったと考えられる。

住居跡以外の重要な遺構としてはこの他に，①－6区で検出された規模の大きな溝，②－1B区で検出された一木作りの丸木枠の井戸，同地区の炭化米63kg以上（含水重量）を出土した一辺2m方形の土坑がある。①－6区の溝は，幅2m弱，区域内で全長52m，深さは検出面より約1mを測り断面形はU字形を成す。方向はほぼ南北であり両端とも区域外に伸びていくので全貌は定かではない。遺物の出土は膨大なものがあり，壷・甕・鉢・高杯などが大量に投棄されており，一時に廃棄された可能性もある。性格的には集落境等を区画したものと思われる。

古墳時代前期・中期　②－1B区北隅，②－5区北隅に1～2軒の住居跡が散見されたのみである。但し，遺物が第3号河川跡から出土しているので，集落域は調査区の西側にずれて存在した可能性が高い。坩，台付甕などと共に木器群には重要な遺物が多数ある（後述）。

古墳時代後期　最も集落が発展した時期であり，全遺構の7割を占有する。住居は②－1B区7軒，③－1区1軒と弥生時代と同様に南へいくほど少なくなる傾向を示す。ところが，②－4区から①－6区約470m間には200軒を越す住居跡が検出され，各住居跡の重なり合いは類例がない程著しく，とりわけ①－1C区では，検出面のうち住居跡でない部分が無いほどに重なり合っている。居住適地として好んで選ばれていたことを示している。

住居は一辺5m前後の方形が主流で，大方一辺4～9mの幅に収まる。カマドを有するものは



第54図　弥生時代中期（上段左）と古墳時代後期の竪穴住居跡（上段右）
古墳時代以前（下段左）と古墳時代以降の堀立柱建物跡（下段右）

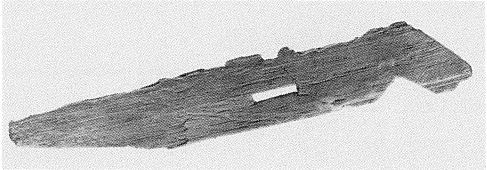
北か北西壁の中央に付設されている。カマドは地山を削り残したもの，粘土を用いたもの，甕を伏せて心材にしたものなどがあり，支脚も自然石を用いたもの，土製のもの，甕を伏せたもの，高杯の折れた脚を用いたものなど様々である。これらが，個人差か時間差かは課題である。

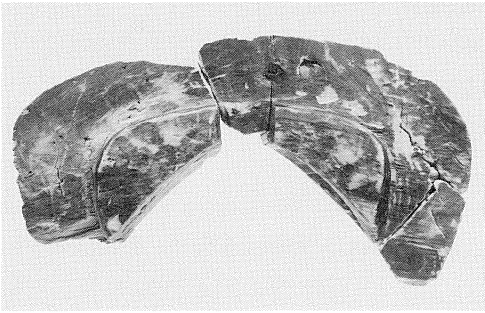
遺物は土師器主体で，須恵器の出土は希である。住居内出土の特殊遺物としては，子持勾玉や臼玉・耳環・土鈴などがある。特に②－５区北には臼玉を151個も出土した住居跡もある。

なお，住居跡以外の遺構では古墳時代以降の溝跡が全地区総計で69条，土坑も多数確認されたが，遺物の出土状況などを見ても特筆すべき状況はない。

奈良・平安時代　①－1C区で３軒，①－6区で2軒の住居を調査しているが，これらは平安時代に属する。カマドは石組はないが，コーナー寄り，南向きなど古墳時代の特徴とは明らかに異なった構造が確認された。また、①－1C区には方形に巡らされた特殊な溝が検出され，臼玉，墨書土器を出土したが，溝に囲まれた部分には特殊な遺構は検出されず性格は不明である。

掘立柱建物跡について　掘立柱建物跡は調査区の全域で確認され，総計は48棟に上る。前年度までの成果では古墳時代の住居跡の全てに新しいという以上には時代は特定し得なかった。本年度においても同様な状況にあるが，①－6区で庇（ひさし）や塀をもつ中世の上層農民の屋敷跡と考えられるもの，また今までに無い時期としては，②－4区で弥生時代中期に特定されるもの，②－1B区で古墳時代の住居に切られているものがそれぞれ１棟確認された。掘立柱建物跡は，何れもほぼ円形の比較的大きな掘り方をもち，2×3間が最も多く全体の2割強，次いで3×4間が全体の15％である。また，1割弱が総柱タイプであるほかは，ほとんどが側柱タイプである。





第55図　第３号河川跡（左上）・鳥形木製品（右上）・梯子出土状況（左下）・木製の鞍（右下）

第３号河川跡　この河川跡は②－5区を南西から北東方向にかけて横切っている幅20mを越える溝である。河川跡の南の岸辺は切り立ち，北の岸辺は底が礫層で緩やかに立ち上がっている。特に南の岸辺は土器や獣骨を投げ捨てた形跡が見られ，遺物が散乱している。河川主流部は粘土，ピート，砂などが重なりあって堆積し、およそ18の層を成し，第１層から第18層までは深さで３mを越える。出土遺物は主に木製品，植物遺体，土器，獣骨等である。木製品は用途の分かる完成品から一部加工痕の残る木材まで1,300点以上を取り上げることができた。

次に主な土層と出土遺物との関係を記す。土器類の出土はおよそ全層に及んでいるが，木製品は主に第４層から第８層に集中している。第４層は黒褐色で植物遺体を多量に含む土層で，土器では土師器の甕・甑・高杯等，須恵器では大甕・杯等である。用途の分かる木製品では黒漆塗りの弓を含む各種弓類と曲物（まげもの）底部の出土が多く，また長さ２m，幅20cm程度で片方の端を三角に尖らせた矢板状の薄い板も数点出土している。その他，竪杵（たてぎね）・鍬（くわ）・鋤（すき）・えぶり・木枠（きわく）状の田下駄（たげた）材等の農具類，特筆すべき遺物では木製鐙（あぶみ）・鳥形木製品が出土した。第５層は黒褐色のピートでほとんど遺物を含まない。第６層は第４層と似た土質で３号河川跡中最大量の木製品出土をみた。土器類は土師器の甕・壺・鉢・高杯・杯等であり，木製品では各種鍬類・鋤・木槌・竪杵・木錐（もくすい）等の農具類が目立つ。また，かせい・たたり等の紡織具や扉（とびら）・梯子（はしご）・梁（はり）・杭（くい）等の建築材，木製鞍（くら）の一部，剣の鞘（さや），各種刳物（くりもの）容器，腰掛（こしか）け等の出土は特筆すべきものである。第７層は灰色粘土で遺物をほとんど含まない。第８層は黒褐色の粘土で木製品の出土量は減る。出土遺物も農具類が主である。第９層以下では小型丸底土器の出土が多くなり，最下層の礫層上からは箱清水式と思われる赤い土器片も出土している。木製品の年代は出土土器から古墳時代を中心にしたものと考えられるが，今後の詳細な検討が必要である。

5　清水製鉄遺跡（しみずせいてつ）

所　在　地：更埴市森字岡地（おかじ）
調査担当者：青木一男　山中　健　上田　真
調 査 期 間：平成４年４月20日～同年12月20日
調 査 面 積：22,000㎡
時代と時期：平安時代・古墳時代後期後半
遺跡の立地：崖錐面傾斜部
遺跡の特徴：10世紀後半の製鉄遺跡と後期古墳

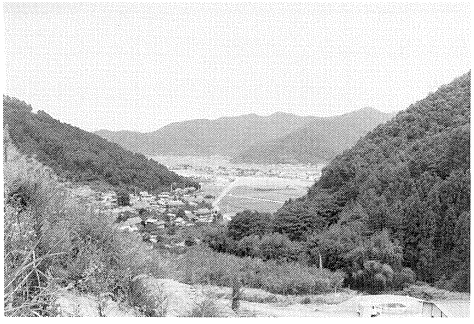
主な検出遺構

遺構／地区	製錬炉	鍛冶炉	炭焼成土坑	住居址
A地区	8	8	10	1
B地区	2	8	8	3
C地区	7	11	8	6

主な出土遺物

製鉄関係：炉内滓，流動滓，鉄塊系遺物，羽口炉壁，含鉄椀形滓，鍛造薄片，土器，粒状滓，鎌，刀子，木炭
古墳関係：鉄刀，鉄鏃，刀子，メノウ製勾玉，ガラス小玉，棗玉，切子玉，臼玉，須恵器

地下に埋もれた条里遺構として著名な「更埴条里遺跡」の背後には，水田面との比高差をある程度もつ山の尾根が入りくみ，崖錐の谷が点在する。更埴市・岡地（おかじ）は，後背湿地の遠望が狭まる入り組んだ谷奥の崖錐先端に位置する。当集落背後の崖錐傾斜部に「金クソ」が出ることは古くから知られていたようである。


第56図　A地区より岡地集落遠景

上信越自動車道は崖錐中腹部を横断し，３つの小さな崖錐（A，B，C地区）22,000㎡を調査する中から，点在する平安時代の製鉄関連遺構，後期古墳１基を調査した。C地区の一部および後期古墳１基は昨年度実施した試掘調査および遺跡地図において周知されていない。製鉄関連の遺構は小規模に点在することからその存在の確認にはかなり難航した。特に炭焼成土坑は尾根上から崖錐面にわたり点在するところから，全面はぎとりによる調査によってその広がりをつかめたものの，製鉄遺跡調査の難しさを示す結果となった。

製錬関連遺構

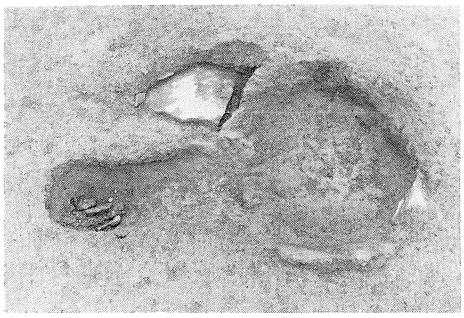
調査者が製錬炉と認識する遺構の検出は17基に及ぶ。

鉄滓の分析が今後予定されているものの現状では未了なため，当遺構を精錬炉と想定する研究者もある。調査者は炉壁から想定される炉の構造，炉の地下構造，炉壁付着物，流動滓の形状・質・量，鍛練鍛冶炉等との比較などを根拠にしている。

炉は竪形炉系の円筒自立炉で，穴沢義功氏の竪形炉類型のII型C類にあたるものと考えられる。径70cmほどの円形をなす炉の上部構造は明らかにしえないが，廃滓場出土の炉壁から径５cmほどのスサ入り棒状粘土を輪積みにして円筒を築いているものと想定している。炉床滓が残るものもある。炉に付随して70cmほどの溝がのびているが，先端に向かって傾斜し，そ

のレベルは炉底部より低くなる。埋土中に流動滓がみられるところから排滓の機能をもつものと考える。

構築場所は各地区に散在し，斜面のきついA地区では幅3m，長さ5mほどの段平坦面に，B地区では斜面のなるいフラット面に構築される。必ずしも斜面を必要としない様子が伺える周辺には土坑，鍛練鍛冶炉が必ずみられ，ピット群もある。しかしながら，送風施設の遺構を明らかにすることはできなかった。



第57図　製　錬　炉（ＳＦ３）

製錬炉SF13に接近する廃滓土坑からは127kgの鉄滓類が出土し，そのうち45％が炉壁，９％が磁石に磁着する鉄滓であった。炉壁に付着したかたちで羽口も複数出土し，年代を想定しうる土器もある。

第58図　製　錬　炉（ＳＦ10）

遺構の切りあい関係，廃滓場出土の土器から製錬炉の操業時期を10世紀後半頃と想定している。なお，年代測定として熱残留地磁気測定，C14年代測定も実施している。

鍛練鍛冶関連遺構

鍛練鍛冶炉は，竪穴住居工房の床面および野外？に散在する。径30cmほどの円形プランをなし，深さ10cmほどのすりばち状を呈する。壁は厚さ3cm程の粘土を貼るが熱を受け青灰色をなし，その背面は赤茶褐色に酸化する。炉内部の炭化層ならびに炉周辺に鍛造薄片が散らばり肉眼でも観察することができる。

竪穴住居址は10軒検出されているが，うち4軒の床面に鍛練鍛冶炉がみられる。いずれもカマドをもつ。煮沸具，什器のセットがみられることから住居を兼ねた工房であったものと思われる。煮沸具はすべて羽釜である。また，床面に鍛練鍛冶炉がみられない竪穴住居の周辺の野外にも必ずといって良いほど鍛練鍛冶炉がみられ，何らかの形で鍛冶に関わっていたことを想起させる。

第59図　鍛練鍛冶炉及び伴う土坑

野外に散在する鍛練鍛冶炉は床面のものと形態，構造上の違いはない。しかしながら，その多くの周辺に長さ1m，幅50cm，深さ30cmほどの楕円ないしは長方形の土坑をもつという特長がある。埋土中には炭化物，鉄滓，椀形滓，羽口片等があり，鍛造薄片は肉眼でも観察できる。ほかに礫の

鍛冶台を埋置したピット，性格不明の土坑，ピット等が集中する傾向にある。鍛練鍛冶炉周辺から出土した鉄製品として刀子，鎌，断面方形の棒状製品等があるがその数はきわめて少ない。

炭焼成関連遺構

調査は穴窯の検出に努め，かなり斜度のきつい斜面も広い面積について重機を入れ調査を行ったがついに穴窯を検出することは出来なかった。

炭焼成関連遺構として炭焼成土坑が26基検出できた。

長さ1.5m，幅70cm，深さ40cmほどの楕円形ないしは長方形をなし，壁面は酸化し底面には炭層がみられる。埋土中には遺物はほとんどみられないものの，遺構を覆う基本土層の観察から平安時代の製鉄関連遺構としてとらえることができる。

同遺構は尾根上から斜面部，平坦部に広く散在し，単数みられたり，複数かたまったりするなど占地等に一定の方向がなく検出に困難をきわめた。

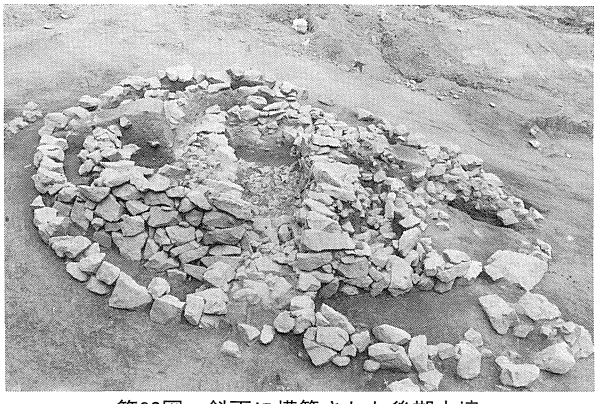
中部山岳地方の製鉄遺跡

中部山岳地域の古代の鉄生産は，調査例が究めて少なく充分明らかであるとは言い難い。今回の調査は10世紀後半の製鉄遺跡の調査であったが，信濃の古代製鉄遺跡としては最大規模の調査となり多くのデータを得た。特に製錬から鍛練鍛冶に至るまで一貫した工程が小規模に執り行われていること，鋳型の出土がなく鋳造は行われていないらしいことが明らかとなった。製鉄および鋳造を行っていた可能性のある同郡内の松原遺跡，清水製鉄遺跡以前に礎石建物内に鍛練鍛冶遺構をもつ更埴条里，屋代遺跡等の比較検討から，中部山岳地域の手工業生産の一端が考古学的に明らかとなることであろう。

後期古墳

崖錐面の調査の難しさは調査終了間際に明らかとなった完全に埋没した１基の古墳の発見という形で現われた。遺跡地図において周知されていないばかりか試掘調査でもその存在を認知することができなかった。径10mほどの円墳の横穴石室は既に天井石は取り除かれ床面の一部は荒らされていた。

墳丘構築，石室構築に関しては充分に気を配り調査を進めたが，その内容は大室古墳群，松原１号墳の調査成果をトレースする形となった。



第60図　斜面に構築された後期古墳

6　更埴条里遺跡（こうしよくじようり）

所　在　地：更埴市雨宮返町　　調査担当者：寺内隆夫　出河裕典
調 査 期 間：平成４年４月６日～同年12月25日　　市川桂子　河西克造
調 査 面 積：13,500㎡（集落域7,000㎡，水田域6,500㎡）　　島田正夫　清水　弘
時代と時期：縄文時代後期・晩期，弥生時代～現代　　中村　寛　宮島義和
遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防背面～後背湿地　　山極　充　西村政和
遺跡の特徴：９世紀代の条里水田と集落，洪水による条里　　若林　卓
水田埋没と９～13世紀に至る集落，縄文時代後期・晩期の焼土跡と土器集中，古墳時代前期の井戸

主な検出遺構

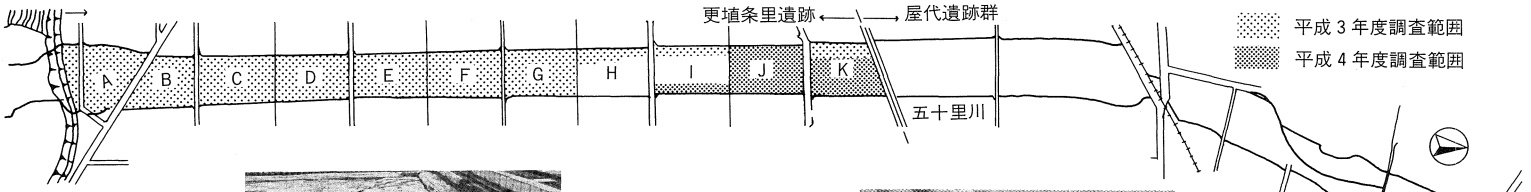
遺構／時期	竪穴住居跡（竪穴状遺構）	掘立柱建物跡（礎石建物跡）	土坑	柱穴	溝	墓	井戸	焼土跡	土器集中	水田	畦畔（大畦）	その他
縄文		1	59		15			24	10			
弥生			493（根痕多）									
古墳					4		1					
平安	75	8（2）	199		59		12		1	1	4	鍛冶炉　1 大畦直下で連続する落ち込み
中世	7	総数不明	73	1,056	10	6	1					
近・現代		2	12		20							

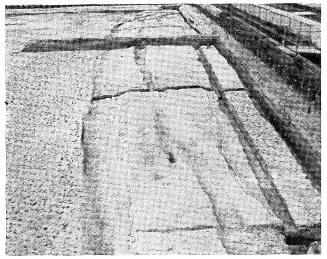
主な出土遺物

土器・陶磁器：縄文土器（後期・晩期），弥生土器（後期），土師器（古墳時代前期），須恵器，土師器，灰釉陶器，緑釉陶器，白磁（平安時代），青磁ほか中近世陶器
土　　製　　品：土錘，布目瓦，羽口（平安時代）
石器・石製品：打製石斧，石包丁，石鏃（縄文・弥生時代），砥石，六角柱石製品，こも編み石（平安時代）
金 属 製 品：鎌，釘，紡錘車，刀子，銭貨，鉄滓（平安時代・中世）
木　　製　　品：横櫛，曲物，井戸枠（平安時代・中世）
骨　　：人骨，獣骨（縄文・平安時代・中世）
そ　の　他：種子（ヒョウタン・モモ・クルミ他）

遺跡の概要と昨年度調査の成果

更埴条里遺跡は千曲川右岸の自然堤防背面から後背湿地に立地する水田遺跡であり，現在この地は「屋代田んぼ」と呼称されている。昨年度から上信越自動車道建設に伴い，後背湿地から自然堤防を縦断する発掘調査が実施された。遺跡の範囲は南限が森将軍塚古墳が立地する山際，北限は五十里川とし，自然堤防上に立地する屋代遺跡群と接する。昨年度の調査では同一洪水砂で埋没した平安時代前半の水田跡と集落が確認された。千曲川の洪水により堆積した厚い砂層に被覆された水田跡では南北に大畦が貫き，東西の大畦とは約100m間隔で直交し水田



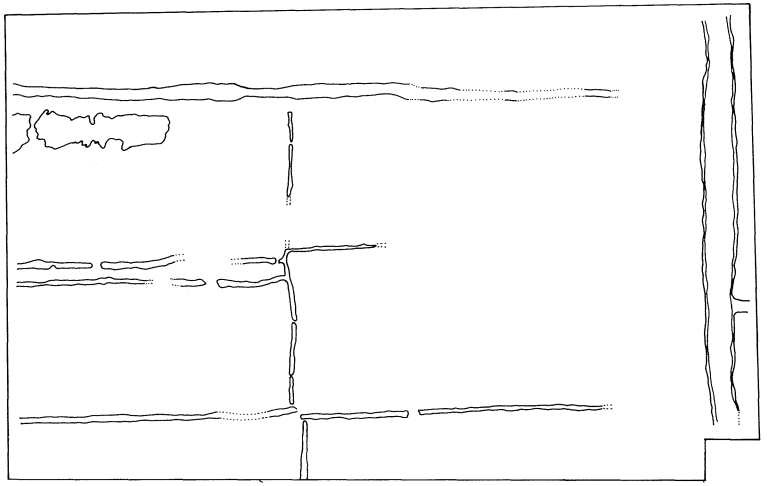


第61図　Ｊ地区　東西大畦（東から見る）

第62図　Ｋ地区　洪水直前の集落と水田の境界（西から見る）

平成３年度調査域

洪水直前の集落と水田の境界線



第63図Ｊ・Ｋ地区　平安前期の遺構分布図（１：1,000）

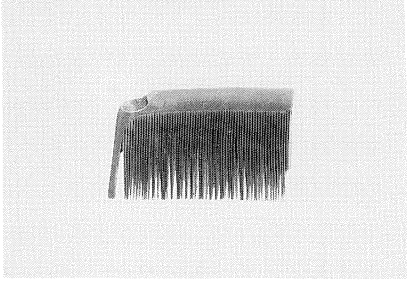
の区画と更埴条里・屋代遺跡群の基本的区画の役割を果たしていたと推定される。さらにトレンチ調査であったが，五十里川付近では水田と同時期の住居跡が確認され，屋代遺跡群に近接するK地区は集落域であると予想された。

本年度は，水田域の北限（J地区）と集落域（K地区）を主な調査対象としたため，生産域と居住域の境界が把握されると推定された。以下，平安時代のみ集落域と水田域とにわけ，他の時期については両地区を一括して概要を記す。

平安時代（集落域・K地区）　昨年度のトレンチ部分の調査では，砂層を埋土にもつ遺構は井戸のみで竪穴住居跡は9世紀後半の洪水後放棄され，集落は一旦途切れるとの所見を得ていた。しかし，今年度の調査の結果，洪水後も集落域として中世まで継続することが判明した。

洪水前の9世紀代はほぼ調査区全体に竪穴住居跡，掘建柱建物跡などが展開している。南北方向の区画溝は水田域の畦畔のほぼ延長上に位置しており，水田域の地割を踏襲している可能性が高い。9世紀後半の洪水直前に水田域が一時的に拡大し集落域南側が水田域に取り込まれるが，洪水後は再び全面集落域となり12世紀にいたるまで数は少ないながら，竪穴住居，溝等が散在する状況が見られる。

注目される遺構としては，まず礎石建物跡とそれに伴う鍛冶炉がある。建物の規模は3×2間に相当し，礎石下には栗石が検出された。屋代遺跡①区においても同様の遺構が検出されており，礎石建物が鍛冶用の作業場として機能していたものと思われる。時期は洪水前の9世紀代に属する。また，平安時代を通じて11基の井戸が検出されたが，3基の井戸の底部近くから横櫛が出土している（第64図）。他の井戸でも，獣骨（牛？），礫，材（丸太），墨書土器（「富」等）などが検出されており，ほとんどが埋井時または使用時の祭祀にかかわる遺物と考えられる。



第64図　井戸底出土の横櫛

遺物は9～12世紀の土器が多数を占める。注目されるものとしては洪水前の9世紀代の面で皇朝十二銭の「隆平永宝」が出土している。また洪水後の竪穴住居の埋土から径約1cm，長軸5cm（端部欠損）の六角柱の石製品が検出されている。磨かれているが用途は不明である。

平安時代（水田域・J地区）　平安時代前期に比定される水田跡は，昨年度同様厚い洪水砂層で覆われていた。砂層直下で検出された水田跡からは東西・南北各1条の大畦が確認された。昨年度調査区からのびる幅約2mの南北大畦は，本調査区を走行して北端で幅約4～5mの規模を有する東西大畦と交差する。これほどの規模の大畦は他の地区では確認されていない。また，東西大畦と近接して並走する大規模な溝の発見も注目される（第63図）。この大畦と溝は集落域との境界付近に位置しており，「里」境的性格を有していた可能性もある。

大畦に囲まれた内部には小畦による南北に長い区画があり，一部では極めて細長い区画が見られた。また牛馬痕か耕作痕かは区別できないが，田面には無数の凹凸があり畦畔上では希薄になる傾向がある。小畦に設けられている水口には特出する施設はなく，微細な水利形態（灌

漑用の配水）は検討中であるが，灌漑水は北西～南東に配水されていたと推察される。さらに，南北大畦の直下では連続する多数の落ち込みがみられ，大畦構築過程を解明する上で注目される遺構である。

条里水田の埋没後は，水田が復旧されず数軒の竪穴住居跡を中心に井戸・土坑・溝などが構築され，集落域を形成する。竪穴住居跡はカマドの方向が一定する6軒が存在し，周溝が検出された住居跡もある。

第65図　縄文土器出土状況

縄文時代　該期では後期（堀ノ内段階）と晩期（佐野段階）に比定される焼土跡と土器集中が確認され，焼土跡からは炭と土器片さらに獣骨が出土した。晩期では台付の浅鉢などと周囲に打製石斧・凹石が散点する箇所もあり，遺構では昨年度も確認されたが4基のピットで構成された建物跡（1棟）の検出は注目される。縄文時代の遺構は晩期が主体を占め分布状況は全体に点在する状況である。後期の遺構も僅少であり，基本的に両時期を通じて土地利用は代わらず，本遺跡はキャンプサイト的性格であったと推定される。

弥生時代・古墳時代　屋代遺跡群で検出された古墳時代の水田跡は，ここでは平安水田の耕作により水田の上部を削平されていたため確認されなかった。なお，K地区で古墳時代前期（4世紀後半）の井戸が1基検出された。底部から完形の壷，甕が数個体出土している。

中世以降　平安時代の洪水後水田域まで拡大した集落は，12世紀代から再びK地区の微高地に集住化が進行し，中世前半の遺構が密度高く認められる。「T」字状の溝によって区画された集落内には千を越える柱穴が検出され，多くの掘立柱建物が建っていたと想定される。他に井戸跡，竪穴状遺構，墓などが認められるが，集落に対応する水田跡は確認されていない。

注目すべき遺構として土坑墓，木棺墓がある。7基が検出され1基を除いて調査区の東寄りに集中している。いずれもほぼ南北方向に長軸をもち頭部は北を向く。土坑墓は楕円形を呈し，規模はおよそ120cm×70cm。埋葬形態は屈葬である。木棺墓は隅丸長方形を呈し，規模は土坑墓に比べ大きく，長軸方向は2mをこえる。掘りこみに土を埋め，木棺部分の大きさを決めた後，材木（枕木）を並べ木棺を組み立てたものと思われる。埋葬形態は伸展葬である。副葬された遺物がないため，明確な時期は不明であるが，埋土から出土した陶磁器の破片等から12世紀後半以降に属するものと考えられる。

中世後半以降現代に至るまで，集落跡，水田跡等は確認されなかった。なお，圃場整備（昭和40年代）前の用水である五十里川，下町田堰がK地区で確認された。

おわりに

本年度の調査により更埴条里遺跡内の集落域と水田域の境界が把握された。水田域北限に位置し，調査区北西の馬口遺跡（更埴市教育委員会による調査）でも確認されている大規模な大畦は，本遺跡の性格と「条里区画」解明する貴重な発見となろう。今後は，これまでの調査・研究の成果をもとに自然科学的分析や，地籍図等による耕地景観の復元などの作業も取り入れながら，地下に埋没した「条里水田」について考えていきたい。

7　屋代（やしろ）遺跡群

所　在　地：更埴市雨宮

調査期間：平成4年4月6日～5年1月8日

調査面積：20,500㎡

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防上

時代と時期：縄文時代中期・晩期，弥生時代前期～後期
古墳時代前期～後期，奈良時代，平安時代
鎌倉時代，室町時代，江戸時代

遺跡の特徴：縄文時代遺物包含層，弥生時代後期～室町時代の各時期の集落と水田・畠跡など

調査担当者：寺内隆夫，松岡忠一郎，伊藤克己，宮下裕治
大和龍一，渕井英知，吉沢信幸，鳥羽英継
西　香子，水沢教子，田中貴美子，下平博行
本田　真，吉江英夫，田中正治郎，月原隆爾
夏目大助，宮入英治，宮島義和，河西克造
島田正夫，中村寛，柳沢亮，上田真，贄田明
常長虎徹，藤沢袈裟一，臼居直之，西山克己
市川隆之，上田典男

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居跡 竪穴状遺構	掘立柱建物跡 礎石建物跡	土　坑 （井戸・墓を含む）	溝　跡	柱穴ほか	水田跡 畠　跡	その他
縄文時代			25				遺物集中・炭化物集中など
弥生時代	4		859	72			
古墳時代	79	6以上		35	多数（大半が掘立柱建物となる）	①～④区ほぼ全域	
奈良・平安時代	185	30以上		446		①～④区ほぼ全域	
鎌倉時代以降	6	多数	206	21			

主な出土遺物

土器・陶磁器：縄文土器（中期・晩期），弥生土器（前期～後期），古墳時代～平安時代の土師器（墨書土器・刻書土器を含む）・須恵器，平安時代の灰釉陶器・緑釉陶器，中・近世陶磁器，かわらけ，内耳土器

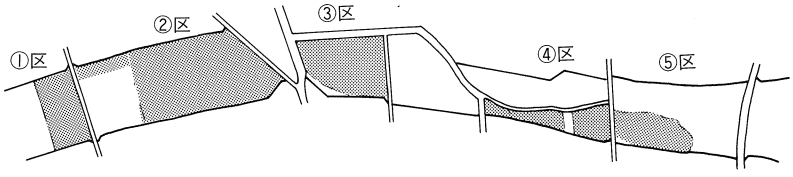
土　製　品：土玉，瓦塔，土錘

石器・石製品：石鏃，打製石斧，磨製石斧，横刃形石器，磨石，凹石，石鍬，石包丁，紡錘車，砥石，管玉，臼玉，勾玉，なつめ玉，石製模造品（鏡・剣ほか），ガラス玉

金属製品：金環，銅鋺，銭貨，紡錘車，鋤頭，釘，刀子，鉄さい

木　製　品：曲物，板材

そ　の　他：人骨，獣骨・歯牙



第66図　屋代遺跡群平成4年度調査範囲（S：1／8,000）

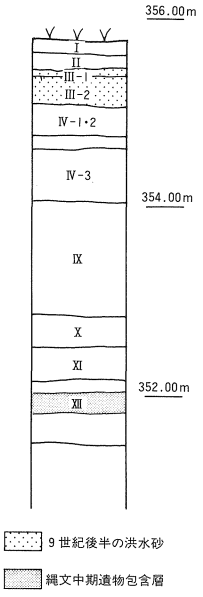
第67図　⑤区縄文時代中期遺物包含層確認トレンチ（左）及び遺物出土状態（右）

1．沖積地における縄文時代中期遺物包含層の確認　⑤区において中世の溝の断面観察のため溝底部をさらに掘り下げていたところ，地表下約4mのⅫ層中から縄文中期後葉の土器が検出された。その後，全地区に確認トレンチを設定し深掘りを行ったところ，Ⅻ層は更埴条里遺跡J地区から屋代遺跡群の各地区で確認された。そのうち，屋代遺跡群④区北側から⑤区にかけては多量の遺物が見つかり，集落の存在が予想された。そのため，来年度本格的な調査を行うこととし，本年度の調査を終了した（第67図）。沖積地中央付近における縄文時代中期の遺跡のあり方を知る上で貴重な資料になるであろう。

2．弥生時代中期までの様相　Ⅶ層～Ⅸ層にかけては，焼土や炭化物の集中箇所が点在しており，土器片も少量ながら認められる。しかし，焼土を含む落ち込みの多くは不定形であり，自然の営力によるものが大半を占めると考えられる。

Ⅶ層上面では，①区～③区かけて，方向の一定しない自然流路が多く認められ，その周辺には縄文時代晩期から弥生時代中期にいたる各時期の遺物集中箇所や焼土・炭化物の集中箇所が点在している。弥生時代の石包丁が数点認められるが，畦畔などの稲作に関係する遺構は検出されていない。

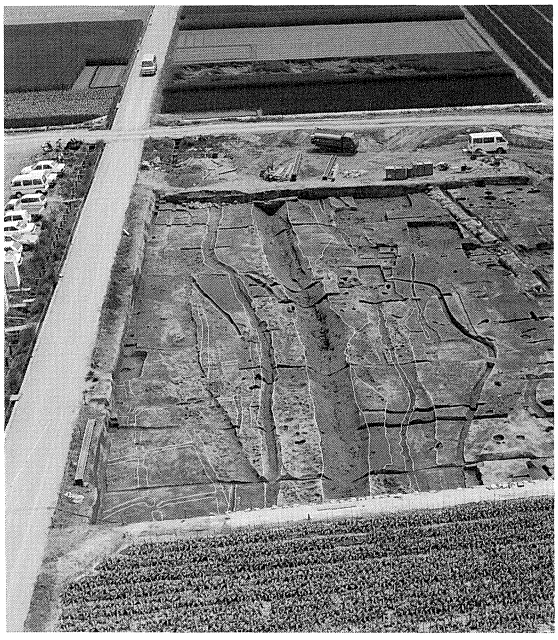
3．弥生時代後期末から古墳時代の集落　弥生時代後期末（箱清水式土器の時期）になると，自然堤防の頂部にあたる⑤区に集落が形成されはじめる。この地区は古墳時代以降住居軒数を増大させていき，中世に至るまで集落域として利用されつづける。古墳時代を特徴づける遺物では，竪穴住居址などから450点以上の玉類が出土している。そのうちSB5190からは，多量の玉類とともに剣形・勾玉形の石製模造品が見つかっている。



第68図　屋代遺跡群基本土層（③区東壁）

4．古墳時代の水田跡の確認　今年度の成果の一つに，昨年まで判然としなかった古墳時代の水田跡の確認があげられる。遺構はⅣ－3層上面で検出され，水田域は集落のある④区中央以北を除く全域（①～④区南）にわたっている。多くの場合は後世の水田の影響を受け，疑似畦畔のみの検出であったが，①～③区の一部では水路を伴った畦畔の盛り上がりが確認できた（第69図）。①区の水路底面から10点以上の勾玉がまとまって出土したり，水田面に坩形土器や管玉が出土するなど，特異な遺物の出土状況が認められる。

森将軍塚古墳直下の水田域であるだけに，両者の関係解明が今後期待される。

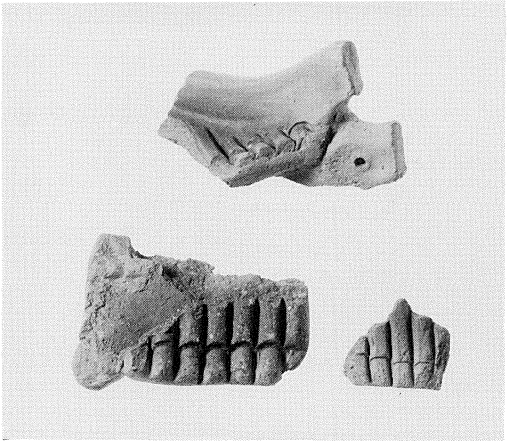


第69図　古墳時代の水田・水路

5．奈良時代末期から平安時代初期の開発　古墳時代～奈良時代，集落域は④区北から⑤区に集約される。①区から④区南にかけては集落域に関連する遺構が全く検出されていない。これらの地区では，Ⅳ層中に水田土壌の特徴の一つである溶脱層と集積層の互層が幾重にも認められる点から，生産域であったと推定される。その後，おおよそ奈良時代末期になると（Ⅳ－1・2層検出），ほぼ同時にこれらの生産域に集落が進出してくる。①・②・③区・更埴条里遺跡K区に竪穴住居と掘立柱建物跡を伴う集落が成立するのである。このことは，古墳時代以降，変化の少なかった自然堤防の後背地の再開発に，集落単位で乗り込んでいったことを示していよう。各集落とも自然地形を利用して東西方向に延びる形に建物が配置されており，建物の軸線や占地は後の条里制地割に共通する点が見られる。

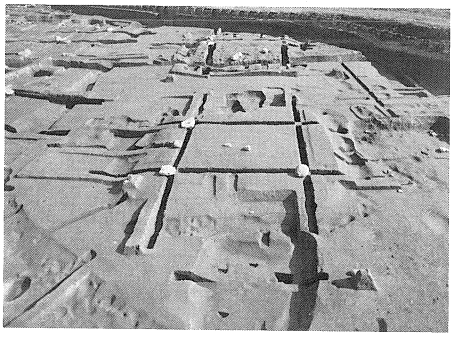
この時期には，仏教に関する遺物が増加し，③区では「寺」「丁寺」と書かれた墨書土器が出土し，④区では瓦塔や銅椀の破片が見つかっている（第70図）。

6．礎石建物群の発見　上記の集落では9世紀代に，掘立柱建物が礎石建物に変化していく。特に③区では区画の溝を巡らし，盛り土を有する礎石建物が5棟検出され，礎石の配置から土間を持つ母屋，倉庫など，それぞれ異なった機能の建物と推定される（第71・72図）。また，①区では礎石建物内に鍛冶炉を有する例も見つかっている。いずれにせよ寺院や官衙と異なり，東国の集落において礎石建物がまとまって見つかったことは，新たな問題を提起しそうである。

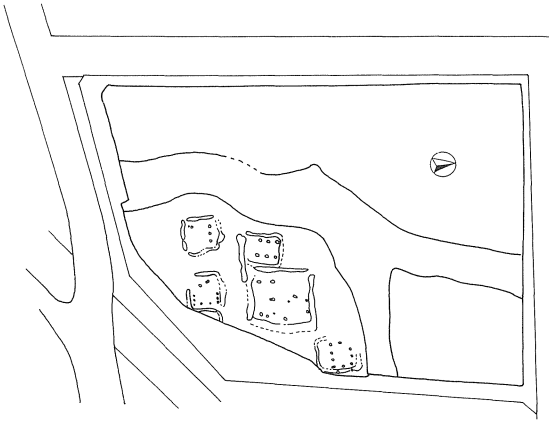


第70図　④区出土　瓦塔破片

7．条里制水田と畠・水路の関係　①～③区につくられた集落域の大半は，9世紀後半には条里制の水田や



第71図　③区礎石建物跡（左図↓から）

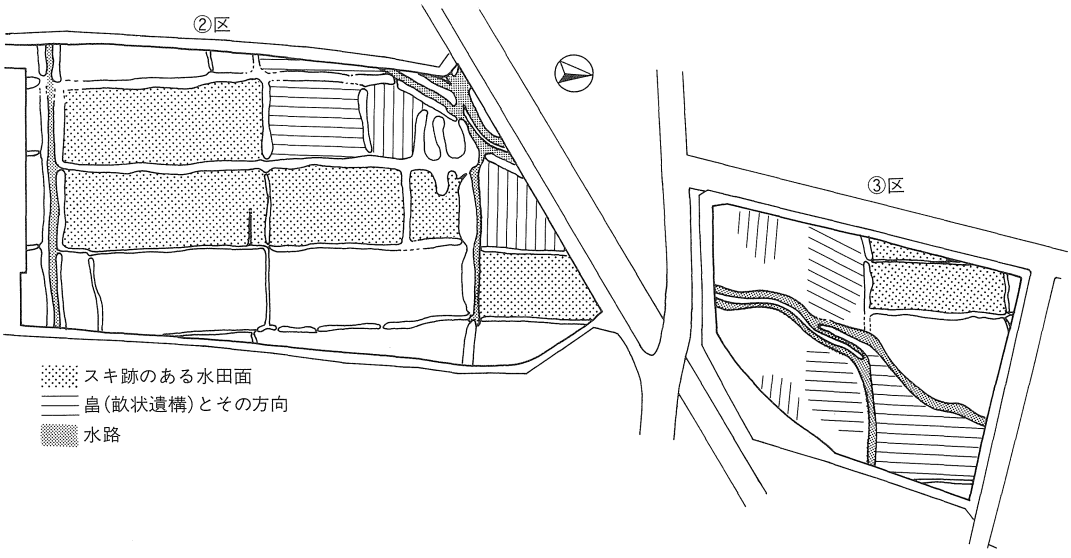


第72図　③区礎石建物跡配置略図（S＝1／1,500）

畠に変化しており，短期間の内に集落が移動，あるいは廃絶・縮小したことを物語っている。竪穴住居や掘立柱建物と重複して水路や大畦畔が存在する地点があり，条里制の本格的な施工にあたって各集落に政治的な影響がおよんだ可能性が高い（巻頭1図）。

条里制水田は全て9世紀後半の洪水砂（Ⅲ層）に埋没していた。その範囲は④区中央付近にまでおよんでおり，水田開発が自然堤防上に深く食い込んでいたことがうかがえる。こうした，自然堤防上の水田に水を供給するため，大規模な水路が標高の比較的高い位置を通って北へ延びている（第73図）。また，水路付近の微高地上では，その地形を利用して畠地となっている。

②・③区の畠地は高地のうちの約30％近くに達しており，条里制水田の域内で本格的な畠作物の栽培が行われていたことが考えられる。畠地の土壌は水田土壌であり，プラントオパールの量も多い（パリノサーヴェイ所見）。このことは，本来水田であった地区を，9世紀後半に畠作物の栽培に転作した可能性が考えられ，作物とその背景の解明が今後の課題となるであろう。



第73図　②③区平安時代（9世紀後半）水田・畠・水路概略図（S＝1／2,000）

8．中世村落の形成　9世紀後半の大洪水（Ⅲ層）後，平安時代後半の竪穴住居が②区や④区に点在して認められる。それにつづく中世前半の集落は，昨年度頂地区の①区で確認されている。現在整理が進んでいないため時期の限定ができないが，④区・⑤区にも新たな中世村落が形成されはじめる（Ⅲ－1～Ⅲ－2上面検出）。⑤区では，2ヶ所で方形にめぐる溝のコーナーが見つかっており，④区にかけては，多数の竪穴状遺構・土坑・井戸・柱穴が認められる（第74図）。屋代氏の館と推定されている城の内遺跡からも近距離であり，区画溝内側の調査に入る来年度の成果が期待される。

第74図　④区　中世面全景

上信越自動車道関連　試掘調査　8　大穴（おおあな）遺跡

所　在　地：更埴市大字森字大穴573－1番地ほか　　調査担当者：出河裕典
調査期間：平成4年12月14～18日　　山極　充
対象面積：7,000m²　　試掘面積：664m²
調査方法：重機によるトレンチ調査（古墳のみ手掘りによるトレンチ）
遺跡の立地：有明山の北山麓に入り込む谷地形，現状は緩斜面の畑地。
主な出土遺物：土器・弥生土器（中期），土師器，須恵器（古墳時代）

概　況

地形にあわせて20箇所のトレンチを設定し調査したところ，現耕土下10～40cmで暗褐色の遺物包含層が確認された。斜面を削り土を盛っているため畑の下部にいくほど現耕土が厚い。遺物包含層下は大形礫を含む基盤層となる。谷奥も含め，ほとんどのトレンチで，弥生土器，土師器，須恵器，時期不明の土器片などが散見され，土坑もしくは竪穴住居と思われる落ち込みが9箇所で確認できた。中でも弥生土器（栗林式）は壷，甕などが谷の入り口より多く出土しており，遺構に伴うものもある。また，地元では「塚穴の畑」と呼ばれている，谷奥の石垣が張り出す部分2箇所にトレンチを入れたところ，古墳の墳丘らしい高まりと石積みを確認。1元の周溝からは須恵器の甕の破片が出土しており，もう1基では石室の一部（天井石か）が確認できた。

調査結果

上記の通り，谷奥の古墳2基および，調査区全面の記録保存が必要であろう。

第75図　古墳試掘風景

北陸新幹線関係

9　弥勒堂（みろくどう）遺跡

所　在　地：上田市大字下塩尻字越畑1044他　　調査担当者：上田典男，西嶋　力
調 査 期 間：平成４年２月17日～３月31日　　広瀬昭広，川崎　保
調 査 面 積：1,500㎡
時代と時期：縄文時代中・後期，弥生中・後期，古代，中世
遺跡の立地：虚空蔵山山麓の段丘面　　遺跡の特徴：墓・小鍛冶を含む古代・中世の集落跡

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居跡	墓	溝	土坑柱穴
古　　代	4		2	
古代・中世		4		239

主な出土遺物

土　　器：縄文時代中・後期土器，弥生時代中・後期土器，土師器，須恵器，灰釉陶器，中世陶器
石　　器：石鏃，石槍，打製石斧，叩き石，砥石
土・石製品：羽口，勾玉，石鉢
そ　の　他：銭貨，鉄滓，溶滓，人骨，獣骨（馬・鹿）

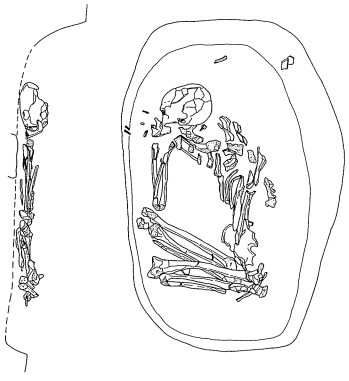
調査の概要　遺跡の立地する段丘面は虚空蔵山（1,067m）の南山麓に形成された小規模段丘面で，10m程の段丘崖で千曲川低位段丘面と画されている。調査区は山麓から段丘面に移行する地点で，崖錐による砂質土が厚く堆積している。

検出された遺構の中ら特徴的なものを幾つか概述する。

SB02は小鍛冶跡と考えられる遺構である。５×４mほどの方形でコーナー付近に焼土と炭化物の堆積が見られ，床面から鍛冶炉やピットが検出された。羽口や鉄滓・溶滓なども出土した。これと同様な堆積状態を示す土坑もあり，類似遺構の可能性がある。

墓跡は４基検出され，埋葬人骨を伴う土坑墓である。何れも横臥屈葬で成人３体，小人１体である。遺存状態の良好なものは，長軸１m程度の楕円形の土坑に，頭部を山側にして埋葬している。頭は西側を向き，脚は強く折り曲げられている。他の３体も同様な埋葬状態を示す。

この他多くの土坑・ピットが検出されたが，そのほとんどは，段丘崖に近い平坦部に作られている。遺跡の中心は南側の平坦部に広がるものと推測される。



第76図　墓址（Ⅰ：30）

第77図　調査区全景（東から）

10　川中島遺跡（かわなかじま）

所　在　地：長野市川中島町上氷鉋1364　　調査担当者：原　明芳
調 査 期 間：平成４年11月14日～12月25日　　綿田弘実
調 査 面 積：1,000㎡　　伊藤友久
遺跡の立地：犀川の扇状地上
時代と時期：中世　　近世後期
遺跡の特徴：近世の洪水によって埋没した水田跡
主な検出遺構：水田面　2，畦畔　2
主な出土遺物：内耳鍋・近世陶器

善光寺平西部に展開する犀川の扇状地の中央部に立地し，わずかに微高地となっている。一帯は水田として大部分が利用されており，埋蔵文化財の調査が従来行われることのなかった地域である。今年度の調査地点は，川中島でも古い集落のはずれのJR川中島駅構内にあり，現在は撤去されているが以前は線路が敷設されており，その際に厚い盛土がなされており，当初はすでに遺構等が破壊されていると予想された。そのため，本調査にはいる以前に，試掘調査を実施し遺跡の内容を把握することにつとめた。試掘調査は，11月に実施し幅3.5mに南北にいれ，断面観察を中心に行った。その結果南部分に良好な近世後半の水田面と畦畔を確認し，本調査を実施することにし，北部分については，線路が敷設される際に，下部まで大きく破壊されている。

本調査では，洪水砂に覆われた水田面と水路，畦畔を検出した。水田面には，畦と平行して稲株痕，足跡等が検出された。遺物はほとんどなく，わずかに水田面からは近世の陶磁器が出土したのみである。

第78図　遺跡全景

第79図　畦畔

県道大町線関係

11　千見（せんみ）遺跡

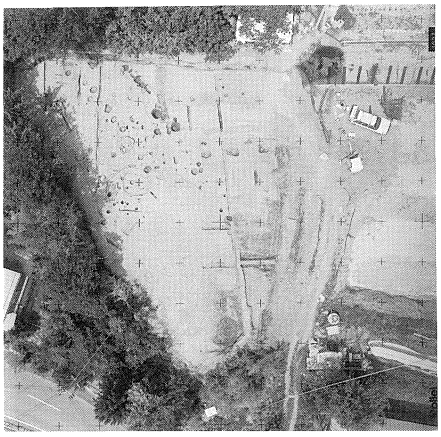
所　在　地：美麻村千見
調査担当者：市川隆之　臼居直之
調査期間：平成4年7月6日～同8月7日
上田典男　西山克己
調査面積：800m²
伊藤友久　西島力
遺跡の立地：土尻川河岸段丘
白沢勝彦　原　明芳
時代と時期：縄文後期，戦国時代～近代
遺跡の特徴：近世寺院伝承地，近代学校跡

主な検出遺構

遺構／時代	礎石建物跡	掘立柱建物跡	土坑	溝	その他
縄文					焼土跡・遺物集中
戦国～近代	3	3	9	17	柵列2・石列1

主な出土遺物

土　器：縄文後期・戦国～近代土器陶磁器，ガラス
石　器：石鏃，スクレイパー
石製品：石臼，石板，石墨



第80図　千見遺跡全景

松本平北部と善光寺平間には平原が隆起した山地が広千見遺跡全景がり，この山間地をぬうように土尻川が流れる。遺跡はこの土尻川の河岸段丘上，美麻村千見地籍に所在する。この千見地籍は数度の戦乱の記録を残す山城や江戸期の番所があるなど，戦国期以後に松本平と善光寺平の2つの盆地の政治勢力の境になった場所と知られる。こうした歴史的環境のなかで，本遺跡は江戸時代に善福寺，近代には千見学校の故地として知られていた。善福寺は開山時期が明らかでないものの，信州新町の玉泉寺を本寺とする新義真言宗の寺として江戸前期に松本藩検地帳にみえ，しばらく無住の時期が続いた後，江戸末期には修験者が住着するようになったとされる。それも，明治4年に廃寺となり，寺子屋から学校に移行，改築された記録がある。このような歴史的な変遷が知られているなかで，既知の遺跡変遷は元より，より古い時期の様相の解明を課題として調査に臨んだ。以下に調査結果の概略をしめす。

本遺跡は第3紀の堆積岩を基盤とし，その上に河川堆積物を載せている。ロームの堆積が認められないことから，本遺跡が土尻川から離水した時期は少なくとも1万年前以後であると考えられる。離水後，砂岩片の混じる崩落土と河川堆積物の堆積があり，この時期に所属する焼土跡が1基検出されている。やがて，山地の隆起と土尻川自体の浸食の深化で本遺跡地は高台として残されていき，縄文後期以前には高台の段丘として安定したようである。縄文以後では若干の平安期や中世の遺物が採取されたものの，遺跡の性格は明らかでなく，一定の居住が推定されるのは戦国期からである。戦国期は遺構が明瞭でないものの，内耳鍋や青磁，古瀬戸末期の製品等の各種の焼物が得られた。江戸時代は調査域北端で伴う可能性のある緩斜面を切断

するような溝が検出され，この整地の西隣を中心として江戸末期の掘立柱建物跡や溝が検出された。近代には千見学校跡と思われる大規模な盛土と礎石建物が認められ，遺跡の様相は大きく様変わりしたようである。

上記の調査結果はまだ検討すべき点も多いが，数少ない土尻川沿いの遺跡調査として，付近の歴史的な変遷を明らかにする若干の知見を加えることができたと思われる。しかし，本格的な検討はこれからであり，今後も子細な検討を加えていきたいと思う。

試掘調査

12　米山遺跡（こめやま）

所　在　地：北安曇郡美麻村米山　　調査担当者：原　明芳

調 査 期 間：平成４年７月28日

対 象 面 積：試掘面積24㎡

調 査 方 法：重機を用いトレンチをいれ，断面観察。

遺跡の立地：土尻川の小規模な河岸段丘

概況

調査地点は低地部をはさんで２ケ所に別れるが，東部分（米山地区）は宅地となっておりこの時点で撤去が終了せず，今回は西側の水田部分（滝平地区）を対象として実施した。現況は１ｍほどの高低差のある３枚の水田であり，それぞれに幅２ｍ，長さ４ｍ，深さ２ｍのトレンチをほぼ中央にいれた。いずれも，上面は近年の圃場整備事業により削平あるいは盛土されており，一部にはその下面に薄く水田面が観察できるが，床土にコンクリートなどが混じり，時期的には近代以降と思われる。その下部に人頭大の河川礫を含む厚い層が堆積しており，遺物・遺構等の検出はみられなかった。これらのことから，以前遺物（縄文時代後期土器片）が採集されたとされる地点が一段高い段丘面であり，そこが遺跡の中心と考えられ，今回の調査地点は遺跡の範囲から外れている可能性が高い。このため，県道大町線の改良工事により破壊される部分の調査は必要ないと考えられ，本調査の必要はないと判断した。

第81図　試掘図景

今後の調査

西側部分については，一段高い段丘面へ道路が付けられるが，それについては工事立ち会いとし，東部分についても住宅造成により地形が大きく改変されており，同様な保護処理を講じることとなった。

整理作業

整理課が実施した報告書刊行を前提とした整理作業は，刊行年度が決められた遺跡と，大規模な遺跡に分けることが可能で，後者は，遺構図の整理，遺物量の把握など整理計画作成の準備をした。

(ア)明科町北村遺跡　　担当　平林　彰　　西嶋　力　　町田勝則

平成元年より実施してきた整理作業も終了し，報告書の刊行に漕ぎつけた。縄文時代の人骨が内陸部までまとまって発見された遺跡として著名であり，その報告書も従来の考古学分野のみのアプローチのみでなく，それに加えて形質人類学や環境生態学の分野と三本を柱とした内容であり，今後の縄文時代研究に大きく寄与すると期待される。

(イ)筑北地区（坂北村向六工・十二遺跡，麻績村野口・古司・子尾入遺跡）　担当　綿田広実

比較的小規模な遺跡が多く，遺物の実測，図版のトレース製版，写真撮影，原稿執筆，編集が終了し，印刷業務のみを来年度に残し整理作業を終了した。特に向六工遺跡の縄文時代早期末と平安時代の資料は，遺跡が松本平と善光寺平の中間に位置していることから，貴重と思われる。

(ウ)更埴市（鳥林・小坂西遺跡），長野市西南部（鶴荻七尋岩陰・赤沢城・赤塩城見山砦遺跡）
担当　綿田弘実

聖山西南麓に展開する小規模な遺跡である。筑北地区と同様，来年度に印刷業務のみを残し整理作業を終了した。この中で塩崎城見山砦跡は，山城を全面調査した例として貴重である。

(エ)長野市鶴前遺跡　　担当　伊藤友久

石川条里遺跡の存在する水田地帯を望む東向き斜面に位置する弥生時代後期末から古墳時代前期と奈良・平安時代の集落遺跡である。同様に来年度に印刷業務を残し整理作業を終了した。注目されるのは，弥生時代後期から古墳時代前期の北陸系土器である。

(オ)長野市石川条里遺跡　　担当　臼居直之　　市川隆之　　白沢勝彦

昨年来実施してきた土器の洗浄・注記が終了し，古墳時代前期の一部については接合・実測・計量。復元にはいる。木器は実測作業が進み，一部についてはＰＥＧ処理が終了した。

(カ)長野市篠ノ井遺跡　　担当　西山克己　　黒岩　隆

昨年来実施してきた土器の洗浄・注記，遺構図の整理が終了し，基礎資料の把握が終了する。自然遺物の整理を並行して進め，人骨・動物骨について鑑定委託を実施する。

(キ)長野市松原遺跡　　担当　上田典男

昨年度に発掘調査が終了し，今年度より本格的な整理作業にはいる。当遺跡は，平成元年・２年と冬期間の調査を実施したため，遺構図の照合等の基礎整理ができておらず，本年度はそれに終始した。また遺物の洗浄終了も当初目標であったが，多量のため達成できなかった。

(ク)長野市川田条里遺跡　　担当　臼居直之

昨年度から継続する木器実測を実施し，平行してPEG処理を行う。

以下に石川条里遺跡の，樹種同定を委託した成果について報告しておく。

石川条里的遺跡出土木製品の樹種

京都大学木質科学研究所　伊東隆夫
奈良国立文化財研究所　　光谷拓実
滋賀県教育委員会
びわこ博物館開設準備室　布谷知夫*

長野県長野市篠ノ井塩崎に所在する石川条里的遺跡から多くの木製遺物が出土したことにより，長野県埋蔵文化財センターより出土樹種の同定を依頼された。

依頼総数50点について使用樹種の同定をおこなったのであるが，かなり脆く崩れやすいものが多く含まれていた。しかし，一般的な方法で作製した顕微鏡標本によりすべて同定することができた。これらの結果についての樹種同定一覧表は表２のとおりである。

木製品のなかには農耕具が多く混ざっていたが，そのほとんどがコナラ属クヌギ節の樹種であった。農耕具についての過去のデータを調べると９割以上がカシ材を使用していたことになっている。

しかし，最近になって群馬県にある新保遺跡（弥生～古墳時代）から出土した農耕具はほとんどクヌギ材が使用されていることが判明している。その結果，全国的にみてカシ材の利用頻度が90％を割るに至った。石川条里的遺跡は新保遺跡とほぼ同様の弥生から古墳時代に相当するので，今回の結果は非常に興味深い。すなわち，関東以北の遺跡では農具の使用樹種としてカシの仲間ではなくクヌギの仲間が使用されていたという傾向が定着するのかも知れない。今後，さらに石川条里的遺跡出土の農耕具を数多く調査し，農耕具の使用樹種について地域的な違いがあるのかを明らかにしていく必要があろう。

なお，木製品の種類と無関係に樹種別に出土数をまとめてみると表１のようになる。同定数に限りがあるのでこの結果からは特別目新しい事実はみられない。

表１　樹種別の点数

ヒノキ科	8点
スギ	1点
モミ属	8点
ヤナギ属	1点
オニグルミ	1点
アサダ	1点
クヌギ節	13点
コナラ節	2点
クリ	5点
ケヤキ	1点
エノキ	3点
サクラ属	1点
カエデ属	2点
アワブキ	1点
クロモジ属	1点
ニワトコ	1点
合　計	50点

以下に樹種同定の根拠を示す。

ヒノキ科（Cupressaceae）

晩材幅は少なく，樹脂道はみられない。分野壁孔はヒノキ型からややスギ型。

スギ（*Cryptomeria japonica*）

晩材幅はやや広い。樹脂道を欠く。樹脂細胞が早・晩材の境界あるいは晩材部に接線方向にならぶ。分野壁孔はスギ型。

モミ属（*Abies spp.*）

＊同氏が大阪市立自然史博物館に在籍中に分担した。

表２　石川条里的遺跡出土木製品の樹種同定一覧

資料番号	遺構名	出土層位 取り上げ番号	樹種	木製品	時代	備考
1	11区－２，ＳＤ３００２	№２－７	クヌギ属	鍬	弥生－古墳	
2	11区－２，ＳＤ３００２		クリ	杭	弥生－古墳	東側平面杭
3	11区－１	№４	クヌギ節	鋤	弥生－古墳	
4	11区－２，ＳＤ３００４		クヌギ節	鋤	弥生－古墳	
5	11区	ＶＩ層上面（平安水田）	モミ属	田下駄		
6	11区，ＳＤ３００３，３００４		サクラ属	鍬	弥生－古墳	
7	11区－１，ＳＤ３００３	№1305	クヌギ節	横槌	弥生－古墳	
8	11区－２，ＳＤ３００４	Ｂ－溝底埋上	エノキ		弥生－古墳	
9	11区－１，ＳＤ３００３		オニグルミ	弓形木製品	弥生－古墳	
10	11区－１，ＳＤ３００４		モミ属	鉢状木製品	弥生－古墳	
11	11区－２，ＳＤ３００２		クリ	建築部材	弥生－古墳	
12	11区－２，ＳＤ３００４		ヒノキ科	木刀状木製品	弥生－古墳	
13	11区	ＩＸ層	ケヤキ	刳物	古墳	
14	11区－１，ＳＤ３００３	№1186	エノキ		弥生－古墳	
15	11区－１，ＳＤ３００４	№221	エノキ		弥生－古墳	
16	11区－１，ＳＤ３００４	№211	ヤナギ属		弥生－古墳	
17	15区，ＳＤ３００４	№８	アワブキ	エブリ柄部	弥生	
18	15区，ＳＤ３００４	№５	クヌギ節	二又鍬	弥生－古墳	
19	15区，ＳＤ３００４	№３	クヌギ節	広鍬	弥生－古墳	
20	15区，ＳＤ３００４	№12	モミ属	赤彩木製品	弥生	
21	15区，ＳＤ３００４	№10	クヌギ節	二又鍬	弥生－古墳	
22	15区，ＳＤ３００４	№601	モミ属	杭	弥生－古墳	溝内
23	15区，ＳＤ３００４	№405（Ｓ）	クロモジ	弓形木製品	弥生－古墳	
24	15区，ＳＡ４００２	№３（Ｓ）	ニワトコ	横木材	古墳	
25	15区，ＳＡ４００２	№80	モミ属	樋形木製品	古墳	
26	15区，ＳＡ４００７	№23	スギ	建築部材	古墳	
27	15区，ＳＤ３００４	№522	コナラ節	杭	古墳	
28	15区，ＳＡ４００４	№278	カエデ属	杭	弥生	
29	15区，４００５	№103	コナラ節	横木材	弥生－古墳	
30	９区，ＳＡ２００２	№４	カエデ属	杭	弥生－古墳	
31	９区，ＳＡ２００１	№１	クヌギ節	杭	弥生－古墳	
32	８区－１，ＳＫ２４３６		ヒノキ科	梯子	古墳	
33	８区－１，ＳＫ２４９２	№４	ヒノキ科	梯子	古墳	
34	８区－１，ＳＫ２４９２	№３	ヒノキ科	杭	古墳	
35	８区－１，ＳＤ２０２４	№21	ヒノキ科	建築材	古墳	
36	４区，ＳＡ２００２	№５	クヌギ節	杭	弥生	
37	５区，ＳＤ２０１６	№１	クヌギ節	杭	古墳	
38	５区，ＳＤ１０１６	№６	クヌギ節	杭	古墳	
39	５区，ＳＤ２０１６	№541	モミ属	板	古墳	
40	５区，ＳＤ２０１６	№536	モミ属	板	古墳	
41	５区，ＳＤ１０１６		クヌギ節	スキ	古墳	
42	５区，ＳＤ１０１６	№９	アサダ	杭	古墳	
43	５区，ＳＤ１０１６	№450	モミ属	板	古墳	
44	５区，ＳＤ２０１６	№534	ヒノキ科	板	古墳	
45	５区，ＳＤ２０１６		クヌギ節	不明材	古墳	
46	５区，ＳＤ２０１６	№319	ヒノキ科	材（角材？）	古墳	
47	20区－１，台帳№サンプル№２－11	第５検出面Ｑ21地区	クリ	自然木（立木）	弥生中期	
48	20区－１，台帳№５検－２－20	第５検出面（ＳＤ5003内）ＳＡ5001	クリ	杭	弥生中期	杭列
49	20区－１，台帳№サンプル№２－16	第６検出面Ｕ－２地区	クリ	自然木（立木）	弥生中期	
50	20区－１，台帳№６検－３－26	第６検出面ＳＤ6007内	ヒノキ科	杭	弥生中期	溝内

正常樹脂道がみられない。樹脂細胞はまれにしかみられない。放射仮道管は存在しない。放射柔細胞の壁は厚く末端壁は数珠状となる。

ヤナギ属（*Salix spp.*）

散孔材。道管は単独ないし放射方向に数個複合する。単穿孔。道管放射組織間壁孔はふるい状となる。放射組織は単列異性。

オニグルミ（*Juglans mandshurica*）

散孔材。比較的大形の道管が均一に分布する。単穿孔。放射組織は同性で１－４列。

アサダ（*Ostrya japonica*）

散孔材。２－５個が放射方向に複合。単穿孔。側壁にらせん肥厚。放射組織は上下縁辺に方形の細胞を有する異性である。

クヌギ節（*Quercus* sect. *Cerris*）

環孔材。孔圏道管は大形で，孔圏外道管は壁が厚く単独で放射方向にならぶ。道管は単穿孔で内腔にチロースが詰まる。広放射組織がみられる。

コナラ節（*Quercus* sect. *Prinus*）

環孔材。孔圏道管は大形で，孔圏外道管は小さく多数が火炎状に分布する。道管は単穿孔でチロースが詰まる。広放射組織がみられる。

クリ（*Castanea crenata*）

環孔材。孔圏道管は大形で，孔圏外道管は火炎状に配列する。単穿孔。放射組織は単列同性で，広放射組織はみられない。

ケヤキ（*Zelkova serrata*）

環孔材。孔圏道管は大形で，一列。孔圏外小道管は多数集合して斜線状に配列する。小道管にらせん肥厚。単穿孔。

エノキ（*Celtis cinensis*）

環孔材。孔圏道管は多列。孔圏外小道管は斜線状，接線状に集合。単穿孔。小道管にらせん肥厚。放射組織は異性でさや細胞がみられる。

サクラ属（*Prunus spp.*）

散孔材。やや小さい道管が単独あるいは放射状，接線状に複合する。単穿孔で側壁にらせん肥厚。放射組織は同性ないし異性で１－４列。

カエデ属（*Acer spp.*）

散孔材。中庸の道管が単独ないし２，３個複合する。単穿孔でらせん肥厚あり。横断面で木繊維が特徴的な模様をつくる。放射組織は同性。

アワブキ（*Meliosma myriantha*）

散孔材。段階穿孔ないし単穿孔。放射組織は異性で１－４列となり，軸方向に長い。

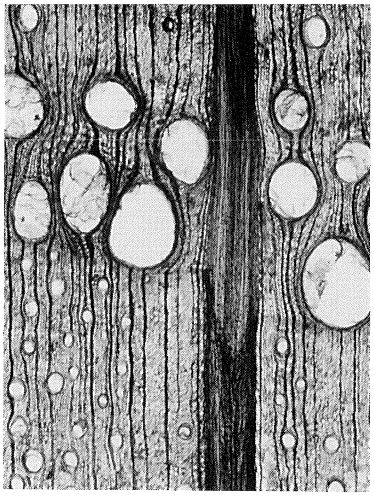
クロモジ属（*Lindera spp.*）

散孔材。道管径はやや小さい。ほぼ単独ないし，２－４個放射方向に複合する。単穿孔と段階穿孔。放射組織は異性で１－３列。油細胞はあまりみられない。

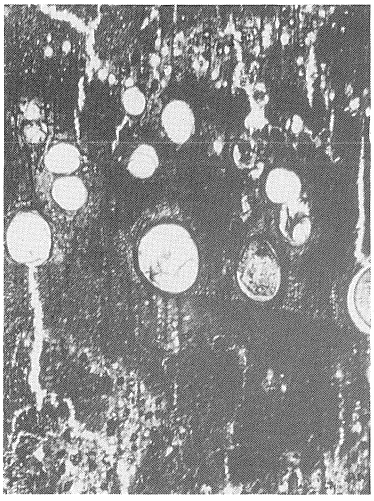
ニワトコ（*Sambucus racemosa*）

散孔材。やや小型の道管が１－10個放射状，斜線状，団塊状に複合する。単穿孔ないし階段穿孔。放射組織は異性。

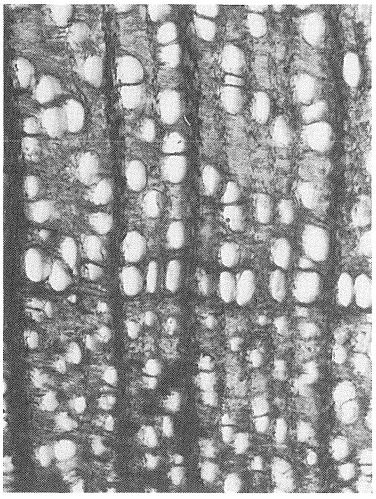
図版Ⅰ　石川条里遺跡出土木製品の顕微鏡写真



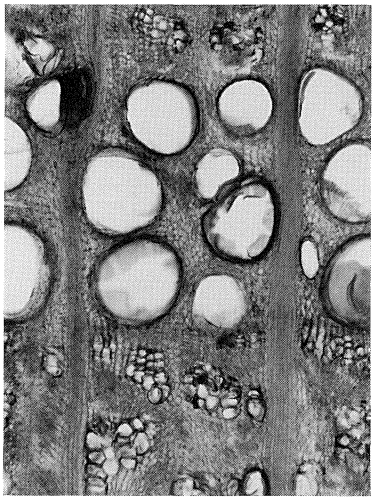
1．クヌギ節（No.1）木口　×25



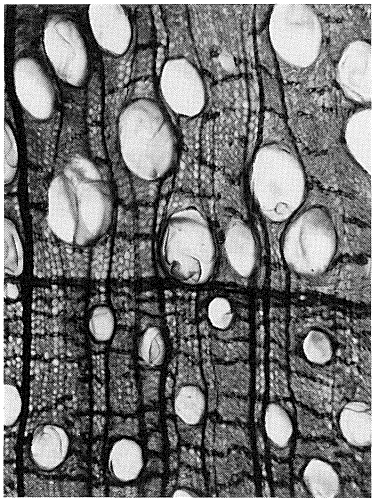
2．クリ（No.2）木口　×25



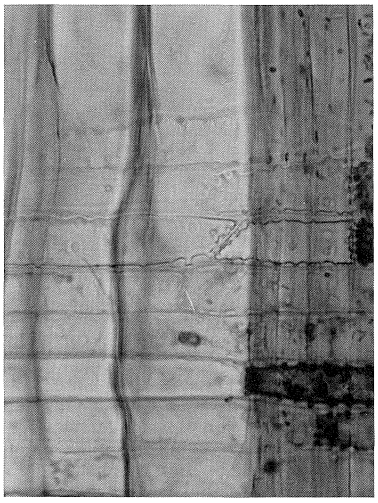
3．サクラ属（No.6）木口　×60



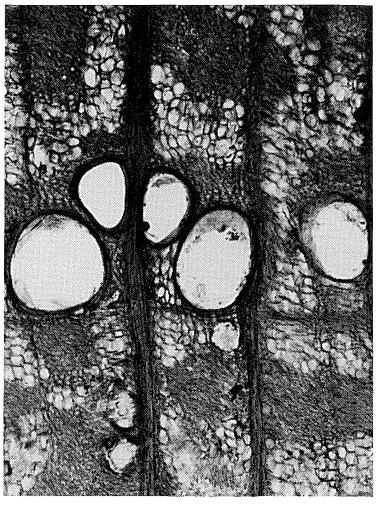
4．エノキ（No.8）木口　×40



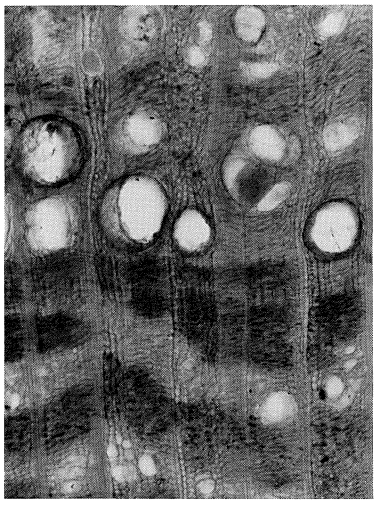
5．オニグルミ（No.9）木口　×40



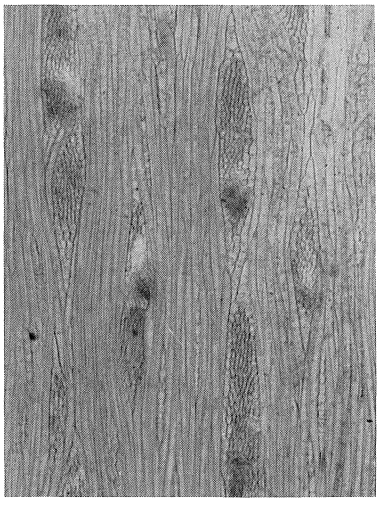
6．モミ（No.10）木正目　×300



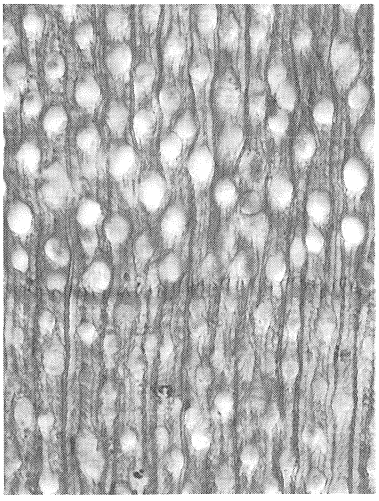
7．ケヤキ（No.13）木口　×40



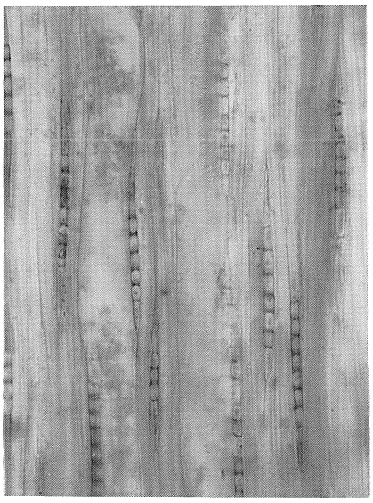
8．エノキ（No.14）木口　×50



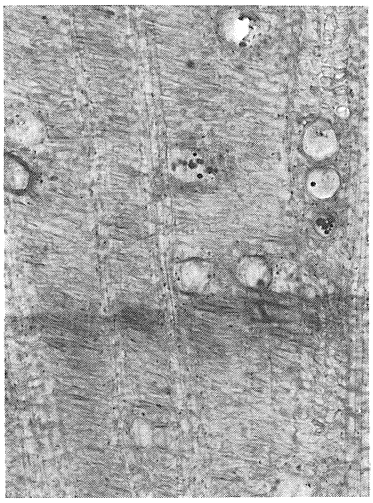
9．エノキ（No.14）木反目　×60



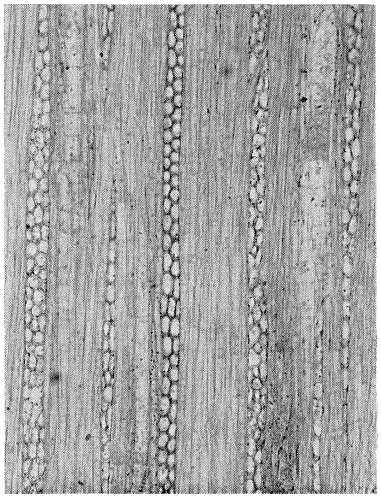
10. ヤナギ属（No.16）木口　×60



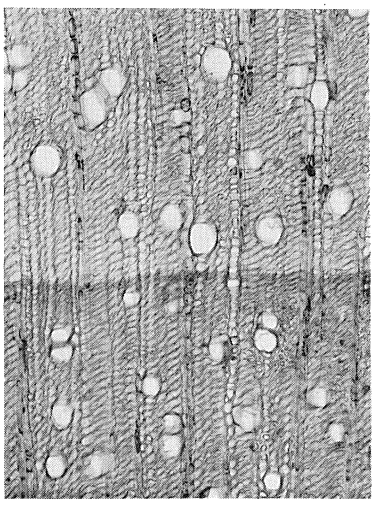
11. ヤナギ属（No.16）板目　×120



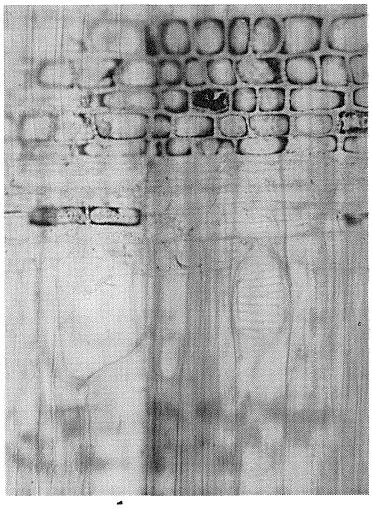
12. アワブキ（No.17）木口　×50



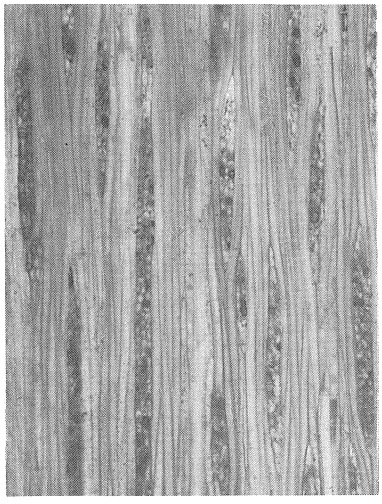
13. アワブキ（No.17）板目　×50



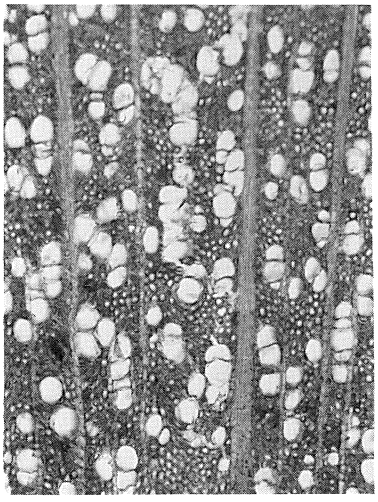
14. クロモジ属（No.23）木口　×60



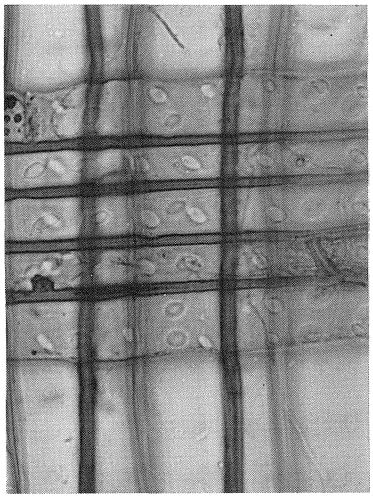
15. クロモジ属（No.23）木正目　×60



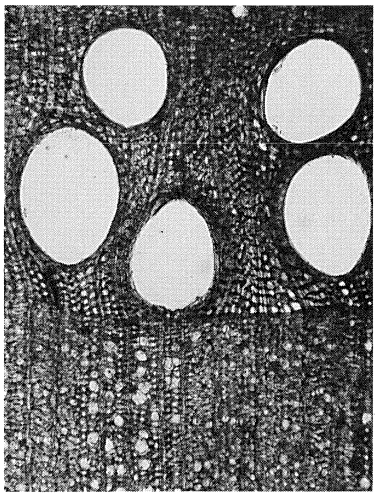
16. クロモジ属（No.23）板目　×60



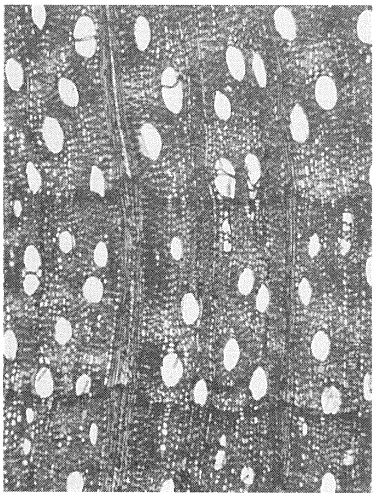
17. ニワトコ（No.24）木口　×60



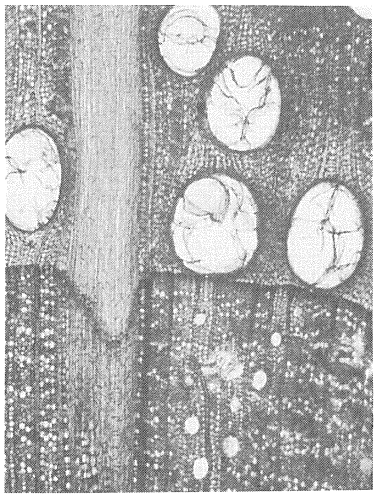
18. スギ（No.26）木正目　×400



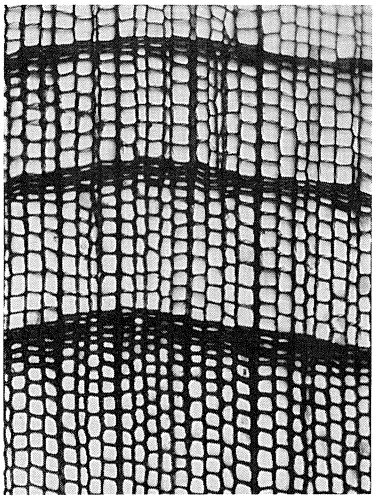
19. コナラ節（No.27）木口　×60



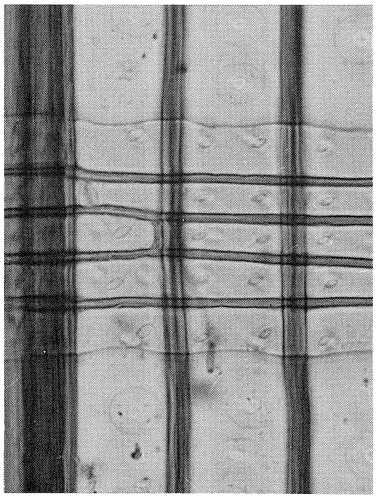
20. カエデ属（No.28）木口　×60



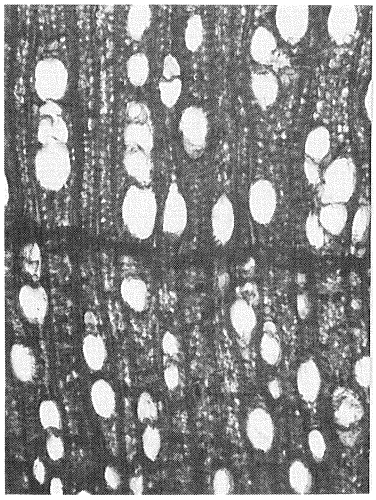
21. クヌギ節（No.31）板目　×40



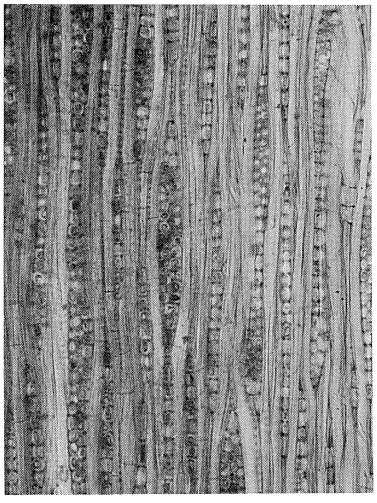
22. ヒノキ（No.35）木口　×40



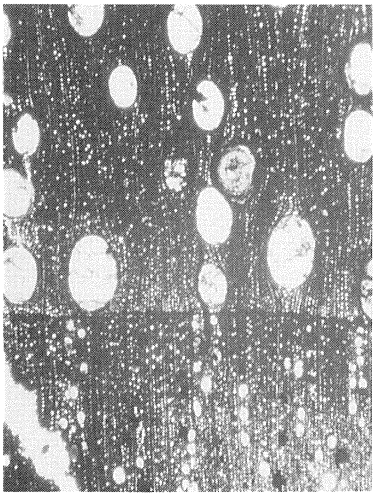
23. ヒノキ（No.35）木正目　×400



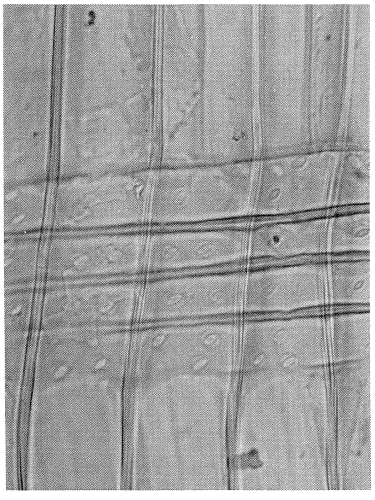
24. アサダ（No.42）木口　×60



25. アサダ（No.42）板目　×100



26. クリ（No.47）木口　×20



27. ヒノキ（No.50）木正目　×400

(4) 中野調査事務所

発掘調査の概要

調 査 区 域：上高井郡小布施町，中野市

調査遺跡数：5遺跡（小布施町飯田古屋敷，玄照寺跡，中野市清水山窯跡，池田端窯跡（以上上信越自動車道），栗林遺跡（志賀中野有料道路関係））

調査総表面積：59,450㎡（飯田古屋敷6,300㎡，玄照寺跡6,000㎡，清水山窯跡5,000㎡，池田端窯跡16,000㎡，栗林遺跡26,150㎡）

調 査 期 間：平成4年4月6日～同年12月18日

試掘調査遺跡数：2遺跡（小布施町飯田古屋敷，玄照寺跡遺跡）

対 象 面 積：12,000㎡（飯田古屋敷6,000㎡，玄照寺跡6,000㎡）

調 査 期 間：平成4年6月10日～同年6月11日

昨年度，長野調査事務所中野支所として開始した調査は，今年度，中野調査事務所として行われた。昨年度に引き続いて上信越道中野インター予定地および栗林遺跡，今年度初めて，小布施町内を対象とした。これにより，上信越道中野インター以南，志賀中野有料道路関係の発掘調査は終了した。当所の調査の原因者は道路公団・県・県道路公社にまたがり，中野市職員3名の派遣を得ていることもあって，工程調整・事務処理などこれまで以上に頻瑣であった。

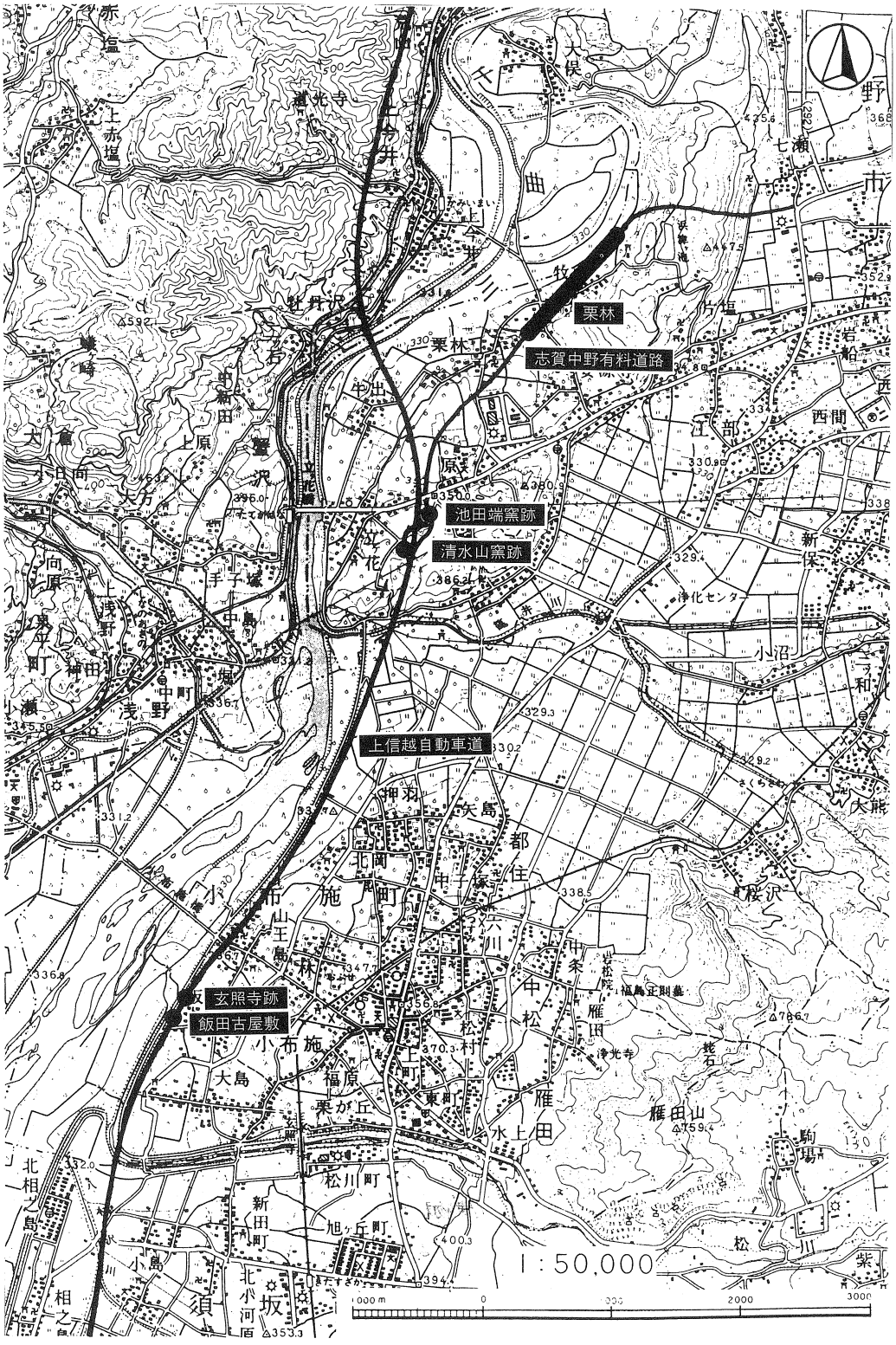
飯田古屋敷，玄照寺跡の2遺跡は隣接し，前者は中世居館跡，後者は近世初頭の寺院跡といわれていた。本調査前の試掘により，遺跡の性格についてはいずれも疑問が持たれた。飯田古屋敷遺跡では居館などの遺構は存在せず，近世の木製品を伴う流路・溝，水田跡などを調査した。中・近世集落跡に隣接する場所で近世以降の流路変更や土地利用をあきらかにしたことは貴重である。居館跡は周辺の地割などから見て調査地東方に存在する可能性がある。

玄照寺跡遺跡は，近世初頭の集落跡を調査した。数区画の屋敷地を調査し，掘立建物・井戸や火葬施設などを検出した。この地は築堤以前は現集落の一部であり，近世集落の変遷を明らかにする重要な資料となろう。伝承の玄照寺跡は現堤防の河川敷内に存在する可能性がある。

清水山窯跡および池田端窯跡は隣接するが，奈良時代前半期から平安時代までの須恵器窯・瓦窯・粘土採掘坑などをあきらかにした。特に清水山窯跡では郡名表記の文字資料・記号資料がかなり多く出土し，供給地および生産組織などを解明する貴重な資料である。

池田端窯跡では，窯跡のほか，昨年の沢田鍋土遺跡と同様に粘土採掘坑を多数調査できた。3・4年度で周辺の窯跡計13基を調査しており，これらの関連遺構とあわせて，一貫した須恵器生産工程をあきらかにできよう。

栗林遺跡では，昨年度に続いて，縄文時代後期の貯蔵穴群，長野県史跡栗林遺跡の弥生時代集落の外縁部に位置する弥生時代中期の掘立建物群・土坑群，これとは別の弥生時代中期・古墳時代・平安時代の集落をあきらかにした。これまで不明確であった栗林遺跡の内容は，二年にわたる調査によって，その全体像にせまる糸口をつかんだといえよう。また，縄文時代の集落と貯蔵穴・食料加工場を一体として調査したことも貴重な調査例となった。志賀中野有料道路関係は，七瀬遺跡とあわせて，平成5年度に調査報告書を刊行する予定である。



地図４　中野調査事務所関係調査遺跡（１：50,000）

上信越自動車道関連

1　飯田古屋敷遺跡（いいだふるやしき）

所　在　地：上高井郡小布施町大字飯田字古屋敷481－1ほか　　調査担当者：赤塩　仁
調 査 期 間：平成4年8月18日～同年11月10日　　鶴田典昭
調 査 面 積：6,300㎡　　遺跡の立地：松川扇状地の末端部　　林　正則
時代と時期：中世以降　　臼田広之
遺跡の特徴：中世以降の自然流路，近世～現代の水田址

主な検出遺構

遺構／時期	ピット	水田跡	溝	流路	その他
中世以降	100		2	4	集石2，焼土1
近世～現代		4面	13	1	

主な出土遺物

石器・石製品：石臼，五輪塔
木器・木製品：漆塗椀，曲物，木製品部材，加工木材，板材
土器・土製品：内耳土器，かわらけ，中近世陶磁器

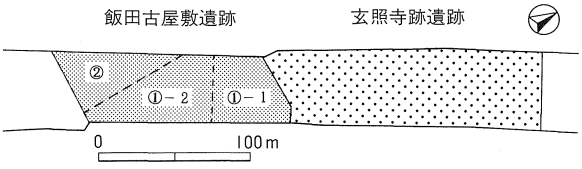
遺跡の立地

本遺跡は玄照寺跡遺跡と共に小布施町飯田地区に所在し，千曲川に流れ込む松川の扇状地末端部に立地する。ほぼ平坦な地形で松川・千曲川との比高差は僅少である。遺跡全体を覆う上層部の褐色砂質土や下層部の厚い灰色系粘土及び砂質土は千曲川の氾濫時の堆積，中間層の一部に見られる褐色の丸みを帯びた礫層は松川やその支流の堆積物と考えられ，松川・千曲川の影響を強く受けている一帯といえる。

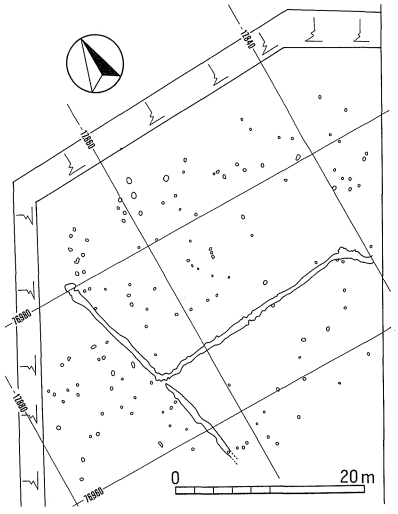
主な遺構と遺物

飯田古屋敷遺跡は16世紀半ば頃の豪族である飯田氏の居館跡として知られている。調査区は遺跡の西端部分に当たる。調査は試掘結果と地形的な面から，平坦地北部（①－1区），平坦地南部（①－2区），低湿地部（②区）の3区（第82図）に分けて行ったが，居館跡に結びつく遺構・遺物は認められず，戦国時代後半以降と思われる自然流路と近世～現代の水田跡などが確認された。

①－1区　幅約50cmの溝が直行するかたちで2本検出され，また直径・深さとも30cm程度の円形のピットが約100基検出された。



第82図　飯田古屋敷遺跡，玄照寺跡遺跡調査範囲（1：5,000）



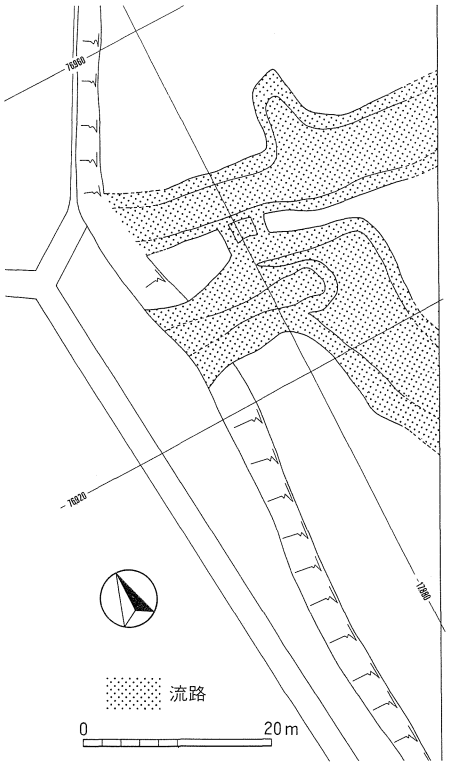
第83図　①－1区全体図（1：800）

溝は航空写真では周辺の畑境とほぼ一致し，多数のピットは散在的で建物跡となりうるものはなかった。ピット内から石臼，内耳土器，陶磁器など中世～近世にかけての遺物が出土している。

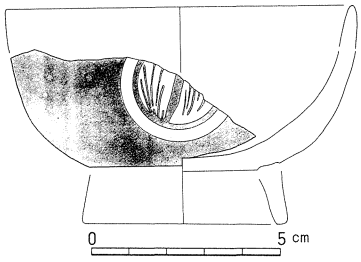
①－２区　地形的には①－１区よりやや低く，中世以降何度か自然流路が流れたものと思われる。検出された自然流路からは，陶磁器や建築部材，加工痕の残る材などが出土した。また流路の中には南から西方向に直角に曲がり，自然流路と考えるにはやや不自然で，人為性を示唆するようなものも認められた（第85図）。

②区　試掘の際木製品が出土したため調査を実施した。その結果第87図のように水田跡が検出された。第１面水田は洪水砂に覆われておらず，当地が10数年前まで水田であったことから現代のものと考えられる。又第２～第４面水田はそれぞれの畦の位置は異なっているがその方向は一致しているのに対し，第１面水田畦の方向は異なり東西方向の畦域の違いもはっきりしている。当地区には農地改革以前に割地慣行が残っていたことから，この第２～第４面水田は割地慣行による水田であったと推測される。時期としては第４面水田の下の層より幅約1.5mの溝が検出され，江戸時代の漆塗椀（第86図），ひしゃくなどの木製品が出土していることから，江戸時代のある時期にこの区域が水田として開発されたものと思われる。図示した漆器椀は，黒漆の地に朱漆で家紋を施したものである。

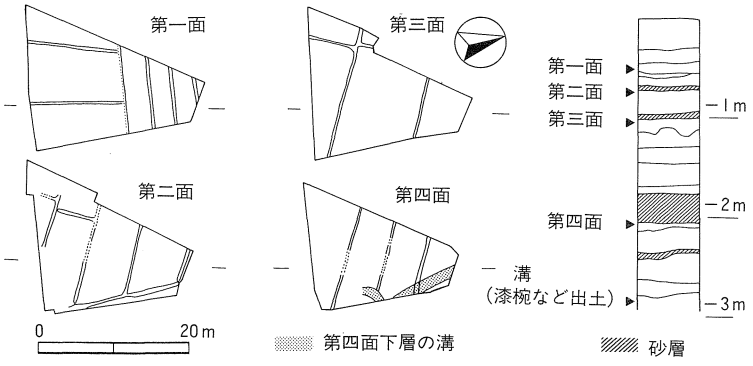
今回の調査では，居館跡と直接結び付く遺構の存在を確認することはできなかったが，調査区の東側は地形がやや高まっており，現在も一部に鍵の手状を呈する堀状の沢が認められる点などから，居館跡はさらに東側に存在する可能性が残される。



第84図　①－２区全体図（1：800）



第85図　漆塗椀（1：2）



第86図　②区水田（1：1,000）と層序

2　玄照寺跡遺跡（げんしようじ）

所　在　地：上高井郡小布施町大字飯田字北屋敷402ほか　　調査担当者：赤塩　仁
調査期間：平成４年７月２日～同年11月27日　　中村敏生　林　正則
調査面積：6,000㎡　　鶴田典昭　越　修一
遺跡の立地：松川扇状地の末端部　　臼田広之
時代と時期：中世～近世
遺跡の特徴：中世～近世の集落址

主な検出遺跡

遺構／時期	竪穴状遺構	掘立柱建物跡	溝	土坑	ピット	その他
中世～近代	2	30	24	70	3,336	集石７ 焼土多数 自然流路１

※土坑は井戸数基と火葬施設５を含む

主な出土遺物

土器・土製品：内耳土器，すり鉢，
　　中近世陶磁器他
石器・石製品：石臼，石鉢，五輪塔他
木器・木製品：井戸枠，曲物，加工材他
そ　の　他：銭貨，釘，把手金具，火葬骨他

遺跡の立地

玄照寺跡遺跡は飯田古屋敷遺跡の北側に隣接し，立地も同様である。

主な遺構と遺物

本遺跡は小布施町大島に現存する玄照寺が18世紀初頭まで所在したといわれるが，調査区内からは寺院跡に直接結びつく遺構・遺物は認められず，戦国時代後半～近世初頭にかけての集落址が確認された。

集落は北側と南側の自然流路に挟まれていたと思われる。検出された遺構は表の通りである。東西南北に走る大小の溝は狭いもので幅約30cm・深さ約20cm，広いものは幅約90cm・深さ約60cmを計る。これらの溝には切り合い関係が認められ，２期以上の時間差をもって集落を構成しているものと思われる。

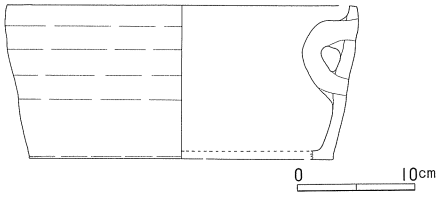
第87図　玄照寺跡遺跡全体図（1：800）

掘立柱建物址の殆どは２間×５間で，東西に長い長方形を呈する。またその柱穴の中には，拳大の小礫を詰めて根固めとしたものや平らな石を礎板状に据えたものが多数認められ，比較的堅固な上部構造の建物を想定することができる。

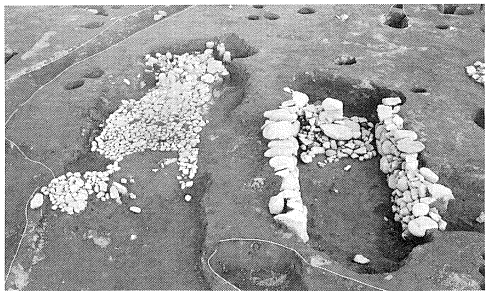
井戸には，石組みと木枠があり，石組みの井戸は内径約１ｍの円形で・深さは約1.5ｍを計る。底部から内耳土器片が出土したほか，石組みに五輪塔や石臼などが約20点再利用されていた。木枠の井戸は一辺約１ｍの正方形で，深さは約２ｍを計る。四隅に杭を打ち込み，横に桟を渡して板を支える構造をもつ。底部からほぼ完形の曲物が出土している。

火葬施設はほとんど長軸１ｍ程の楕円形で，一方に張り出し部をもつ。少量の骨粉のほかは遺物を伴わず，正確な時期は不明である。

特殊な遺構として石積みの竪穴状遺構が２基検出された。ＳＢ０１は平面形が3.5ｍ×２ｍ程の隅丸長方形を呈し，掘り込みは浅く中心から壁に向かって緩やかに立ち上がる。遺構内の石積みは破壊されており，一部に石積みが残るのみで散在的な検出状況であった。又この石積みに接して，かなり火熱を受けた石囲いの土坑があり，竪穴状遺構の付属施設であるのか、あるいは時間的に差をもつ別遺構であるのかは不明である。



第88図　ＳＢ０１出土の内耳土器（１：６）


第89図　ＳＢ０２と石敷土坑

ＳＢ０２は深さ約70㎝で，長辺４ｍ・短辺１ｍほどの長方形を呈し，長辺に沿って人頭大の石が３～５段積まれている。一方の短辺側にも拳大の石が敷き詰められており，その上にも石が積まれた形跡が窺える。またこの遺構のすぐ北側には長さ５ｍ・幅１ｍ程の規模で石を敷き詰めた浅い土坑が検出され，竪穴状遺構に関連する施設と考えられる。いずれにしろ中世～近世にかけて石積みの竪穴状遺構の存在が各地で指摘されているおり，本遺跡の出土状況は，その性格を検討する上で大きな意味をもつものと思われる。

今回確認された集落址は，溝の配置などからかなりの規則性をもって，中世～近世という長期間にわたって営まれた点が指摘できる。しかしその性格については今後整理の中で同様な遺跡との比較検討が必要である。

なお調査では，玄照寺跡と直接結び付く遺構の存在は確認できなかったが，調査区の西寄りに遺構が集中している等の理由から，玄照寺跡はさらに西側の千曲川河川敷に存在する可能性が予想される。

3　清水山窯跡（しみづやま）

所　在　地：中野市大字立ケ花字清水山671－5　　調査担当者：鶴田典昭　越　修一
調 査 期 間：平成9月7日～同年12月17日　　藤沢高広
調 査 面 積：5,000m²
遺跡の立地：清水山の北斜面及び南斜面及び山麓
時代と時期：縄文時代（中期後半），奈良時代，江戸時代
遺跡の特徴：縄文時代の埋甕及び粘土採掘坑，奈良時代の須恵器窯跡など

主な検出遺構

遺構＼時期	窯跡	土坑	掘立柱建物	塚	その他
縄文		4			埋甕1，粘土採掘坑2
奈良	3	6	4		
江戸以降		6		3	
不明		1			

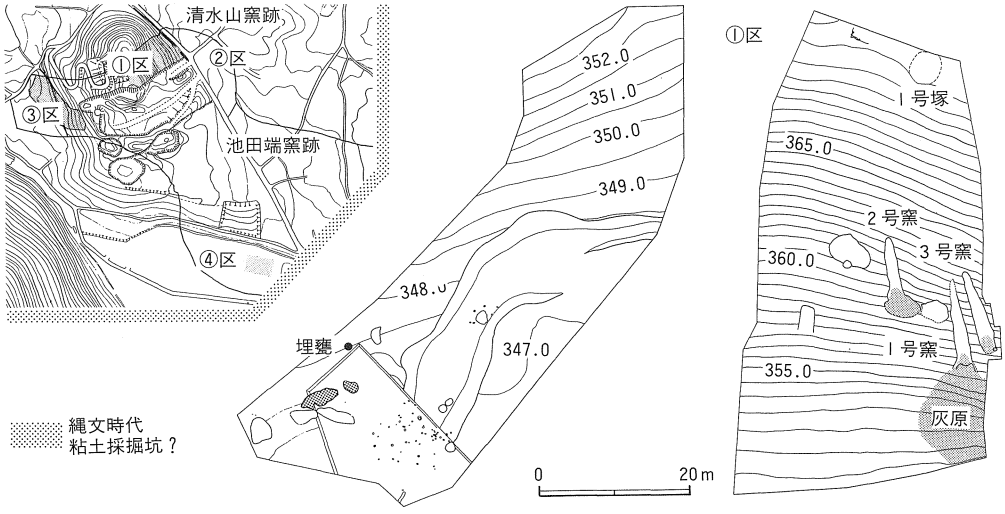
主な出土遺物

土器：埋甕（縄文中期），奈良時代須恵器，金属模倣須恵器，「井」・「高井？」・「佐玖郡」等，ヘラ・文字記号が付されているもの
石器：石鏃，打製石斧，磨製石斧，石皿，敲石，凹石，黒曜石片
その他：五輪塔，古銭

清水山は，高丘丘陵の南端に位置し，標高370mである。本遺跡は，上信越自動車道・中野インター建設地内にあり，「中野市遺跡地名表」によると既に登り窯が3基確認されている。

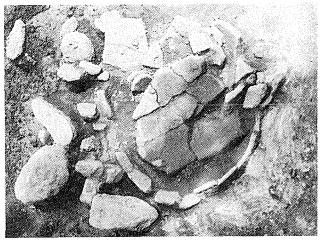
丘陵上からは，池田端窯跡，草間窯跡群，立ケ花表山窯跡が臨まれ，西方には千曲川が北流している。既にこの山は，約半分に当たる東側が削平されており，残存する南側半分も一部火薬庫設置のため削平されている。遺跡の調査範囲は，北西斜面（①区），北西の平地（②区），南斜面及び山麓（③区），清水山より北東に当たる低湿地（④区）である（第91図）。

低湿地　④区では遺構は見つからなかったが，泥炭層より出土した植物遺体中には，ダケカンバ等が見つかっている。^{14}Cによる各層の年代を測定する予定である。



第90図　清水山窯跡遺構配置図（1：1,000）

縄文時代　③区からのみ縄文時代の遺構が検出された。南斜面裾野で正位に埋められた，屋外の埋甕が１基，これより下方で，土坑が２基見つかった。土坑中からは縄文土器以外の遺物は検出されなかった。覆土は上層が堅い黒褐色の遺物包含層で，中層は黄褐色及び黒色の粘質土，下層は埋め戻したらしいシルト質の黄褐色と黒褐色の混じった土が堆積している。粘土採掘坑の可能性がある。

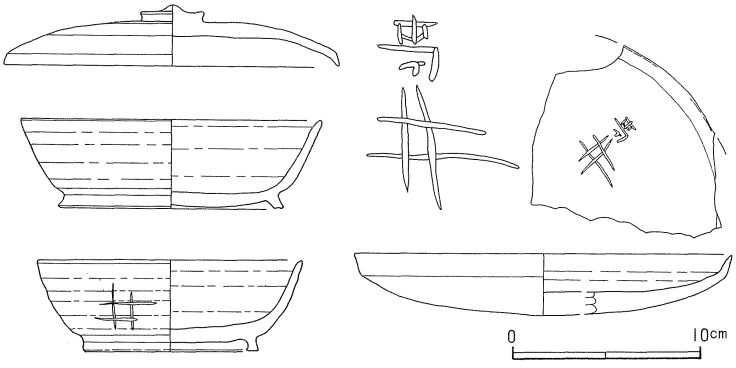


第91図　出土状況

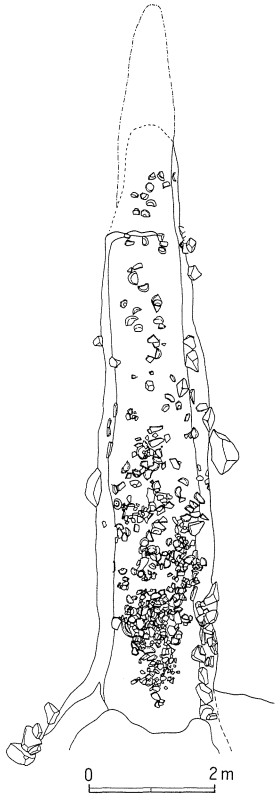
奈良時代　①区から須恵器を焼いた登り窯が３基，それに伴う灰原と土坑２基を検出した。この３基の窯は斜面の傾斜を利用した半地下式無段登り窯である。１号窯は全長11.6m，最大幅２m，焚口付近の南壁が，人頭大の礫で石積みされている。燃焼部に舟底状ピットがある。この窯は側壁の修復状況により４回以上操業したと考えられる。２号窯は，全長11.1m，最大幅1.8m，焚口付近の両壁が人頭大の礫で石積みされ，燃焼部が段になっている。その下段に舟底状ピットがあり，排水溝状の溝が斜面下方に延びている。この溝の上面は，須恵器大甕片が敷きつめられていた。２号窯は，側壁の修復から２回以上操業したと考えられる。３号窯は全長11.2m，最大幅2.1m，焚口よりも燃成部の南壁に，人頭大の礫や須恵器甕片が一列に組み込まれている。舟底状ピットがあり，燃焼部の床面数より３回以上操業したと考えられる。

出土した須恵器片の中から，ヘラ記号と思われる「井」や「＋」，文字と思われる「高井」？・「佐玖郡」が見つかっている。「井」印はすべての窯から出土し，今のところ１号窯からは78点見つかりそのうち１点が「高井」？である。「佐玖郡」は，灰原より出土し，１号窯で焼かれた可能性がたかい。１号窯からは盤が多く出土し，２号・３号窯とは焼いている器種に差がある。これらの窯は遺物や構造から奈良時代前半のもので，ほぼ同時期に営まれたと考えている。

江戸時代遺構　①区の山頂と北西斜面の山麓で塚が見つかり，集石の中より五輪塔が出土した。



第92図　１号窯出土遺物（１：４）



第94図　１号窯遺物出土状況（１：120）

4　池田端窯跡

所　在　地：中野市大字立ケ花字清水山裏378ほか　　調査担当者：鶴田典昭　赤塩　仁
調 査 期 間：平成３年４月６日～８月４日　　臼田広之　越　修一
調 査 面 積：16,000㎡　　中村敏生　林　正則
遺跡の立地：丘陵上の緩斜面から平坦部
時代と時期：縄文時代，弥生時代末期～古墳時代前期，奈良・平安時代
遺跡の特徴：奈良・平安時代の須恵器および瓦を生産した窯跡，粘土採掘坑ほか

主な検出遺構

時代＼遺構	竪穴住居跡	窯跡	土坑	溝	その他
縄文時代			11		
弥生時代末期～古墳時代前期	1				
奈良・平安時代		7	94	4	
不　明			3	9	自然流路

主な出土遺物

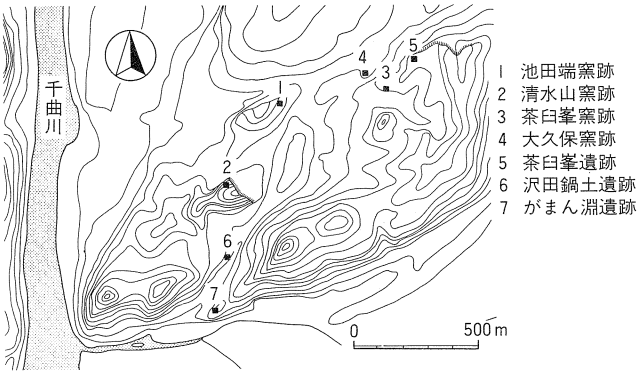
土器：縄文土器，土師器，須恵器，瓦

石器：石鏃，石皿，磨石，凹石，多孔石，砥石

遺跡の概要と調査経過

本遺跡は高丘丘陵上の南端に位置し，周辺には茶臼峯窯跡，大久保窯跡，清水山窯跡，沢田鍋土遺跡などの窯跡が集中している。また布目瓦が出土した片塩遺跡，安源寺遺跡，茶臼峯遺跡が分布している（第94図）。

池田端窯跡は，古くは『下高井』に報告されており，「中野市遺跡地名表」には，登窯２基があり，須恵器のほか布目瓦が多量に出土していると記されている。



第94図　池田端窯跡周辺の遺跡分布（1：30,000）

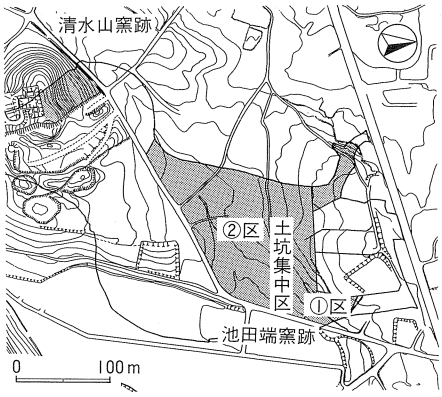
調査区内は，窯跡が集中する丘の中腹の①区，土坑が集中する緩斜面から平坦部の②区，住居跡が検出された小高い丘の頂部の③区の３つに大きく区分された（第96図）。

以下，調査の概要を時代別に記す。

縄文時代　②区に集中する土坑群の数基から，石鏃，石皿，磨石，凹石，多孔石などの石器や，縄文土器が数点出土している。土器は摩滅が著しく明言できないが，縄文中期と思われる隆帯をもった土器が確認された。また遺物を伴出していないが，覆土が明らかに他の土坑群のものと異なっている土坑が数基あり，これらは縄文時代の可能性がある。

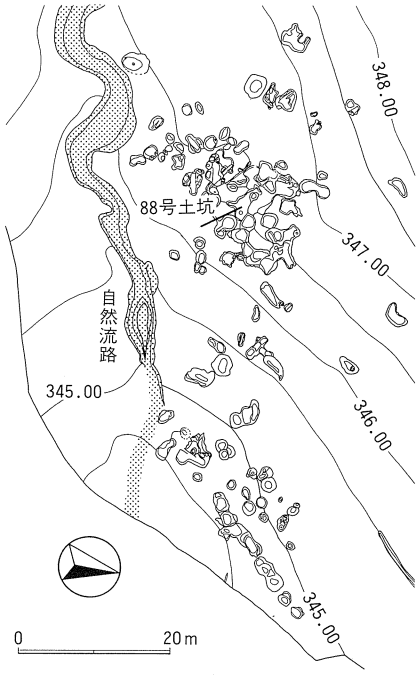
弥生時代末期～古墳時代前期　③区の丘陵頂部において１号住居跡が検出された。住居跡の南側の壁面は残っていなかったが，周溝の残存状況から4.6m×5.0mの隅円長方形を呈すると

考えられる。柱穴は検出されたが炉跡はなかった。周溝および柱穴の中から出土している土師器高坏脚部と甕から，弥生時代末期～古墳時代前期に相当するものと思われる。なお該期の遺構として，近くにがまん淵遺跡の住居跡や沢田鍋土遺跡の粘土採掘坑跡があげられる。また住居跡の周りには，長軸1m，短軸65cmを測る長楕円形の土坑が3基確認されたが，遺物を伴っておらず時期は不明である。

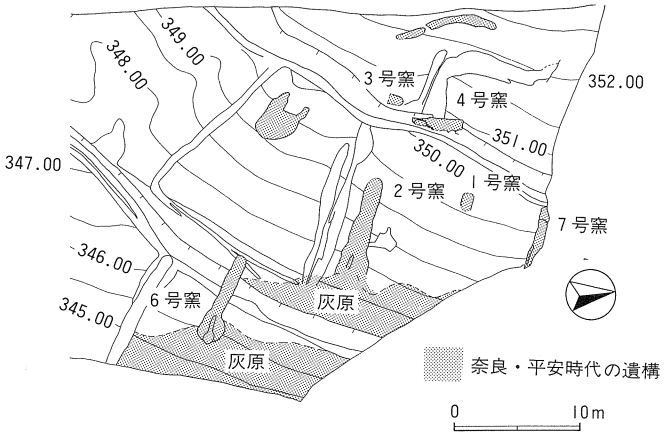


第95図　池田端窯跡調査区（1：600）

奈良・平安時代　①区の丘の中腹には，合計6基の窯跡（第97図）が確認された。1号窯は焼成部のみ残存し，伴出したヘラ切り底の坏，坏蓋から奈良時代前半と思われる。その他に高台付坏，甕が出土している。2号窯（第99図）は遺構の状態が非常に良好で須恵器を生産した窯を修復し，その後に瓦窯として使用していることが確認された。焼成部の床面より多量の布目瓦が出土しており，その出土状況と瓦が生焼け状態であることから，焼成途中で天井が崩落したものと思われる。また最後の焼成では，丸瓦を焼台として平瓦のみを焼いていることが判明した。瓦の他に坏，高台付坏，坏蓋，甕（布目痕があるものもある），長頸壺，横瓶が出土しており，奈良時代前半と思われる。瓦窯の操業が須恵器を焼いた時期と連続していたとすれば，瓦も同時代に焼かれたと考えられる。3号窯は火床面のみで遺物もなく，時期は不明である。4号窯は主軸が等高線に平行する平窯である。焚き口が2箇所以上あると考えられ，また煙道は瓦を使用して作られていた。その他に平瓦が出土しているが，窯の構築材として使用された可能性もあり，瓦窯とは断定できない。なお平瓦は2号窯のものと類似し，丸瓦も出土しているが，時期は不明である。5号窯だけは①区の窯跡群から西へ65mほど離れた，②区の緩

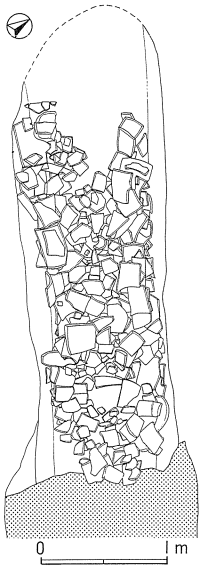


第96図　②区土坑集中区（1：1,000）



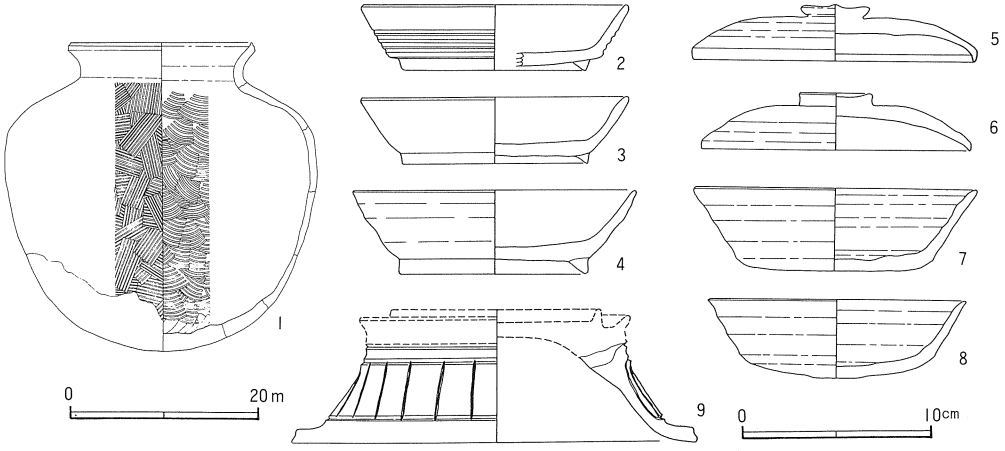
第97図　①区遺構配置図（1：600）

斜面の中腹に検出された。残存状態は悪く，焚き口部の舟底状ピットが残るのみであった。坏，高台付坏，坏蓋，甕が出土しており，奈良時代前半のものと思われる。6号窯は遺構の状態が比較的良好であった。坏，高台付坏，坏蓋，四耳壺，甕が出土しているが，床面より出土した遺物のほとんどが坏で，他は全て覆土中に流れ込んだものであり，時期は平安時代中頃と思われる。7号窯は北半分が削平され残っていなかったが，燃焼部に溝を掘り，その上に平瓦をかぶせた施設が確認された。また床面からは高台付坏と甕が，覆土からは坏，坏蓋，甕，四耳壺が出土しており，6号窯と同じく平安時代中頃と考えられる。以上7基の窯跡のうち3・5号窯は不明だが，2・6・7号窯は半地下式無段登窯で，4号窯は平窯である。あた灰原の遺物には円面硯が含まれる。



第98図　2号窯
瓦出土状況（1：60）

②区に集中して100基近い土坑（第96図）が検出された。土坑の形状や規模は様々であるが，いずれも粘土層を掘り込んでおり，そのなかには粘土層の下の粘性砂質土層までわずかに掘り込んでいる土坑も見られた。また覆土の黒褐色砂質土の中に，ブロック状あるいは帯状に粘土が見られる土坑が多い。以上の点や土坑群が池田端窯跡と清水山窯跡の間に立地していることから，これらの土坑は，粘土採掘を目的として掘られたものが多いと推測されるが，粘土の精製を目的とする粘土坑が存在する可能性もある。また坑底の直上から半完形の須恵器大甕，横瓶，長頸壺，四耳壺，坏や，長胴甕が出土した土坑や，底部の壁がオーバーハングした部分から，完形に近い土師器小型甕が出土した土坑もある。土坑から出土した遺物には，池田端窯跡，清水山窯跡から出土しているもの（第99図）より1段階前のものが含まれており，今回調査された窯跡と土坑群は，須恵器，瓦の一連の生産過程を示す遺構である可能性が高い。



第99図　池田端窯跡出土須恵器（1：88号土坑，2・3：2号窯跡，4・6：5号窯跡，5・7：8号窯跡，6：5号窯跡，7～8：1号窯跡，9：灰原，1：1／8，2～9 1／4）

志賀中野有料道路関連

5　栗林遺跡（くりばやし）

所　在　地：中野市大字栗林字清水尻394
　　字山下746番地ほか

調査担当者：岡村秀雄　渡辺敏泰　斎藤久美
　　中島庄一　奥原　聡　藤沢高広

調査期間：平成4年4月1日～同年12月18日　　調査面積：26,150㎡

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防と連続する後背低地並びに更新世の段丘面上

時代と時期：縄文時代前・中・後期，弥生時代中・後期，古墳時代前期，平安時代，中・近世

遺跡の特徴：縄文時代後期，弥生時代中期～中世以降の居住域・生産域

主な検出遺構

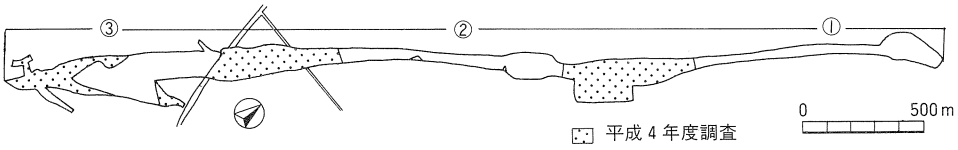
遺構／時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	溝	集石	そ　の　他
縄　文	炉跡2		39		2	板囲い遺構1，自然流路1，ピット多数
弥　生	25	9	15	1		柵列2，自然流路2，ピット多数
古　墳	11					
平　安	5		4	4		土師器焼成遺構1
中　世				3		水田水路，ピット多数
近　世						ピット多数
不　明			12			ピット多数

主な検出遺物

土器・土製品：縄文前・中・後期土器，弥生中・後期土器，土師器，須恵器，中・近世陶磁器
　　耳栓，錘，土偶，土製円盤，棒状土製品，ミニチュア土器他

石器・石製品：石鏃，石錐，石匙，スクレイパー，ピエス・エスキーユ，石核，打製石斧，磨
　　製石斧，敲石，磨石，石皿，台石，多孔石，砥石，石錘，石棒，抉状耳飾り，
　　円製円盤，石包丁，片刃石斧，蛤刃石斧，環状石斧，磨製石鏃，管玉

そ　の　他：八稜鏡，鉄斧，銭貨，構築材，トチ，クルミ，ドングリ類



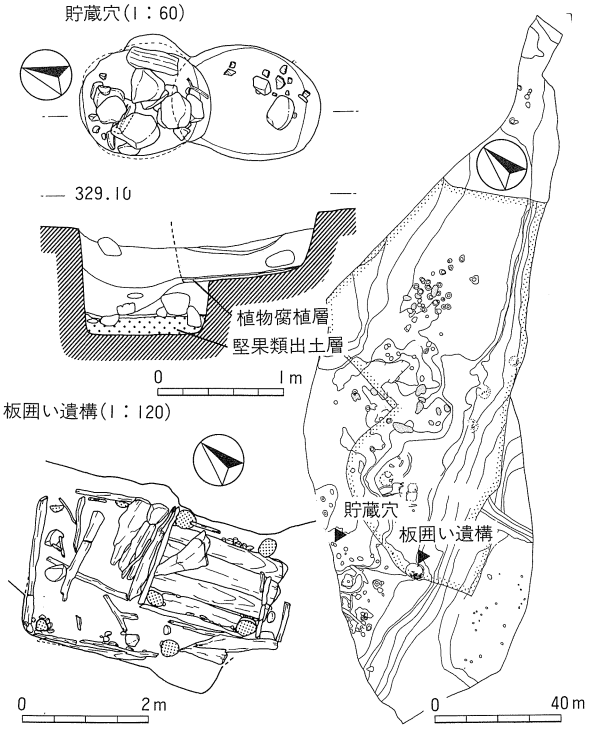
第100図　栗林遺跡の調査範囲（1：12,500）

調査の概要　栗林遺跡の調査は前年度に引き続き実施され，②・③区の残り26,150㎡を調査した。前年度の調査成果から③区の段丘面に竪穴住居跡が広がると予想されたが，わずかに炉跡が2つ検出されたのみであった。しかし縄文中・後期の土器を多量に含む自然流路が段丘面で検出されており，調査区外にも集落址が存在することが推測される。一方低地部で今回も貯蔵穴が確認され更に東西に分布が広がることが分かった。②区は自然堤防上の南地区と段丘上に張り出した小扇状地の末端部の北地区に分けて調査した。前者では弥生中期の掘立柱建物跡・井戸状土坑等が検出され，後者では主に弥生中期と古墳前期の住居跡が検出された。

③区の主な遺構と遺物

縄文時代後期の貯蔵穴と水晒し場

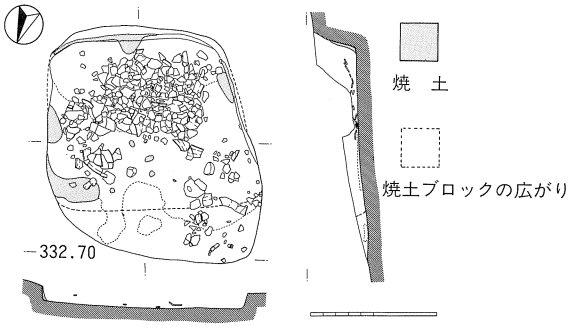
貯蔵穴は低地部の他に微高地上とテラス段の縁およびテラス上でも検出された。これらの立地のやや異なるものも様相に大きな違いはないが，機能の異なるものを含む可能性があろう。貯蔵穴の形状は昨年と違うものに楕円形，断面フラスコ状のものがあった。貯蔵穴からアク抜きが必要なドングリ類やトチの実が確認されたことは昨年トチの実が確認された板囲い遺構との関連を考える上で注目される。この貯蔵穴の覆土の一部からエゾカタバミ・オナモミ・リョクトウ？等の種子やエンマムシ等の昆虫が確認された。蓋などの貯蔵用具と思われる木片も出土している。また完形の注口土器などを出土するものがあり，貯蔵穴の二次的利用を示す可能性がある。昨年度の板囲い遺構の西側では，昨年に続くように丸木の杭が２本側板と思われる板材が５枚あり，２本の杭を支えるように石が詰められていた。この遺構の範囲は昨年と合わせて南北方向に５ｍ東西方向に３ｍの長方形を呈す。昨年度分との切り合いや作り替えているような形跡はなく，一連のものであると考えられる。今回も出土遺物は少なく蜂の巣石などの石器が僅かに認められただけである。今回の調査でこの遺構が地面を掘り込んで作られていることが判明したことは注目される。今後住居と貯蔵穴と板囲いの遺構の相互の関連について考え，採集した貯蔵穴の覆土の分析により食物加工過程や古環境の復元をすすめたい。



第101図　③区遺構配置図

平安時代の土師器焼成遺構

今回③区の段丘斜面上に全国的にも約20例しか発見されていない土師器焼成遺構が検出された。平面形は方形で長軸が２ｍ・短軸1.4m，断面形は皿形で深さは10cm，底面は平坦である。底面から南壁の一部にかけて焼土化している。類例として奈良時代のものだが埼玉県加須市水深遺跡の土師器焼成遺構などがあげられる。



第102図　土師器焼成遺構（1：60）

②区（南地区）の主な遺構と遺物

南地区で検出された遺構は弥生時代中期の竪穴

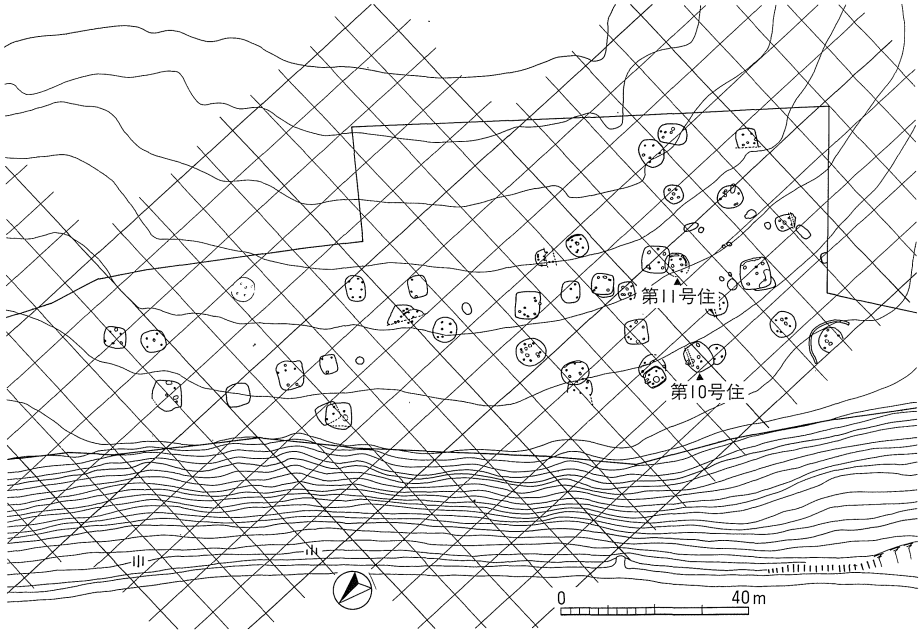
住居跡１軒，掘建柱建物跡９軒，井戸状土坑８基である。竪穴住居は円形で管玉が出土している。この住居を取り囲むように掘建柱建物群が展開している。井戸状土坑は昨年も②区の南端で３基検出されている。井戸状土坑の形状は昨年と同様で平面形状は１～1.5mの円形，断面形状はスリバチ状を呈す。深さは１m位のものが多く中には1.4mと深いものもある。遺物の出土状況は底部にほぼ完形の壺が出土しているものと検出面から大量の土器片が入っていて底部には殆どないものの２つに分かれる。この土坑の機能が周囲の建物群とどのように関わるものか，さらに県史跡指定地の中期集落の外縁部にあたるこれらの遺構群が集落構造の中でどのような位置を占めるものか注目される。

②区（北地区）の主な遺構と遺物

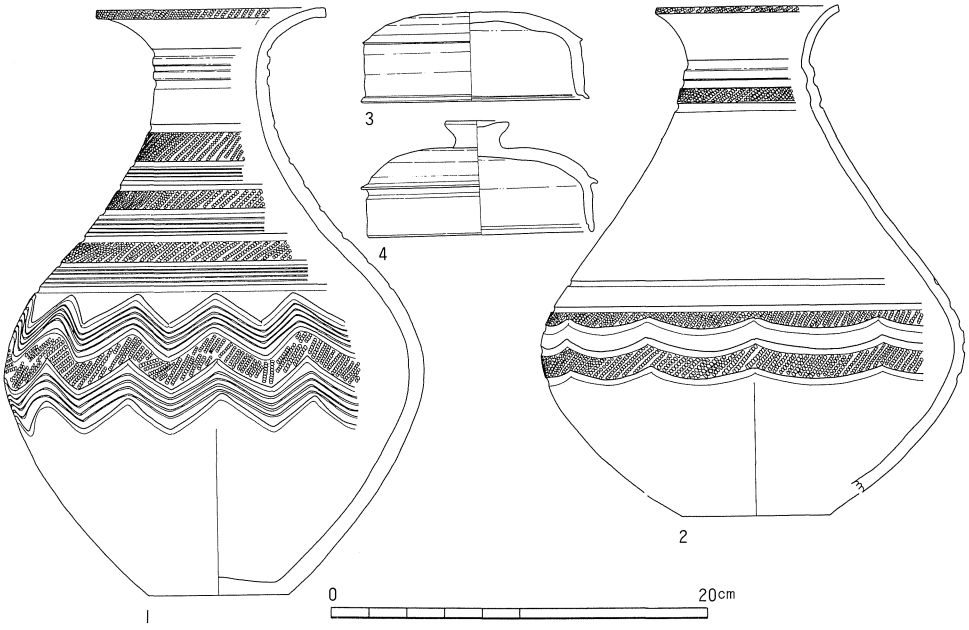
弥生時代　竪穴住居跡は栗林式期のものが大半で，23軒を数える。円形のものが14軒で，一辺４～６m前後ものが多い。炉をもたないものが５軒あり，他はすべて地床炉である。住居の切り合い関係もなく，調査区のほぼ全域に点在するように分布する。県史跡の栗林遺跡とは同一段丘面上に位置するが，北地区との間には遺構の検出されない地区があり，別集落と考えられる。土坑墓が４基検出されているが，いずれも居住域内である。２～３m×1.5m前後の楕円形のものが３基，径２mの円形のものが１基，深さはいずれも20cm前後で，床面は平坦である。

第11号住居跡からは６個の壺形土器が一括して出土した。こうした出土状況を示すのは，この住居跡のみであり，栗林式土器の良好な一括資料である。胴部最大径が高い位置にあり，胴部上半に文様が多い。他に注目されるものとして偏平刃石斧に装着痕を残すものがある。

古墳時代　竪穴住居跡は12軒あり，そのうち北カマドを有するものが３軒ある。第20号住居跡は５m×５mの方形であり，北壁の掘りこむようにカマドが設置され，そこに甕２個が並列し



第103図　遺構配置図（１：1,600）



第104図　出土土器（1：4）

て架けられていた。右袖には完形の甕が一つ正立して，左袖には坏4枚が重なって出土した。使用時の配置を示すものと思われる。焼失家屋以外の出土状況として注目される。また第10号住居跡からは5世紀末から6世紀初頭と考えられる，須恵器の坏蓋と高坏蓋が各1点出土している。製作技法や焼成状態から地元産の可能性がある。この地域ではいまのところ最古の松ノ山古窯跡などとの関係，7世紀以降の窯しか確認されていない近隣の窯跡群に未発見の古式須恵器窯が存在する可能性が注目されるところである。

平安時代　竪穴住居跡は3軒で，第49号住居跡からは八稜鏡が出土した。径7㎝，厚さ約2㎝である。鋳上がり状態は余りよくないが，銅質はかなり良い。床面より約6㎝程の覆土中から表を上にした状態で出土したが，埋設遺構などは確認できなかった。付近からは，付高台の内面黒色を呈する完形の椀一点の他，高台を有する土師器片が数点出土している。また第48号住居跡の西隣約1m離れた地点から袋状鉄斧が出土した。長さ10㎝強，幅は刃部で3㎝強，厚さは刃部で1㎝弱である。残存状態は比較的良好である。周辺は，焼土と木片を大量に包含した土で，栗林期と平安期の土器片が散布していた。またこの住居跡に隣接して大量の土器が集中する地点がある。遺構としては確認できなかったが，径90㎝ほどの範囲で，平安期の甕，高坏などの土器が意図的に押し込められたような状態で出土した。

まとめ　北地区の調査で，検出された弥生時代中期の集落は県史跡指定地の集落と存続期間が重複する可能性が大きく，集落構造や栗林式土器の編年や地域性を考える上で貴重な資料となるであろう。

II　普及・公開活動の概要

1．現地説明会・速報展

(1)　中野調査事務所

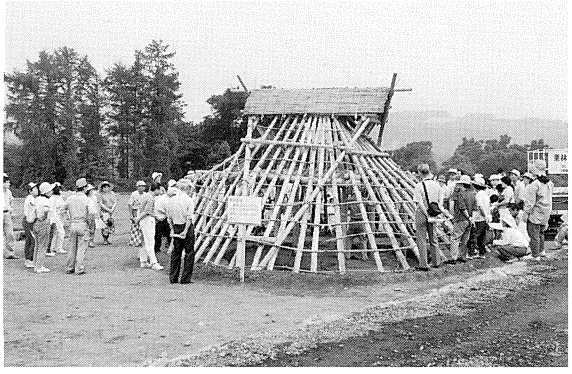
ア　池田端窯跡（中野市立ケ花）

平成４年５月17日（日）の現地説明会は，前日の雨もあがり地元の方々を中心に，242名の見学者が訪れた。主な内容は，奈良・平安時代に瓦や須恵器を焼いた登り窯，約50ほどの粘土採掘坑，古墳時代の住居址を中心とするものであった。

特に瓦を焼いた窯跡では，見学者から具体的な質問が多く興味・関心が高かった。また，粘土採掘坑では出土遺物や地層断面の詳しい説明がなされた。現場事務所では，窯から出土した布目瓦や須恵器（坏・横瓶・甕・他）・土師器甕などの展示が興味をひいていた。

イ　栗林遺跡（中野市栗林）

北地区の説明会は，平成４年７月５日（日）晴天のもとで行われ，420名もの見学者が訪れた。ここでは，弥生・古墳・平安時代の住居址を中心に公開し，展示物は，弥生時代の栗林式土器を中心に，八稜鏡や石斧・鉄斧などがあった。さらに今回初めて，弥生時代の住居を復元したり，体験コーナーを設け，土器造りと土器焼きを行った。また，カマドの煮炊きも実演した。



第105図　栗林遺跡北地区復元住居

参加者からは，いろいろな体験ができ，たいへんよかったという声が多かった。今後このような催しを，現地説明会に企画することも一つの方法ではないだろうか。

南地区の説明会は，平成４年９月20日（日）曇り時々小雨の中で，地元の方々を中心に90名の見学者が訪れた。主な内容は，縄文時代の貯蔵穴や木の実の加工処理施設，弥生時代以降の湧水利用に伴う石敷き施設，そして平安時代の住居址と土師器の焼成坑などを公開した。展示は，縄文・弥生・平安時代を中心とした生活用具（土器・石器）や自然遺物（クルミ・トチ・葉）が並び，トチの実の加工処理過程を実演した。また，貯蔵穴の土層転写や昨年度の「水さらし場」状遺構の木製品も展示し，食生活を通じて，縄文時代の生活がわかりやすかったという御意見をいただいた。

ウ　飯田古屋敷・玄照寺跡遺跡（上高井郡小布施町飯田）

平成４年10月25日（日）の現地説明会は，好天に恵まれ，この地域での当センター初年度の調査事業であるにもかかわらず，地元の方々を中心に206名の見学者が訪れた。この遺跡は，

千曲川堤防のすぐ東に所在し，堤防を挾んだ西側には千曲川が北流する。調査区の北側が玄照寺跡で，古い沢を挾んで南側が飯田古屋敷遺跡である。飯田古屋敷遺跡では，自然流路の底に葦などの植物遺体が一面に出土し，また五輪塔や陶器片も出土した。低湿地から出土した江戸時代の家紋入り漆椀等を展示した。一方玄照寺跡では，東西・南北に走る溝，遺跡全体に広がる多数のピットと何軒かの掘立柱建物址，石組井戸，集石遺構，火葬施設，五輪塔を公開し，遺物は，内耳鍋・陶磁器片・古銭・石臼・石鉢・五輪塔・宝篋印塔を展示した。現場事務所では展示室の他に，一室ではスライドを上映して，調査過程を平易に紹介した。地元の方々の鋭い質問に，この遺跡に対する愛着心を感じた。

エ　清水山窯跡（中野市立ケ花）

平成４年度11月15日（日）の現地説明会は，晩秋の肌寒い中，中野インター予定地の工事が着々と進み周辺の景観が変貌するなかで，地元の方を中心に61名の見学者が訪れた。

第106図　清水山古窯遺跡現地説明会

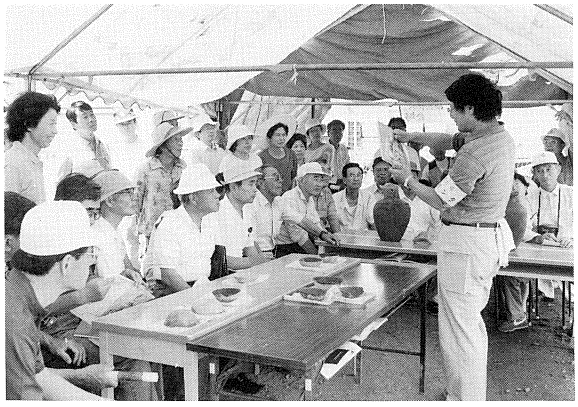
公開は調査対象区域のうち，窯跡群が存在する清水山北西斜面とし，奈良時代の須恵器を焼いた登り窯，それに伴う灰原，山頂の塚，土坑を説明した。これらの窯の特徴は、窯壁が石で組み合わされていることである。展示物は，杯・杯蓋・盤・甕・横瓶・長頸壺・短頸壺等の須恵器を中心に，縄文時代の埋甕や石器・土器片，五輪塔，窯体等である。特に，文字や記号が書かれた須恵器片が注目を集めた。

(2)　長野調査事務所

ア　更埴条里遺跡（更埴市屋代）

平成４年７月19日（日），晴天の中，昨年同様屋代遺跡とあわせて現地説明会がおこなわれ，地元の方々を中心に約140名の見学者が集まった。この説明会の前日に，現場に来られている数百人にのぼる作業員さんへの説明がおこなわれたということで，この140名のほとんどが関係者以外の見学者であったことには驚かされた。

今回の説明会の中心は水田ではなく，水田域に隣接する平安時代の集落であり，これまでの水田調査とあわせて，平安時代における当地域の土地利用を理解する上で，重要な説明会となったといえよう。



第107図　屋代遺跡群説明会風景

イ　屋代遺跡（更埴市屋代）

平成４年７月19日（日），昨年同様，屋代遺跡とあわせて現地説明会がおこなわれ，地元の方々を中心に155名の見学者が訪れた。更埴条里遺跡同様，前日に関係者への説明会がおこなれたことからすると，その関心の高さには驚かされる。

今回の中心は平安時代の礎石建物跡や平安時代の遺物であった。プレハブ内でおこなわれた遺物展示会場では，担当する調査研究員の熱の入る説明に誘われてか，展示資料に対する熱心な質問が多く出された。

ウ　千見遺跡（北安曇郡美麻村千見）

平成４年８月１日（土），週休二日制になった初めての土曜日に現地説明会がおこなわれた。広い村内より800㎡という狭い調査区に70名という見学者が集まった。発掘調査を初めて目にする人が多く，現地説明会以外の日も村内の小・中学校の見学会などもおこなわれた。

第108図　千見遺跡での説明会

エ　清水製鉄遺跡（更埴市森）

平成４年９月13日（日），残暑きびしい中，熱心な見学者が約250名ほど集まった。これまでの遺跡の性格とちがい，古代の製鉄遺跡ということで，県内外遠方から来られた方々も多かったようである。

現地説明会会場は山の斜面で非常に足場の悪いところであったが，いくつかのグループにわかれ順を追って見学をおこなったが，これまでにないめずらしい遺跡ということで，見学者より多くの質問が出された。

オ　榎田遺跡（長野市若穂）

平成４年10月４日（日），今年の現地説明会をしめくくるがごとく約420名もの見学者が訪れた。新聞等で出土した多くのめずらしい木製品の報道があったことも助けてか，榎田遺跡に対する関心の高さがうかがえた。調査現場での見学もさることながら，プレハブ内での展示品にもたいへんな関心が寄せられ，現地説明会は盛況に終わった。

カ　JA篠ノ井展示会

平成４年11月14日（土）・15日（日）の２日間，JA篠ノ井農協祭において，一室を展示スペースとして，篠ノ井塩崎地区の各遺跡の展示会がおこなわれた。２日間で500名以上の見学者が訪れ，見学者からは，「展示会が開催されていることは知らなかったが，農協祭に来て展示会が見学できてよかった」という声が多く聞こえてきた。

キ　JA若穂展示会

平成４年11月21日（土）・22日（日）の２日間，JA若穂農協祭において，榎田遺跡の資料を中心に，こじんまりとした展示スペースでの展示会がおこなわれ，約100名の見学者があった。

以上のような展示会も，現地説明会同様，力を入れていきたいものである。地元の方々を中

心に一人でも多くの方々に発掘調査の成果，そして埋蔵文化財センターの業務を理解していただくことが重要であるろうと考える。

ク　平成４年度調査速報展

平成４年２月６日（土）から14日（日）の実質７日間，長野市立博物館特別展示室にておこなわれた。各調査班の協力を得て，清水製鉄遺跡・更埴条里遺跡・屋代遺跡群・小滝遺跡・春山Ｂ遺跡・前山田遺跡・榎田遺跡・千見遺跡の計８遺跡より500点以上にのぼる資料が出展された。雪や雨の日が多かったが1,900名（小学生未満は含まず）ほどの来館者となり盛況に終わった。

第109図　ＪＡ篠ノ井展示会

２月７日（日）の展示会説明会には多くの方々が来られ，会場に入りきれない状況ともなり，廊下にいすを並べて聴いていただくこととともなった。

また，今回好評だったのは，各発掘現場の調査風景を中心に27分間にまとめられたビデオ放映で，多くの方々が27分間じっと見入っている状況にはたいへん驚かされた。

第110図　平成４年度調査速報展

来年度以降も一人でも多くの方々に関心を持っていただけるよう努力してゆきたい。

(3)　上田調査事務所

中原遺跡（小県郡東部町和字中原）

平成４年８月２日（日）　晴天のもと，中原遺跡のプレハブ前を集合場所にして現地説明会が行われ，地元の方々を中心に108名（午前90名，午後18名）の見学者が訪れた。

説明会場までは，約５分ほど歩かねばならなかったが，地元の遺跡ということで興味・関心の高い人々が多く，見学に訪れた人々からは，住居址や出土遺物に対して「時代はいつごろか？」・「どのように使ったのか？」等の質問が出され，調査研究員の説明に熱心に耳を傾けていた。

また，現場のプレハブでは，出土遺物品の展示説明会が行われ，諸磯ｃ・加曽利Ｅ式土器を見て，その造形美の素晴らしさに驚きの声を上げていた。また，墨書土器についても，「この時代に文字があったのか」と感心する姿も見られ，有意義な現地説明会となった。

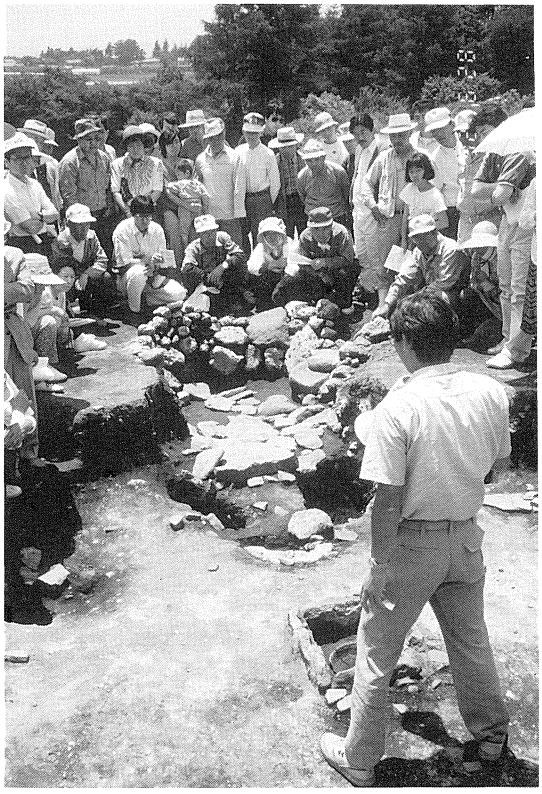
なお，７月から10月にかけて，東部町町会議員（文教委員）を始め，和小学校・武石小学校・城下小学校の皆さんが見学に訪れ，実際に掘り出された土器や石器を目の当たりにして，目を輝かせている子供たちの姿が大変印象的であった。

第111図　中原遺跡現地説明会

(4)　佐久調査事務所

ア　三田原遺跡群，三子塚遺跡群

６月28日（日），今年度初めての現地説明会として三子塚遺跡の現場プレハブを集合場所に２遺跡合同で開催した。当日は天候にも恵まれ，また新聞で階段状の石積を持つ柄鏡形敷石住居跡が大々的に報道されたこともあり，午前中のみの開催にもかかわらず160名の見学者をみた。とりわけ地元の方の関心の高さが感じられ，盛況のうちに終了した。



第112図　三田原遺跡群現地説明会

イ　芝宮遺跡群（佐久市）

８月２日（日）に開催した。当日は８月にしてはやや肌寒い悪天候であったが，計60名の見学者があった。県内２例目の海獣葡萄鏡や銀メッキの施された馬具，墨書土器等に高い関心が寄せられていた。なお，今回は現地説明会用の遺物展示ケースを製作したが大変好評であった。今後も有意義に利用していきたいと考えている。

ウ　金井城跡（佐久市）

９月26日（土）に開催した。午前・午後２回にわたり説明を行い，計100名の見学者を数えた。当日は中世の竪穴建物や掘立建物等を現地に復元するなど，当時の生活を理解してもらうための工夫を凝らした。見学者には中世城郭に関心をもつ方が多く，鋭い質問が飛びかう説明会であった。また，本遺跡は工場団地の中に位置するため，周辺の工場で働く方にも見学してもらおうとの趣旨で，28日（月），29日（火）の両日にも昼休みを利用して説明会を開いた。突然の計画ではあったが計

48名もの見学者をみた。このような試みは初めてのことであったが，現地説明会のひとつのありかたとして今後も考慮すべき点であろう。

エ　郷土遺跡（小諸市）

予想以上の成果がみられた郷土遺跡では，遺物の出土状況や発掘調査を生のままで見てもらおうと11月24日（火），25日（水）の両日に説明会をもった。平日でありしかも宣伝不足であったため参加者数に若干の不安があったが，計280名もの見学者が訪れた。従来の説明会とはやや趣の異なるものとなったが，おおむね好評であった。中でも地元坂の上小学校５年生86名の社会科授業の一環としての見学は平日ならではのことであり，児童の素朴かつ鋭い質問が相次ぎ，説明にあたった職員をたじろがせる一幕もみられた。今後も現地説明会などを含めて，学校教育への普及公開活動を行っていくことも重要な意義をもつものと考える。

オ　土合遺跡（浅科村）

土合遺跡は，浅科村教育委員会によっても新幹線用地に隣接する地点の試掘調査が行われたため，本事務所にて実施した新幹線用地内の発掘調査の成果とも合わせて，村教委との共催という形で現地説明会を12月17日（木）に開催した。平日で，しかも午後１回のみの説明会ではあったが，地元の方を中心として計50名の見学者を数えることができた。浅科村での現地説明会は本事務所では初めての開催であったが，地元の方の関心の深さが実感された。

市町村教育委員会との共催は初めてのことでだったが，このようなスタイルの現地説明会の必要性は今後も増えていくかもしれない。

２．指導，研究会，学習会

期　　日	講　　師	指導内容ほか
平成4．4．26	奈良国立文化財研究所　佐原真 埋蔵文化センター長	下茂内遺跡出土の石器について
5．25	奈良国立文化財研究所　松井章他2名	下茂内遺跡出土の石器について
5．25 ～ 5．26	千葉県風土記資料館　穴沢義功研究員 横浜市立埋蔵文化センター　石井寛調査研究員	製鉄遺跡の調査方法について 北村遺跡の配石遺構について
6．2	京都大学原子炉実験所　藁科哲夫教授	下茂内遺跡出土石器の石材について
7．7	森嶋稔理事	三田原遺跡の調査法他について
7．25	文化庁宮本長二郎主任文化財調査官	屋代遺跡の建物跡の建物跡について
8．19	筑波大学　岩崎卓也教授	屋代遺跡他の調査法について
9．3	三重県立埋蔵文化センター　穂積氏	吹付遺跡出土土器について
9．4 ～ 9．5	広島大学文学部　潮見浩学部長 広島県教育委員会　松井和幸文化財保護主事	清水製鉄遺跡の調査法について 飯田古屋敷遺跡周辺の歴史的環境について
9．9	中野市文化財審議委員　湯本軍一	
9．11	独協医科大学　茂原信生助教授	北村遺跡出土の人骨について
9．21	奈良国立文化財研究所　松沢亜生考古計画研究室長	下茂内遺跡出土の石器について

期　　日	講　　師	指導内容ほか
10. 5. 6	富山大学理学部　広岡公夫教授	清水製鉄跡の分析について
11. 5	保谷市都築美恵子氏	敷石住居跡の調査法について
11. 3	独協医科大学　茂原信生助教授	縄文時代遺跡出土の人骨について
11. 20	富山大学理学部　広岡公夫教授	清水山窪跡の熱残留磁気について
平成5. 2. 18	愛知大学　加納俊介講師，愛知県埋文セ	七瀬遺跡出土の土器について
～2. 19	ンター　赤塚次郎研究員	
3. 8. 9	新潟県教育委員会　坂井秀弥氏他	七瀬遺跡出土の土器について
3.11.12	奈良国立文化研究所　工楽善通室長	
	国立光州博物館趙現鐘	水田・木器の調査法について

3．刊行物

「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘報告書－明科町（北村遺跡）」

「長野県埋蔵文化財センター年報９」（1992年度）

「長野県埋蔵文化財ニュース」36～38

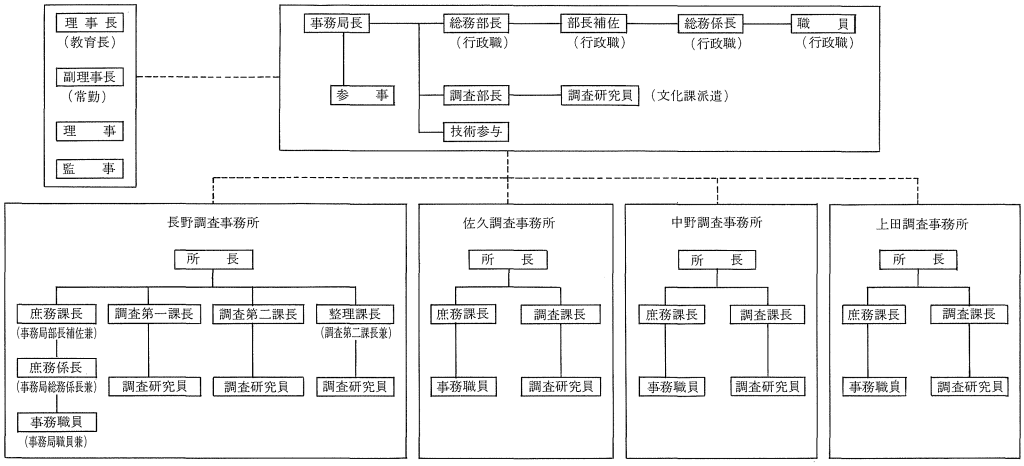
III　機構・事業の概要

1．機　構

(1)　組織

【理事会】	理事長(県教育長) 副理事長(常勤) 理事(県企画局長) 理事(県高速道局長)	理事(県北陸新幹線局長) 理事(県教委文化課長) 理事(県考古学会長) 理事(市町村長代表)	理事(市町村教育長代表) 理事(考古学研究者代表) 監事(県会計局会計課長) 監事(県教委総務課長)

(財)長野県埋蔵文化財センター組織図



(2)　事務所所在地

本　　部　　長野市大字南長野字幅下692－2　長野県教育委員会事務局文化課内

事　務　局　　長野市篠ノ井布施高田字佃963－4　㈶長野埋蔵文化財センター長野調査事務所内

長野調査事務所　　長野市篠ノ井布施高田字佃963－4

中野調査事務所　　中野市大字立ケ原字西原55－1

佐久調査事務所　　佐久市大字安原字蛇塚1367

上田調査事務所　　上田市大字下塩尻936－3

2．事　業

(1)　理事会および会計監査

理事会

○第24回理事会　平成4年5月29日　会場　長野市　篠ノ井農協会館

第１号議案　平成３年度事業報告書について

第２号議案　平成３年度決算報告書について

○第25回理事会　平成５年３月29日　会場　長野市　山王共済会館

第１号議案　平成５年度事業計画書（案）について

第２号議案　平成５年度収支予算書（案）について

第３号議案　平成４年度収支補正予算書（案）について

会計監査

平成４年５月22日実施　　平成３年度事業報告書および収支決算書について

(2)　調査事業

長野自動車道および上信越自動車道にかかる埋蔵文化財発掘調査－長野県教育委員会および長野市，小諸市，佐久市，長野県須坂建設事務所からの委託，志賀中野有料道路にかかる発掘調査および県道大町バイパスにかかる発掘調査－長野県中野建設事務所，長野県道路公社および長野県大町建設事務所からの委託他。北陸新幹線にかかる埋蔵文化財発掘調査－長野県教育委員会からの委託。

ア　調査遺跡および面積

○ 上信越自動車道関係　佐久市・小諸市・東部町・坂城町・更埴市・長野市・小布施町・中野市各地域内30遺跡，230,550㎡（7,435㎡）

○ 志賀中野有料道路関係　中野市内１遺跡，26,150㎡

○ 県道大町バイハス関係　美麻村内１遺跡，800㎡

○ 北陸新幹線関係　佐久市・浅科村・上田市・坂城市・長野市内５遺跡23,200㎡

イ　整理事業

○ 長野自動車道関係　明科町・麻績村・坂北村・長野市および更埴市の14遺跡の整理事業

○ 上信越自動車道関係　佐久市・小諸市・東部町・坂城町・更埴市・長野市・小布施町・中野市内30遺跡の整理作業

○ 北陸自動車道関係　５遺跡の整理作業

(3)　事業費

長野自動車道関係	154,711千円
上信越自動車道関係	2,655,948千円
北陸新幹線関係	96,469千円
県道関係	245,651千円

(4)　普及活動（94ページ参照）

(5)　長期青年招聘事業

ベトナム人研修生グエン・テ・フン（ベトナム文化・情報・スポーツ省文化財保存局研究員）

平成４年１０月５日（日）～平成５年３月５日（金）

(6) 職員研修

ア　講師招へい及び来所による指導・講習会等（99ページ参照）

イ　奈良国立文化財研究所関係

期　日	日　数	課　程	参　加　者
平成4．5．12～5．22	11	遺跡探査課程	廣　田　和　穂
〃		〃	桜　井　秀　雄
5．28～6．19	23	環境考古課程	西　　香　子
7．1～8．7	38	一般課程	斎　藤　久　美
10．13～10．30	18	文化財写真課程	西　嶋　　力
平成5．2．4～2．9	6	木器調査課程	臼　居　直　之
2．16～2．19	4	有機質遺物応急処理課程	白　沢　勝　彦

ウ　海外研修

期　日	内　　容	参加者
平成5． 2．22～ 3．1	我国古代文化の源流となった中国の古代文化遺跡の研究 ①遺跡・博物館等の見学 万里の長城，明の十三陵，中国歴史博物館， 故宮博物院，中国美術博物館，慈恩寺大雁塔， 秦始皇帝陵，兵馬俑坑博物館，上海博物館 ②歴史的環境の視察 北京，西安市，桂林市，上海市等の市街及び近郊 ③研究者等との懇談会 西安市他	伊藤友久 吉沢信幸 中村敏生 岡村秀雄

エ　その他の学会関係研究会・研修会

期　日	内　　容
平成4．5．31	日本文化財学会（東京都）2名
8．1～8．3	第9回全国城郭研究者セミナー（静岡市）1名
8．30	三重の縄文時代研究集会　（三重県）
9．19～9．20	シンポジューム「古代の土器研究―律令的土器様式の西，東」（奈良市）2名
10．23～10．24	第3回「考古学と中世史研究」シンポジューム（山梨県）2名
平成5．2．13～2．14	第6回縄文セミナー「縄文前期終末の諸様相」（群馬県）3名
3．6～3．7	第2回東日本埋蔵文化財研究会（群馬県）2名
	※この他，シンポジューム，日本考古学協会，長野県考古学会等の大会等への参加多数

オ　県埋蔵文化財施設・遺跡等視察および資料調査

期　日	視　察　・　調　査　他	参加者
平成５．２．22～２．24	下茂内遺跡にかかる資料収集，資料保管（東京，神奈川）	１名
この他，他県埋文センター，博物館，大学等研究施設，調査現場の視察，資料の調査を行なった。延べ17か所，23名。		

カ　全埋文協などへの参加

期　日	会　議　名	開催地	参　加　者
平成４．４．23	全埋文協関東・中部ブロック会議	東京都	伊藤万寿雄 峯村忠司
６．18～19	全埋文協総会	広島市	伊藤万寿雄 神林幹生 小林秀夫 山嵜今朝寛
10．29～30	全埋文協　関東・中部ブロック会議	富山市	神林幹生 百瀬長秀 広瀬昭弘
９．17～18	全埋文協研修会	伊香保町	羽入田博行 青島重子 土屋　積
９．10～11	関越自動車道関係四県連絡会議	村上市	佐藤今雄 関　孝一 堀内規矩雄 臼田武正
10．22～23	関東甲信越静埋文行政担当者会議	大島町	高野幹郎 栗林高広 古川英治
11．５～６	関東甲信越静埋文行政担当者共同研修協議会	箱根町	原　明芳

キ　長野県教育センター・産業教育センター研修

期　日	学校別	分　野	講　座　名	参　加　者
教育センター（※印　企画研修・△印　公開講座）				
平成４．５．21～５．22	一般	社　会	追求力をつける社会科の授業	林　正則
７．21	一般	生活科		伊藤克己
11．19～11．20	一般	教育機器	ビデオの効果的な活用法	宮下裕治
６．16	※	理　科	身近な自然観察	岡村秀雄
６．23	※	教育相談	自然出立・学校教育と教師の父性	越　修一

6．23		教職相談	自然出立・学校教育と教師の父性	甲田圭吾
7．10	※	教職教養	地球にやさしい環境	奥原　聡
〃	〃	〃	〃	大和龍一
〃	〃	〃	〃	本田　真
〃	〃		〃	澤谷昌英
7．17	※	〃	哲学への道	黒岩　隆
9．30	※	〃	子どもが分かっていく過程	奥原　聡
10．23	※	〃		月原隆爾
10．28	※	〃	どの子もいきる学校生活	越　修一
11．24	※	〃	豊な心が育つ	大和龍一
平成5．1．12	※	〃	道一筋に生きる	黒岩　隆
1．13	※	〃	情報化社会と学校教育	松原忠一郎
1．19	※	〃	国際化時代と人づくり	越　修一
1．22	※	〃	相談の心	松岡忠一郎
産業教育センター				
平成4．6．10		情報処理	CAI基礎	越　修一
9．28		〃	〃	松岡忠一郎
6．29		〃	パソコン入門1	赤塩　仁
8．26		〃	〃	中村敏生
10．21		〃	〃	黒岩　隆
11．11		〃	MS－DOS入門	征矢野安政

ク　姉妹校研修

調査事務所名	期　日	訪問学校名	研修内容	参加者
長　野	平成5．2．16	通明小学校	授業参観・談話等	伊藤克己，松岡忠一郎 中村　寛，藤沢袈裟一 青木一男，出河裕典
	平成5．2．16	篠ノ井西中学校	授業参観・談話等	松岡忠一郎，中村寛 馬場信義，井口慶久 本田　真，臼井直之 酒井健次
	平成5．3．2	篠ノ井高校	授業参観・談話等	馬場信義，井口慶久 西山克己，白沢勝彦 夏目大助，酒井健次 黒岩　隆
佐　久	平成4．11．6	東中学高校	授業参観・談話等	青沼博之
	平成4．12．5	岩村田小学校	授業参観・談話等	青沼博之，征矢野安政
	平成4．12．22	岩村田高校	授業参観・談話等	田村　彬，依田謙一 藤原直人，桜井秀雄
	平成5．2．24	岩村田高校	授業参観・談話等	青沼博之
上　田	平成5．2．12	染谷丘高校	授業参観・談話等	川崎　保，甲田圭吾 寺沢正俊，西村政和 柳沢　亮
中　野	平成5．2．26	中野調査事務所	講演　中野西高校教頭	関所長以下全調査研究員14明（中野市からの派遣職員含む）

ケ　県内市町村および関係機関への協力・指導等

期　日	市町村等	協　力　・　指　導　内　容　等
平成４．４．１～12．31	更埴市	（仮）県立歴史館建設用地内（更埴条里跡）の整理作業，報告書刊行（１名）
	中野市他８市，７町８村他	市町村教育委員会の発掘調査，整理作業 保存処理，報告書刊行等 考古学講座等

平成４年度役員及び職員

理　事　会

理　事　長	宮崎　和順
副理事長	伊藤万寿雄
理　　事	山極　達郎（県企業局長～12月５日）　花岡　勝明（県企業局長12月６日～） 北沢　文教（県高速道局長） 山下　四郎（県文化課長） 宮島　和夫（県北陸新幹線局長） 宮坂　博敏（更埴市長） 森嶋　　稔（県考古学会長） 奥村　秀雄（長野市教育長～３月25日）　滝沢　忠雄（長野市教育長３月26日～） 神村　　透（考古学研究者）
監　　事	石井　俊雄（県会計局会計課長） 深瀬　弘夫（県教委総務課長～12月５日）　三浦　太家男（県教委総務課長12月６日～）

事　務　局

事務局長	峯村　忠司	参　　事	樋口　昇一
総務部長	神林　幹生	調査部長	小林　秀夫
技術参与	佐藤　今雄	総務部長補佐	山嵜今朝寛
総務係長	羽入田博之		
職　　員	青島　重子（主査）　栗林　高広（主任）		
派遣職員	大竹　憲昭		

調査事務所

	長野調査事務所	佐久調査事務所	中野調査事務所	上田調査事務所
所　　長	岡田　正彦	青沼　博之	関　　孝一	堀内規矩雄
庶務課長	山嵜今朝寛（兼）	玉井　昌二	高野　幹郎	越　　清登
庶務係長	羽生田博行（兼）			
事務職員	主査 青島　重子(兼)　主任 栗林　高広(兼) 安藤　唯幸　桑原　衆三	主任　古川英治	鈴木　　仁	神田まさみ
調査課長	百瀬　長秀　原　　明芳(兼整理課長)	臼田　武正	土屋〃　積	廣瀬　昭弘
調査研究員	山極　　充　上田　　真　太田　和夫 平林　　彰　綿田　弘実　島田　正夫 田中正治郎　市川　隆之　松岡忠一郎 青木　一男　伊藤　友久　伊藤　克己 宮嶋　義和　町田　勝則　常長　虎徹 上田　典男　河西　克造　宮下　裕治 澤谷　昌英　野村　一寿　中村　　寛 出河　裕典　酒井　健次　清水　　弘 渕井　英知　黒岩　　隆　月原　隆爾 徳永　哲秀　西　　香子　大和　龍一 馬場　信義　水沢　教子　藤沢袈裟一 西嶋　　力　本田　　真　吉江　英夫 井口　慶久　広田　和穂　山中　　健 寺内　隆夫　長谷川桂子　吉沢　信幸 夏目　大助　田中貴美子　鳥羽　英継 西山　克己　谷　　和隆　臼居　直之 白沢　勝彦　贄田　　明	五十嵐敏秀 白鳥喜一郎 飯田　吉隆 寺島　俊郎 近藤　尚義 征矢野安政 宇賀神誠司 田村　　彬 依田　謙一 藤原　直人 桜井　秀雄 木内　英一	臼田　広之 渡辺　敏泰 越　　修一 中村　敏生 林　　正則 奥原　　聡 岡村　秀雄 鶴田　典昭 赤塩　　仁	甲田　圭吾 寺沢　政俊 西村　政和 若林　　卓 川崎　　保 柳沢　　亮
調査員	宮入　英治　下平　博行　藤倉美登里（～６．30）	興水　太仲 尾台　　昇		

長野県埋蔵文化財センター年報 9　1992

発 行 日　平成 5 年 3 月31日
編集発行　㈶長野県埋蔵文化財センター
〒388　長野市篠ノ井布施高田字佃963の 4
TEL　0262－93－5926
印　　刷　信毎書籍印刷株式会社
〒381　長野市西和田470
TEL　0262－43－2105